

平成 2 1 年 度

研 究 紀 要

創

TSUKURU

第 1 2 号



北海道今金高等養護学校

巻 頭 言

本校は平成 9 年に開校してから、道南地域の知的障がい高等養護学校として、職業教育を中心に教育課程を編成し、生徒の社会自立・社会参加に向けた教育に取り組んできました。社会への移行を進める上で、ここ数年の子ども達を取り巻く状況の変化は大きく、新たな課題を投げかけております。少子高齢化社会となり、産業・経済状況の構造的変化、雇用形態の多様化など、将来を見通すことが困難な状況になってきました。更に長引く経済不況もかさなり、働きたくても働けない人や、いわゆる「ニート」と呼ばれる若者が増え社会問題化してきました。

このような状況を踏まえ、子どもたちが将来主体的に自己の進路を選択し決定できる能力や勤労観や職業観を身につけ、社会人として職業人として自立していくことができるようにするキャリア教育を早い段階から推進されることが求められており、今回改訂された新学習指導要領においても、主要な事項としてあげられています。

本校もこうした課題に対応すべく、時代状況を踏まえた研究をこれまで推進してきました。そして、今年度からは第 5 次研究として、研究主題を「社会参加・自立をめざした働く力の育成」として、主に教育課程の編成と授業の充実を目指した研究を推進することにしました。高等部の 3 年間は、進路実現のために与えられた限られた時間です。その中で社会人、職業人としての自立の基礎を培うには、日々の着実な積み重ねしかありません。私たちは、毎日の授業の中身が生徒一人一人の教育的ニーズに基づき、社会自立に繋がる内容と指導実践であるかどうかを常に検証することが求められます。本研究では、課題研究として各学年が研究授業と事例研究を中心にその検証を進めています。また、プロジェクト研究として、体力づくりと指導内容表の検討、更に進路指導部での現場実習を通しての課題を確認し、その解決への方策を考察しました。

本研究は、年次研究の 1 年目のまとめとしたもので、内容は十分に討議し、研究されているものとは言えませんが、皆様にご高覧いただき、忌憚のない意見をいただくことにより、よりよい研究にしたいと思っております。今後も、本校へのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 22 年 3 月

北海道今金高等養護学校長

播 磨 正 一

目 次

<巻頭言>

第Ⅰ章	研究の取り組み	I－1～5
第Ⅱ章	課題研究	
	1 学年	Ⅱ－1 -1～12
	2 学年 産業科	Ⅱ－2 産-1～7
	2 学年 農業科	Ⅱ－2 農-1～4
	2 学年 生活家庭科	Ⅱ－2 家-1～10
	3 学年	Ⅱ－3 -1～17
第Ⅲ章	プロジェクト研究	
	体力づくり	Ⅲ－1～9
	指導内容表（別紙）	
第Ⅳ章	調査研究	Ⅳ－1～11
第Ⅴ章	寄宿舍の研究	Ⅴ－1～8
第Ⅵ章	研究の成果と課題	Ⅵ－1～2

<あとがき>

<共同研究者>

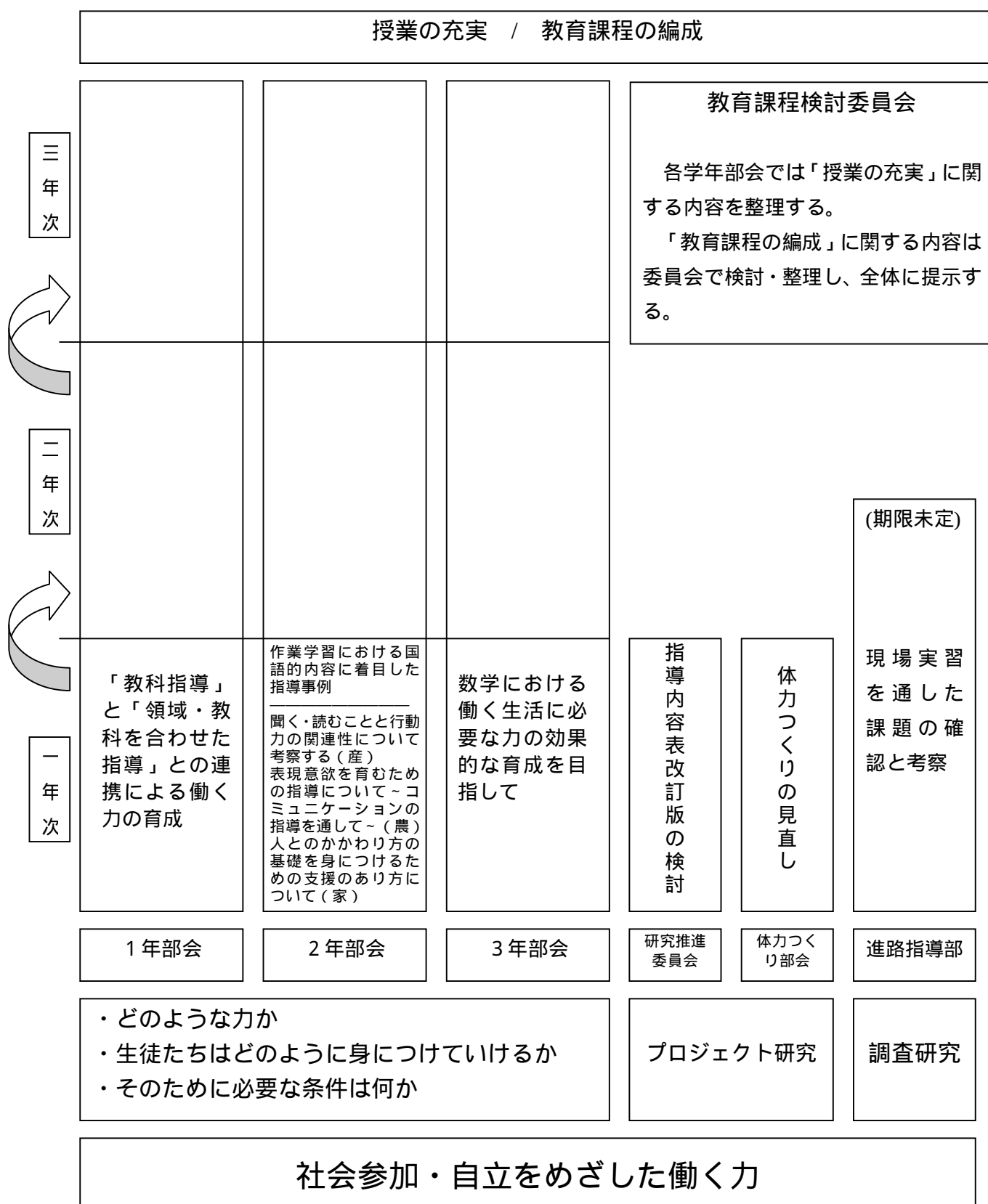
第 章

研究の取り組み

- 1 研究主題 「社会参加・自立をめざした働く力の育成」
～ 教育課程の編成と授業の充実を目指して ～
- 2 研究期間 第5次研究：平成21～23年度の3カ年
- 3 主題設定の理由
本校の生徒たちは、卒業後社会の一員として生活を送ることになる。それぞれの特性などにより進路先は多様ではあるが、一人一人の生徒たちは、社会の一員として自立をめざすこととなる。そのためには、在学中から「働く力」を身につけていかななくてはならない。生徒たちが社会参加や自立をめざす上で、どのように働く力を育成していくか、3カ年を通して教育課程の編成と日々の授業の充実を目指しながら検証していきたい。
働く力を幾つかの要素に分け、それらを育成するための効率的な方法を探り、実践に生かしていくことをめざし、本主題を設定した。
- 4 研究グループと内容：
課題研究 各学年（国語、数学、生単、作業から2つ以上を関連づけて選択）
内容は、事例研究、授業研究、教材教具研究を含め、3カ年の見通しをもって各学年で計画する。
プロジェクト研究：
体力つくりの見直し（体力づくり部会）
～ 生徒個々の運動能力に応じたきめ細かな取り組みを探る～
指導内容表の検討（研究推進委員会）
調査研究：進路指導部「現場実習を通じた課題の確認と考察」
全員が何れかのグループに所属し、なるべく重ならないように配慮する。
- 5 進め方：課題研究は学年会にて、体力づくりは教科部会にて、指導内容表は研究推進委員会にて、調査研究は進路部会にて進める。
取り上げた教科領域は3年間継続して行うことを原則とする。
- 6 3カ年の流れの例：
1年次 ○取り上げた形態教科から、「社会参加・自立をめざした働く力」を身につけるために必要な要素を、指導内容表を元に整理する。
○その要素を身につけるために、どのように授業の中で展開できるか仮説を立てる。
例：（数学の場合）「お金を自分で管理し、適切な使い方を覚えることにより、働く力（意欲）が高まる」
2年次 ○立てた仮説を検証するに当たり効率的に授業を展開できる方法を探る。
○教材教具や学習プリントなどの開発（作成）や授業の工夫をする。
例：計算機を使った計算問題、家計簿（小遣い帳）の使用、生活に必要な物や欲しい物の値段をインターネットなどで調べる。
3年次 ○仮説を検証する。
○研究授業を行う。
学年全体で取り組み、対象の形態教科担当者のみで行うことのないように周囲で配慮する。
所属する学年によっては、3カ年間同じ生徒が対象になるとは限らない。
教師の働きかけ、生徒の様子、変化、配慮や工夫をした点等について、客観的な記録をとる。

校内研究 第5次研究の構造図

日々の授業の中から、生徒が働く力を身につけていく上で課題となる点を取り上げて整理し、どのような方法で授業に反映することができるかを 3ヵ年の研究を通して校内全体で考えていきたい。



■ 全体研修会

第1回（平成21年4月17日）

- （1）校内研究（第5次研究）について
- （2）個別の教育支援計画

第2回（6月12日）

- （1）校内研究、各グループのテーマ発表

第3回（10月30日）

- （1）校内研究中間発表
- （2）新学習指導要領学習会

第4回（平成22年2月26日）

- （1）校内研究報告会

■ 研究推進委員会

第1回（平成21年4月13日）

全体研修会について

第2回（6月19日）

全体研修会について

プロジェクト研究『指導内容表の見直し』について

第3回（10月23日）

全体研修会について

プロジェクト研究『指導内容表の見直し』について

第4回（平成22年1月26日）

全体研修会について

プロジェクト研究『指導内容表の見直し』について

■ 特別支援教育研修会

日時 平成21年8月17日(月) 13:00～15:00

場所 本校体育館

講演 『新学習指導要領に学ぶ発達障害への対応とキャリア教育の充実』

～ 小・中学校、高等学校、高等養護学校の新たな実践への期待 ～

講師 北海道立特別支援教育センター 教育課長 日向 正明 氏

内容 テーマ1 学習指導要領から学ぶ発達障害への対応

< 特別支援学校学習指導要領改訂、移行措置について >

(1) 学習指導要領までの経緯

平成17年 2月 学習指導要領の見直しに着手(大臣からの要請)

平成18年12月 教育基本法改正 平成19年6月 学校教育法改正

平成20年 1月17日 中央教育審議会「答申」

平成20年 3月28日 幼稚園、小中学校学習指導要領(文部科学省告示)改訂

平成21年 3月 9日 高等学校、特別支援学校学習指導要領(文部科学省告示)改訂

(2) 学習指導要領改訂の基本的な考え方

- ・教育基本法改正等で明確になった教育の理念を踏まえ「生きる力」を育成
- ・知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視
- ・道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成

(3) 学習指導要領の実施時期(高等部)

高等学校に準ずる教科等については、高等学校の実施スケジュールに準じて実施。

ただし、次の教科等については、先行して実施。

(H22～総則・道徳・自立活動、H24～数学・理科先行実施、H24～学年進行で実施)

(4) 改訂の主な内容(知的高等部)

- ・卒業までに履修させる総授業時数は、現行どおり3,150時間を標準とする。
- ・各教科の指導について、具体的な指導内容を設定する必要があることを明確化する。
- ・各教科、道徳、特別活動及び自立活動の全部又は一部を合わせて指導を行う場合においても、具体的に指導内容を設定することを明確化する。
- ・一層弾力的な教育課程が編成できるようにする観点から、各教科及び総合的な時間については、配当学年及び当該学年における授業時数を定めることとする。
- ・職業教育を充実させる観点から、専門教科「福祉」を新設する。

(5) 自立活動の改訂について

- ・障害の重度・重複化、多様化に応じた指導を充実するため、新たな区分として「人間関係の形成」を新設。
- ・これまでの区分の下に設けられていた項目を見直し、具体的な指導内容がイメージしやすくなるよう表現の工夫を行い、6区分26項目に整理。

テーマ2 障がいのある児童生徒のキャリア教育の充実

(1) 障がいのある子どもたちに対して私たちは何を目指しどこへ導こうとしているのか？

キャリア教育

・キャリア教育とは？

「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」

・キャリア教育の基本的な考え方とは？

学校の教育活動全体を通じて、児童生徒の発達段階に応じた小学校段階からの組織的・系統的なキャリア教育の推進が必要

キャリア教育で大切なことは「夢や希望をもつこと・育てること」

勤労観と職業観

・勤労観 日常生活の中での役割の理解や考え方と役割を果たそうとする態度、及び役割を果たす意味やその内容についての考え方

・職業観 職業についての理解や考え方と職業に就こうとする態度、及び職業を通して果たす役割の意味やその内容についての考え方

確かな勤労観が基盤となって職業観が培われる。

児童生徒一人一人に応じた系統的な支援

・個人差への配慮

本人の思いや願いを受け止めて、将来の生活を豊かにするための課題を設定する。

本人の思いや願いは、検査では分からない。日常の関係の中で知る。

・系統的な支援

本人や保護者の願いを大切にする。

目指す将来像に向かって道筋をえがく。

個別の教育支援計画・個別の指導計画の活用による実践

(2) 知的障害高等養護学校の取り組みから学ぶ点は？

今金高等養護学校におけるキャリア教育

・障害を克服する意欲を高め、社会生活に必要な基礎的・基本的な態度や能力を身につけ、積極的な社会参加・自立する生徒を育成する。

キャリア教育充実のポイント

・勤労観・職業観が育成されているか？

・一人一人の発達段階や実態に応じて、卒業後の生活や在学中の生活を見通した支援を行っているか？

キャリア教育と進路指導

実習先の開拓、障害者雇用に関する援護制度の利用手続き

ハローワーク・福祉事務所等関係機関との連携、福祉サービスの利用、卒後支援

第 章

課題研究

「学年研究」

第 1 学年部会の実践

1 第1学年部会の実践

(1) 研究主題

『教科指導』と『領域・教科を合わせた指導』との連携による働く力の育成

(2) 研究主題設定の理由

本学年の生徒は、中学段階で在籍していた学校(及び学級)が特別支援学校、普通中学校(通常学級、特別支援学級)と様々である。それだけに、これまで受けてきた教育内容も、個々の発達段階や課題も様々である。

本校は職業教育を中心とした教育活動を展開しているが、生徒一人一人にとって教育上効果的な指導を行うためには、まず生徒の実態を的確に把握しなければならない。そして、どの指導場面で、どのような内容を、どのような方法で指導するかを、よく吟味しなければならない。さらに、社会参加・自立に向けた働く力を育成するには、1年次という早期の段階から生徒自身にそれを意識させ、実践的な力が身につけられるよう指導を工夫していかなければならない。

今年度、本校では教育課程と指導内容表が改められ、新たに「国語」「数学」の時間が設けられた。これを契機として、教科指導と領域・教科を合わせた指導(以下「合わせた指導」と略す)の在り方について実践を通して検証し、生徒の将来へと結びつく教育活動を展開することを目指し、本主題を設定した。

(3) 研究の目的

- ア 教科指導と合わせた指導の在り方について、実践と検証を行う。
- イ 生徒の課題を明確にし、それに即した教科指導と合わせた指導の方法を探る。

(4) 研究の内容と方法

研究を進めるにあたっては、生徒の実態を詳細に把握し、課題を明確にし、特に指導に力を注ぐべき重点課題を学年として共通理解し、それについて研究を重ねていくことが望ましい。しかし、研究をスタートする1学期前半の段階では、新しい環境での学習や生活にまだ慣れておらず、現場実習や学校祭といった大きな行事を経験していない段階では、生徒がうまく「自分」を出すことができていない。よって、大まかな実態や課題は把握できているものの、知識・技能、性格、特徴、価値観など詳細な実態を把握し、本質的な課題を明確にすることは困難である。

一方、教育課程・指導内容表の改編により新設された教科「国語」「数学」の指導内容や方法は、これからの実践と検証を繰り返して具体化していくという段階である。それに伴い、既存の教科、領域、合わせた指導の内容や方法についても見直しを進めていかなければならないことは必至である。

こうした状況を踏まえ、今年度の研究はいわば次年度以降の“研究のための研究”であると押さえ、以下の3点を柱とする。

ア 生徒の課題の整理

～個々の生徒の実態と課題の把握に努め、学年としての実態と課題を明らかにする～

学年職員全員が、指導場面ごとに記録をとる、見かけたとき気になった点をメモするなど意識・工夫し、学級指導者(主に担任)を中心に生徒の実態を捉え、まとめていく。また、個別

の教育支援計画、指導計画、通知票なども踏まえながら、個々の課題についても学級担任を中心に明確にしていく。学年部会においては、生徒の様子や報告に加え、学級担任を中心にまとめる生徒実態についても定期的に確認し合い、学年指導者間の綿密な共通理解を図る。

イ 指導の課題の整理

～教科と合わせた指導との関係性を明確にし、働く力を伸ばす指導・連携の在り方について考察を進める～

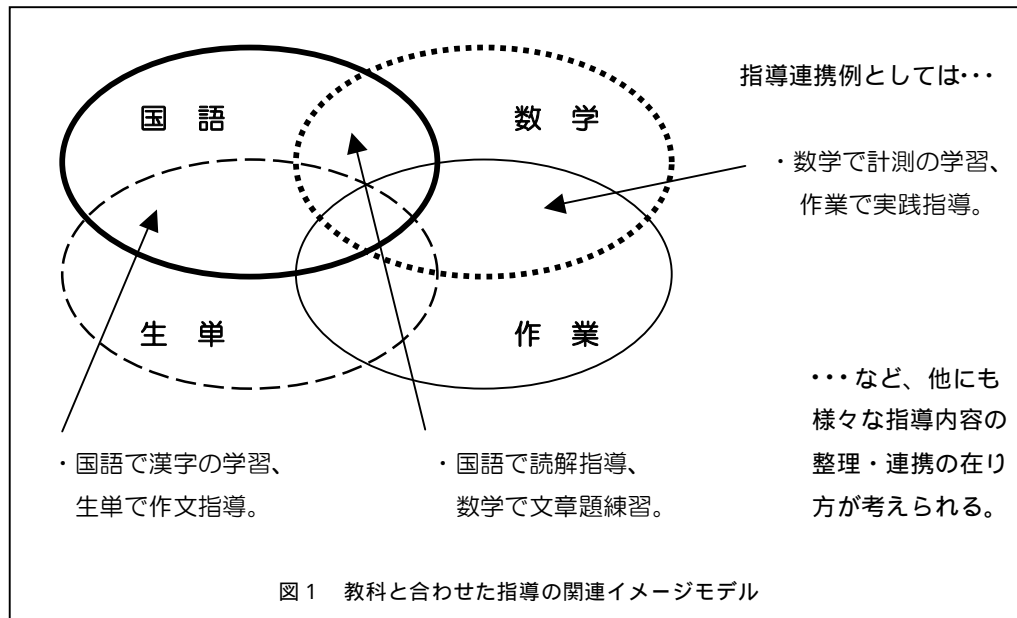


図1 教科と合わせた指導の関連イメージモデル

教科と合わせた指導の関係を図1のようなイメージで捉え、指導内容表を活用しながら、各指導（授業）担当者間で指導内容や方法、時期等の調整を行い、単元及び題材の指導計画を作成する。単元及び題材の指導期間中は、常に授業の成果や課題、生徒の様子を報告し合い、状況によっては指導内容を調整しながら進める。また、これらについて整理して記録を取り、次の指導に生かせるようにする。

ウ 重点課題の明確化

～次年度から重点的に指導（研究）する課題を決定し、方向性を設計する～

「生徒の課題」と「指導の課題」双方の観点から、特に本学年の指導において重点と位置づけるものを「重点課題」として決定する。なお、それが複数になることも考えられるが、緊急性、重要度、第5次研究主題に沿うか等を十分吟味した上でいくつかに絞り込む。決定後、重点課題の解決にむけた次年度の研究について、おおよその取り組みの方向性を決める。

（5）研究推進計画

- ・ 4月 年間指導計画の作成、決定
- ・ 5月 今年度研究についての概要決定、研究計画発表会
- ・ 6月以降 研究の推進（生徒実態の記録、指導の実践と検証）
- ・ 10月 研究中間発表会
- ・ 1月 研究の整理、重点課題の決定、次年度の取り組みの方向性決定
- ・ 2月 研究報告会
- ・ 次年度以降 重点課題についての研究の推進

(6) 研究の実際

ア 生徒の課題の整理

	産 業 科	農 業 科	家 庭 科
(類似している実態・課題)	● あいさつ・返事・言葉遣い等の基本が身につけていない	● あいさつ・返事などの習慣がまだ身につけていない ● 目上に対する態度や言葉遣いがまだ身につけていない	● 目上へのあいさつや言葉遣い等が身につけていない ● 大きな声であいさつできるが、恥ずかしくてできない生徒がいる
	言われた時には素直になれる 注意されたことを意識できる時間が短い	注意されたことに対して改善を試みるが、改善されると安心して失敗を繰り返す傾向がある 精神的に幼く、素直さに欠け言い訳をする生徒が多い	言われたことはやるが、言われないとやらない 年齢よりも幼い言動がある
	・ 自己評価が高く現実との差が大きい ・ 他者や周囲を考慮することが少ない	・ 自己理解を深める必要がある ・ 他者や周囲を考えた言動が少ない	
		・ 自ら進んで行動したり、気をつけて行動したりすることが少ない	・ 自主性があまりみられない
	・ 個性豊かで明るい生徒が多い	・ 穏やかで気の優しい性格である	・ 明るく優しい穏やかな生徒が多い
	・ 忍耐力をつける必要がある	・ 将来の進路について真剣に考えている生徒が多いが、具体的な行動に現れていない(わからない) ・ 些細なことを気にしすぎる ・ 行動が遅い	・ 実直で何事にも一生懸命、お互いに伸びようと真剣に努力する ・ 生活経験の差が大きい ・ 体力をつける必要がある

表 2 本学年生徒の実態・課題一覧

表 2 は、本学年 3 学級が担任を中心としてまとめた実態・課題を一覧にしたものである。各学級で類似している実態・課題のうち、3 学級とも共通して課題であると挙げている点は“●”で示した部分「あいさつ・返事・言葉遣い」と、“ ”で示した部分「指示や注意に対する対応」である。よって、この 2 つが本学年の生徒の課題といえる。

細かく見てみると、「あいさつ・返事・言葉遣い」は、全くできないわけではないが、相手や状況によって適切に行わなかったり、望ましくない対応をとってしまうことから、身につけていないといえる。「指示や注意に対する対応」も同じく、注意を全く受け入れないわけではないが、反発したり、時間とともに忘れてしまったりする傾向がある。

イ 指導の課題の整理

本校の教育課程における教科、領域、合わせた指導全ての関係性を明らかにするのは時間的に困難であり、開校以来の実践の積み重ねですでに明らかとなっているものも多数ある。そこで、新設された教科「国語」「数学」、開校以来中枢を成してきた合わせた指導「生活単元学習(以下「生単」と略す)」「作業学習(以下「作業」と略す)」に注目し、『生単と国語』『作業と国語』『生単と数学』『作業と数学』の 4 パターンの関係性を明らかにすることにした。

各授業担当者が実践と結果の整理を行うことで、関係性が具体的に見えてくるよう、4 パターンごとに「授業関連・連携シート」を用いた(資料 1 参照)。各授業担当者が、まず 1 学期に指導した内容を記入し、2 学期はそれを踏まえて指導し、その結果も追記した(資料 2 参照)。これをもとに各授業担当者間で成果と課題について協議することにより、教科・合わせた指導の関係性を見いだすことができた。表 2 と表 3 は、その要点を簡潔にまとめたものである。

合わせた指導での指導内容		国語での指導内容
生 単	○ 作文の作成 ・ 書き方に従う ・ 誤字脱字なく書く ・ わかるように表現する	● 原稿用紙の使い方 ● 漢字・文法・語彙 ● 文章の構成・表現
	○ 作文や意見等の発表 ・ 発表する人の姿勢や態度 ・ 話を聞く人の姿勢や態度 ・ 言葉遣いや声量 ・ 相手にわかるように話す	● 発表の仕方 (声量、滑舌、速さ、姿勢、聞く側の態度等) ● 漢字・文法・語彙 ● 言葉の構成・表現 ● 言葉遣い・敬語
	○ 教材等にある文章の理解 ・ 文章の内容を理解する ・ 質問文等を理解して答えを記入する	● 読み取り (漢字・文法・語彙の活用、内容の理解、相手の気持ちの理解)
作 業	○ 日誌の記入(他、文字の記入に関すること全て) ・ 誤字脱字なく書く ・ わかるように表記する	● 漢字・文法・語彙 ● 文章の構成・表現
共 通	○ あいさつ・返事・報告・相談等 ・ 人と接する際の姿勢や態度 ・ 目上に対する姿勢や態度 ・ 受け答え(言葉遣いやわかる説明)	● 対話の仕方 (声量、滑舌、速さ、姿勢、聞く側の態度等) ● あいさつ・返事 ● 言葉遣い・敬語 ● 文法、言葉の構成・表現
	○ 指示や説明の理解 ・ 口頭で話された内容を理解する ・ 口頭での話を理解して学習を進める	● 聞き取り (文法・語彙・態度の活用、内容の理解、相手の考えの理解)

表2 本学年が分析した生単・作業と国語の指導内容の連携パターン

(ア) 生単と国語・作業と国語(表2を参照)

生単では、行事が終わるたびに多くの場合で作文の作成を行っている。作業では、一日の作業が終わるたびに日誌の記入を行っている。いずれも学習を振り返り、反省して次に生かすことができるように取り入れている活動である。これらを行う際に指導している漢字・文法の正確さ、筆記のていねいさ、経験・事実・感想などを相手にわかるようにまとめる文章力などは、国語の授業でも指導している。また「共通」にあるように、生単でも作業でも同じように指導する“基本的なコミュニケーション”にかかわる2つの事項も、正しい言葉遣いや聞き取りの練習といった国語の授業で指導している。このように、生単や作業における言葉や文字を用いた指導に関しては、国語で指導する内容と深い関係にあることがわかる。

(イ) 生単と数学・作業と数学(表3を参照)

生単では心とからだの学習や調理学習において、作業では学科によって作業内容は異なるもののあらゆる工程において、数を数える、計算する、はかるといった活動を取り入れている。また生単では主に買物学習において、作業では学校祭の生産品販売などの販売活動において、計算して金銭を扱う活動を行っている。それらを行う際に指導している加減乗除の計算方法、計量・計測の仕方などは、数学の授業でも指導している。また「共通」にあるように、生単でも作業でも同じように指導する“時間”にかかわる事項も、時間の理解や計算といった数学の授業で指導している。このように、生単や作業における数を用いた指導に関しては、数学で指導する内容と深い関係にあることがわかる。

合わせた指導での指導内容		数学での指導内容
生 単	心とからだの学習 ・身長や体重など、自分の体について知る	量と計測 ・長さや重さの理解
	調理学習 ・材料や道具のうち、必要な分だけ、数えたり、はかったりして用意する ・材料を適切に切り分ける ・完成した料理を適切に盛り分ける	数と計算 ・数の大小の理解 ・加減乗除の計算 ・小数、分数、概数の理解 量と測定 ・長さや重さの理解、単位の換算
	買物学習 ・予算と値段を比較して買物を計画する ・概算をする ・的確な金額を支払う ・金銭出納帳を記入する	数と計算 ・加減乗除の計算 ・小数、百分率（消費税）、概数の理解 ・表やグラフを用いた計算問題練習 金銭 ・金銭（収入・支出・残高）の計算と理解
	現場実習事前学習・仕事の練習 ・実習先の仕事内容によるが、作業における「数を数える工程」や「計量・計測の工程」を応用して練習する	数と計算 ・数の大小の理解 ・加減乗除の計算 ・小数、分数、概数の理解 量と測定 ・長さや重さの理解、単位の換算
作 業	数を数える工程 ・物の数や作業回数などを数える ・多くの物を計算等で効率的に数える ・目標数や結果数（出来高）、残りの数等を数える ・自己記録表を記入する	数と計算 ・数の大小の理解 ・加減乗除の計算 ・表やグラフを用いた計算問題練習
	計量・計測の工程 ・必要な量をはかって抽出・分配する ・およその見当をつけて抽出・分配する ・決められた量や数値に従って作業を進める ・目標数や結果数（出来高）をはかる	数と計算 ・加減乗除の計算 ・小数、分数、概数の理解 量と測定 ・長さや重さの理解、単位の換算
	販売活動 ・電卓を使用して計算する	数と計算 ・加減乗除の計算 ・小数、百分率（消費税）、概数の理解 金銭 ・金銭（収入・支出・残高）の計算と理解
共 通	時間にかかわる意識と理解 ・所用時間を計る ・開始・終了時間、残り時間の意識	時間 ・年月日・日時・分・秒等の理解、それを用いた簡単な計算、時計の見方

表3 本年度が分析した生単・作業と数学の指導内容の連携パターン

（ウ） まとめ

そもそも国語と数学は、これまで生単や作業のなかで行われていた国語的要素・数学的要素を抽出し、それぞれ重点的に指導するべく設けられた教科である。そうして行われた今年度の実践を振り返ると、とりわけ知識・技能に関する基礎は教科で、応用と実践は合わせた指導のなかで行われた傾向が強いことがわかる。実践の途中でさらに必要となる新たな知

識・技能はその実践のなかで指導されることもあるが、おおむね教科と合わせた指導は基礎・基本と応用・実践という関係で結ばれているといえる。

また、生単と作業のいずれでも共通して指導している内容があった。「あいさつ・返事・報告・相談等」「指示や説明の理解」は国語の指導と、「時間にかかわる意識と理解」は数学の指導と関係していた。多くの指導場面で指導されているこれらが、働く力を伸ばす上で重要な指導の課題といえる。

ウ 重点課題の明確化

アから、生徒の課題は「あいさつ・返事・言葉遣い」「指示や注意に対する対応」であるとわかった。イから、指導の課題は「あいさつ・返事・報告・相談等」「指示や説明の理解」「時間にかかわる学習」であるとわかった。そこで、アとイの双方の観点から総合して考え、さらに働く力のなかでも最も基本的かつ重要で、日々の繰り返し指導をとおして早期に身につけさせるべきことは何かを学年で検討した。

検討の際、生徒の課題はこのほかにも「幼さ」「生活経験のなさ」「落ち着きのなさ」「素直さ」などもあるのではないかという意見があった。また指導の課題については指導者の指導方法や授業連携の在り方にまで話が広がり、どの授業においても生活のなかに生かすことができる力を身につけさせることが必要だという意見が多かった。

資料から判明した結果と検討の結果を並べてみると、働くために必要な知識や理解が全くないわけではなく、この１年間の指導のなかで理解できた知識もある。しかし、その知識を普段の生活において実用的に使いこなすことができているのである。あいさつにしても、時計をよむことにしても、生活の場面で使いこなすことができなければ、働く場面でも使いこなすことはできないと考えられる。よって、本学年における重点課題は、日常生活において必要な国語・数学的な基礎的知識を身につけ使いこなす力「活用する力」である、といえるのではないだろうか。

「活用する力」と一口にいえども、知識や技能がなければ活用のしようがない。先述したとおり、知識や技術の基礎は主に教科指導で行われ、応用と実践は主に合わせた指導のなかで行われたことから、次年度においても双方の授業において連携・工夫をし、「活用する力」を伸ばすことを目指したい。また、普段の生活のなかで活用するということは、授業以外の様々な場面において活用できる、ということでもある。よって、あらゆる場面での補足的指導や日々の記録にも力を入れていきたい。

(7) 成果と課題

ア 教科指導と合わせた指導の在り方

(ア) 成果

今年度の研究から、教科（国語と数学）と合わせた指導（生単と作業）には、それぞれ国語的要素・数学的要素を用いた指導場面があり、教科（国語と数学）における指導との関係が密接であることがわかった。また各指導の実践から、教科で基礎・基本、合わせた指導でその応用と実践といった連携構造が成されていることがわかった。教科と合わせた指導、互いの指導内容を有効に生かした“指導の連携プレー”をもって、一部では一定の効果を上げ、今後もこうした連携プレーの必要性があることも明らかにすることができた。

(イ) 課題

授業関連・連携シートを用いた検討のなかで、連携プレーを進めるにあたっての課題がいくつか挙げられた。

- a 教科の指導時間は週に1時間である上、行事や実習などで特別日課を組んだ場合は授業が削減されるため、系統的な指導がしにくく、指導内容が限られてくる。
- b 見通しの甘さや諸処の事情から、教科では年間指導計画どおりに指導することが困難である。進めていくうちに無理があることが判明し、題材や指導期間の変更を余儀なくされることがあった。
- c 連携を意識して指導することが少なかった。指導を進めていくうちに連携できたことに気付くことも多々あり、連携の記録も曖昧な部分があった。

これらのことから今後は、いつ、何を、どの授業で、どのように指導していくかをしっかり検討して連携指導を進めていくという計画性が求められる。

イ 生徒の課題に即した教科指導と合わせた指導の方法

(ア) 成果

生徒の課題を明確にするにあたっては、指導者個々の分析を指導者間で話し合い、共通理解を図ることで具体的にしていけることができた。また教科(国語と数学)はプレテストで実態を把握し、その結果に基づいて4グループに分けて指導した。同じ内容を指導するにしても、各クラスで教材や指導方法を工夫することにより、生徒の理解を促すことができたものもあった。特にあらゆる場面において繰り返し指導していることのなかには、少しずつではあるが知識の定着が図られてきているものもあった。

(イ) 課題

学年での話し合いにおいて、教科(国語と数学)では能力別の4グループに分けて指導を行ったが、各グループ内でも個人差が大きいという意見があった。これは合わせた指導(生単と作業)においても同じことがいえる。個人の能力や理解力に応じてよりわかりやすい指導方法を見いだして指導していかなければならない。また、指導したことをその場では理解しても、時間の経過とともに忘れていく傾向もあることから、しっかりと身につけさせるために定期的あるいは日常的な繰り返し指導をしていかなければならない。

一方、グループの指導者が自分の担当学級以外の生徒を多く指導することになったり、生単の指導を兼ねていないといったことで、不都合が生じることもあった。生徒の課題とじっくり向き合うため、また連携プレーによる指導を円滑に行うための効率的・効果的な指導者割り振りも考えなければならない。

さらに、知識・技能の学習の効果は、働く力を身につけようとする生徒の意欲の影響も受けるのではないかという意見もあった。日常の態度や姿勢、将来に対する意識、自己理解といった方向からの指導にも工夫が必要である。

ウ 次年度からの研究

重点課題を「活用する力」と位置づけたことで、次年度からの研究は今年度の研究主題を引き継ぎ、副題として「基礎的知識・技能を活用する力を育む授業と日常の指導」を設定する。国語、数学、生単、作業における指導を中心として、教材研究や授業研究を推進していく。

(8) 資料

資料 1 授業関連・連携シート（記入例）

平成 21 年度 1 学年校内研究 授業関連・連携シート 例（生単と国語）

番 号	合 わ せ た 指 導				教 科 指 導			
	単元名 授業名	日時 (期間)	授 業 内 容	指導内容表との関連	単元名 授業名	日時 (期間)	授 業 内 容	指導内容表との関連
例	社会見学 へ行こう	7/6～22	・出発前の生単(学級・ 全体)で現地でのてい ねいなあいさつについ て確認を行った。	[生単・公共物の利用とマナー]11	コミュニケ ーションを 楽しもう	6月～ 7月	・ていねいな言葉遣い やあいさつの仕方につ いて各指導グルー プで指導を行った。	[国語・聞く・話す] 15～27、 29～32
1								
2								
3								
【成果と課題】 前期の連携についての成果と課題を、箇条書きでもいいので簡潔にまとめる。								

①生単と国語 ②作業と国語 ③生単と数学 ④作業と数学 の4パターンがあります。

記入・検討の手順

- 1) 1 学期、生単・作業・国語・数学の各担当打ち合わせで話し合い、記入する。あいまいなことはあいまいな表記でも、わからないところは空欄でも今はよい。
- 2) 2 学期、関係担当間であいまい・不明な部分の解明、記入内容に誤りがないか、漏らしている点はないか、今後どのように連携していくかなどを検討しながら、実践とこのシートを用いた記録を継続する。2 学期末、成果と課題についてまとめる。

平成 21 年度 1 学年校内研究 授業関連・連携シート ① 生単と国語

番号	合わせた指導				教科指導			
	単元名 授業名	日時 (期間)	授 業 内 容	指導内容表との関連	単元名 授業名	日時 (期間)	授 業 内 容	指導内容表との関連
1	行事を含む各単元 (遠足、体育祭、社会見学、現場実習、学校祭)	5月から	原稿用紙の使い方に従って作文を書く学習。 誤字脱字等に注意し、相手にわかるような文章を作る学習。		漢字学習 原稿用紙の使い方 わかりやすい文章を作る学習	通年 4月 12月から	よく使う漢字の学習 1マスあける、改行するなどの原稿用紙の使い方の学習 絵を見て簡単な文章を書く、5W1Hを意識した短い作文、文章を読んで簡潔にまとめる等	[国語・書く] 3～6 [国語・読む] 1～14、26 [国語・書く] 1、2、11～13、16～21
2	全単元	通年	発表や改まった場でのあいさつの際に、適宜その仕方(姿勢・態度)、言葉遣い、声量などについての学習。 自分の考えをまとめて、わかりやすく伝える(発表する)ことについての学習。 遠足、体育祭、現場実習(決意発表・報告の2回)、学校祭の作文発表会を行った。(社会見学は計画したが他行事が入り中止となった)		発表の仕方 あいさつや基礎的なコミュニケーション 文法・ていねいな言葉遣い・敬語 わかりやすい文章を作る学習	5月 4月から 6月から 12月から	声量、滑舌、速さ、姿勢等(遠足の作文を用いて練習)あいさつや返事、人と話をするときの態度などの基礎的なコミュニケーションに関する学習 助詞や接続詞等の文法、場面や相手に応じた言葉遣い敬語の種類等 絵を見て簡単な文章を書く、5W1Hを意識した短い作文、文章を読んで簡潔にまとめる等	[国語・聞く・話す] 16～19、22～27、29～35 [国語・聞く・話す] 30～33 [国語・読む] 1～14、26 [国語・書く] 1、2、11～13、16～21

3	学校祭単元	11月～12月	舞台発表(演劇)において、台本を読み、暗記し、役の気持ちを理解し、役になりきって演技する。	[生単・学校行事]1～5 [生単・対人関係]6、11 12	文章を読む 文章から相手の気持ちを考える	10月 10月から	学校祭の台本を用いて、文章の内容を読み取る学習 登場人物の台詞や前後の状況から、人物の感情を考えたり、自らの考えを述べる	[国語・読む] 1～14
4	全単元	通年	学習帳やプリント、説明書き、レシピなどの文章を読み、内容を理解する(読み取り) 説明や指示、注意などを聞き、内容を理解する(聞き取り)	[生単・調理]5、12、13	文章を読む わかりやすい文章を作る学習 話を聞く	10月から 12月から 1月から	簡単で短い文章を読み、内容を読み取る学習 絵を見て簡単な文章を書く、5W1Hを意識した短い作文、文章を読んで簡潔にまとめる等 簡単で短い話を聞き、内容を読み取る学習	[国語・読む] 1～14 [国語・読む] 1～14、26 [国語・書く] 1、2、11～13、16～21

【成果と課題】

- ・年間を通じて生単、国語ともに指導内容を連絡しあって授業展開をしていくことができていた。
- ・国語と生単の相乗効果で、語彙力、言葉の使い方の向上を目指していたが、今後も積み重ねて身につけさせる必要があるといった状況である。
- ・読み書きの基礎は国語で指導してきたが、授業数や配列により系統的・継続的な指導が難しく、完全に習得させるまでは至らなかった。生単の授業で、国語で習ったはずのことを応用したことをしても、うまく応用できていなかった(原稿用紙の使い方が身についていないなど)。
- ・本研究とは別の問題だが、生単で指導したことが、生単の指導内容表に掲載されていない(自立活動や国語に類似項目があるものもあったが)。

平成 21 年度 1 学年校内研究 授業関連・連携シート ② 作業と国語

※学科により作業内容が異なるため、各学科作業担当に記入してもらい、集約したものを以下に記載。

番号	合わせた指導				教科指導			
	単元名 授業名	日時 (期間)	授 業 内 容	指導内容表との関連	単元名 授業名	日時 (期間)	授 業 内 容	指導内容表との関連
1	【産業科】 日誌記入	通年	誤字・脱字や表記が不適切な時、書き直しをさせたり、赤ペンで修正したりする。	[作業・課題意識] 5、7、8 12	漢字学習	通年	作業日誌の記入および日常生活に必要な漢字の学習	[国語・書く] 3～6
2	【農業科】 作業日誌の記入	4月から	作業担当と学級担任が放課後の時間を利用して指導を行っている。		わかりやすい文章を作る学習	12月から	絵を見て簡単な文章を書く、5W1Hを意識した短い作文、文章を読んで簡潔にまとめる等	[国語・読む] 1～14 [国語・書く] 1、2、11～13、 16～21、26
3	【農業科】 作業全般 (作業開始の会・終了の会を含む)	4月から	授業全般で、人の話を聞く、目を見て話す、受け答えの方法、報告・連絡・相談、素直に謝罪する・・・といった「コミュニケーション」の指導内容を意識して指導にあたる。	[作業・コミュニケーション] 51～54、56～59	授業全般	4月から	授業全般で、話の要点を落とさず聞く、簡単な伝言・説明をする、声量に気をつけて話す・・・といった「聞く・話す」の指導内容を意識して指導にあたる。	[国語・聞く・話す] 4、5、 20～24、 29～34
4	【家庭科】 作業全般 (リサイクル、縫工)	4月から	各作業工程で報告・相談・確認を行い適宜挨拶や言葉遣いの指導を行う。	[作業・課題意識] 9、10 [作業・知識・理解] 20、21 24、27 [作業・処理数] 38、42、43 [作業・コミュニケーション] 49～54、57、58、60 [作業・忍耐力] 61、62	あいさつ、初歩的な敬語・丁寧語の使い方、コミュニケーションのとり方	4月から	あいさつや返事・言葉遣いの学習	[国語・聞く・話す] 1、5、 29～31

【成果と課題】

産業科

・作業学習の時間やその後に指導する時はあったが、国語担当と連携して理解を深める学習は特別意識して行わなかった。

農業科

・作業にかかわる指導内容を強化するために、今後は、国語の時間に特別設定して授業を行う必要がある。（国語が今年度から始まったので色々と検討していく必要がある。）

家庭科

・作業学習を通して、縫工室の入退室やあいさつなどが大きな声でできるよう心がけたことで、作業以外での場面でも大きな声であいさつができるようになった。指導者に確認や報告をする場面でも丁寧な言葉で話ができる。

平成 21 年度 1 学年校内研究

③ 生単と数学

番号	合わせた指導				教科指導			
	単元名 授業名	日時 (期間)	授 業 内 容	指導内容表との関連	単元名 授業名	日時 (期間)	授 業 内 容	指導内容表との関連
1	金 銭 学 習 を伴う単元 (遠足、実習、 調理、進路等)	通年	お金の計算(買物の計画、 将来の生活費等の計算) 金銭出納帳の記入	[生単・買物]1～10、15 [生単・金銭・家計]1～6、9、10	数と計算	4月から	加減乗除、実生活に応用 できる計算の学習 消費税、小数点、およその 数に関する学習	[数学・数と計算] 8～29、34～37 [数学・実務] 1～3
2	現場実習	9月～ 10月	実習前の仕事練習(物の数 を早く数える、等分・分数を 活用して仕分ける等)	[生単・働くことに関する知識・ 理解]4～6	数と計算	4月から	加減乗除、分数、数の数 え方、大きな数の理解	[数学・数と計算] 2、3、8～26、30、33
3	生 活 す る 力 を 身 に つけよう	1月から	調理学習(食材の計量、お よその量、指定された量に 分ける、調理時間の意識、 順序に沿って・順序を考え て調理する)	[生単・調理]5、8、10～14、20	重さ・長さ 時間	8月から 4月から	kg、g、km、m、cmの理 解、単位の換算 時計の見方、年月日時分 秒の理解、時間の計算	[数学・量と測定]1～4、8～12 [数学・数と計算]27～33、 36、37 [数学・実務]4～6
4	心とからだ の学習	8月	身長、体重など自分の体 について知る	[生単・しくみ・はたらき]5、6	重さ・長さ	8月から	kg、g、km、m、cmの理 解、単位の換算	[数学・量と測定]1～4、8～12

【成果と課題】

- ・電卓を使った計算も数学の授業では多く取り入れて行っていたので、計算式を示せば電卓を使って計算できる。
- ・式を見て計算(筆算や電卓で)することが得意であっても、いざ実践となると応用できなかったり、文章問題を理解できない生徒がいた。
- ・一方で、番号2のケースでは、数学で学び、生単で練習し、実習で実践できた、という成功例もある。
- ・類推する力(想像力？)や概念形成にかかわることもあり、定着には時間がかかる。指導の繰り返しや工夫も必要である。

平成 21 年度 1 学年校内研究 授業関連・連携シート ④ 作業と数学

※学科により作業内容が異なるため、各学科作業担当に記入してもらい、集約したものを以下に記載。

番号	合わせた指導				教科指導			
	単元名 授業名	日時 (期間)	授 業 内 容	指導内容表との 関連	単元名 授業名	日時 (期間)	授 業 内 容	指導内容表との 関連
1	【産業科】 粘土に慣れよう～ すべての題材	5月から	指定された量の粘土を測るためにはかりの使い方を学習している。各自が成形した製品の数を数えて報告し、全体の出来高を生産表に記入している。	[作業・知識・理解] 19～25 [作業・処理数] 38～44	数と計算	4月から	順序数、加法の学習	[数学・数と計算] 1～12
					重さ・長さ	4月から	重さの単位の学習	[数学・量と測定] 8～12
2	【産業科】 ひだまりへの納品 ～すべての題材	7月から	釉薬の濃さを計測する時に比重計を使用して濃さの単位を学習した。立体物などを成形した際に数の確認をするが、数え方の方法を学習した。('2, 4, 6' '縦×横の掛け算と足し算'を使うなど)		数と計算	4月から	加法、減法、乗法の学習	[数学・数と計算] 8～22、36、37
					重さ・長さ	4月から	単位の理解と計測に関する学習	[数学・量と測定] 単位の理解と計測に関する要素
3	【産業科】 学校祭生産品販売	11月	学校祭の会計では、販売した製品の金額を計算するために電卓の使い方を学習した。	[作業・処理数] 40～43	数と計算	9月から	実生活に応用できる計算の学習	[数学・数と計算] 8～22 [数学・実務] 1～3
4	【農業科】 ポット洗い	4月から	作業量の確認 (100以上の数) 自己記録表の理解	[作業・処理数] 38、40、42 (44)	数と計算	7月～ 8月	数の数え方、大きな数の理解 表の数値の読み方 大小の理解	[数学・数と計算] 2、3、8～11 [数学・図形数量] 6

5	【農業科】 除草	5月から	作業量の確認 (Kg、m) 自己記録表の理解		重さ・長さ	8月から	kg、g、km、m、cmの理解 単位の換算 表の数値の読み方	[数学・量と測定] 1～4、8～12 [数学・図形数量]6
6	【農業科】 貝殻砕き (土壌改良材作り)							
7	【農業科】 トレー洗い	8月から	数え方(「縦×横の掛け算と足し算」の活用など)		数と計算	7月から	トレーを利用したかけ算の指導 ポットを利用したかけ算の指導	[数学・数と計算] 18～20、22
8	【家庭科】 リサイクル作業 (新聞結束、牛乳パック解体、空き缶つぶし、封筒解体、紙の仕分け、公宅・校内回収)	4月から	出来高の確認(10桁の数)	[作業・知識・理解] 20、21、24、27 [作業・処理数] 38、40～44 [作業・コミュニケーション]49～54、 57、58、60 [作業・忍耐力]61	数と計算	4月から	数の数え方 1桁の加減法 四則計算	[数学・数と計算] 1、8、11、20
9	【家庭科】 縫工 (ステンシル、アイロン、ミシン)		目標数・必要数の確認(目標の数までにあといくつかわかる) 決められた幅でアイロンをかける(定規の使い方) 出来高の確認(10桁の数)				数の数え方 1桁の加減法	[数学・数と計算] 1、8、11

【成果と課題】

産業科

・理解不足の生徒に対して作業学習の時間に繰り返し学習する時はあったが、数学担当と連携して理解を深める学習は行わなかった。

農業科

- ・作業担当が数学の指導を行っているため必要な指導を考えて行うことができた。
- ・作業の出来高表を使用したため、表の読み方が容易にでき意欲的に取り組んだと思われる。
- ・早く正確に数えることを数学で学習した。直後のポット洗いで2個ずつ数えたり、10個ずつ数えることを実践していた。
(長さ、重さについては、1学期の予定だったが行えず、2学期に予定変更)

家庭科

- ・出来高の確認をすることにより、次回の作業に望む姿勢を高めることができた。

第 2 学年部会の実践

1 研究主題

作業学習における国語的内容に着目した指導事例
「聞く・読むことと行動力の関連性について考察する」

2 対象生徒

2 学年 産業科：A 君

3 生徒の実態と概略

主たる障害	知的障害 自閉的傾向
研究主題に関する実態	・ 田中ビネー知能検査の結果より I Q：51（児童相談所） ・ 国語的内容の理解力は、小学校 3，4 年程度の漢字が混ざった文章を読んだり書いたりできる。 ・ 作業学習に対する興味・関心・意欲は高い。特に、箱折りなど、繰り返しの単純作業が得意で、長時間集中力を維持することができる。 ・ 個別の質問に対しては、ある程度内容を記憶し時系列に沿って回答（話す・書く）することができる。とっさの質問に対しては、相手の意図を汲んだ回答は難しい。真面目に返答すべき場面でも、冗談交じりに答えたり見当違いの発言をしたりする。 ・ 一斉指導時は、指導者を注視し一見真剣に聞いているようだが、その後適切な行動に移せないことが多い。

4 研究主題設定の理由

昨年度は、本生徒を対象とした事例研究に取り組んだ。成果として、長期間に渡り、後片付けや清掃のたびに、他の人の仕事に目を向けるような言葉掛けや板書を繰り返してきたことで、徐々に自分の行動を選択できるようになってきた。例えば、製作以外の清掃活動においても進んで取り組む様子が見られるようになってきた。ただし、自学科作業以外への般化はほとんどなく、指導者が発する文言を工夫したときや板書等で配慮した場合、行動の的確さは明らかに向上したが、指導者が特別な配慮をしなかったときは、指示後に適切な行動を取れなかった。また、A 君以外の生徒にも同様の配慮を行っていたため、他生との間に明確な差は見られなかった。さらに、集団の大きさに比例して行動を選択できず、黙って立っている場合が多かった。

指導者側が（わかりやすく誤解がないように）ある程度配慮し続けることは不可能ではない。しかし、本生徒は一般就労を強く希望しており、念願叶ったとしても卒業後、学校のように本人がわかりやすく物事を提示したり説明したりしてくれる環境は望めないだろう。聞いた話を理解し次の行動に移すことができる力を、少しでも伸ばしていくことが職業生活において必要不可欠であると考え、この研究主題を設定した。

5 研究の内容と方法

（1）研究の内容

「聞いた話を理解し次の行動に移す力」とは何だろうか。集中力、注意力、理解力、読解力、記憶力、想像力、視覚的・聴覚的認知力など挙げればきりが無いが、これら様々な要素を動員しながら総合的に判断し、行動に導く力のことであると考え。当然すべての向上を望むのは無理がある。まずは、伸ばせる力を見極めることが重要である。そのためには、どのような時に適切な行動に移せたのか、（またはその逆）を詳細に記録し、より細かな実態把握を行わなければならない。指導者の発した言葉や集団の大小などの諸条件も関係するであろう。本研究では、指導内容・事項の詳細な記録を、来年度から運用される指導内容表に照らし合わせて分析を進めていき

たい。

《対象領域教科：作業学習》

(2) 研究の方法

- ・作業学習をメインにLHRや特別活動など担任が直接指導できる場面で進めていく。
実態の記録については、複数の指導者で客観的に実施できるよう工夫する。

(3) 3カ年のおおまかな流れ

- ・主体的な判断力・行動力の向上を図る《今年度～次年度継続》

(4) 今年度の推進日程

- ・集団の大小、手立てやアプローチ方法の基準を明確にし、行動記録を指導内容表に基づいて蓄積する。その上で、「どのような指示の発し方が有効なのか（簡潔であるか、無駄な情報はないかなど）」、「声の大きさや話す早さはどうなのか」なども併せて検証していく。

《10月～12月》

6 研究の取り組み

(1) 作業学習 ～目標「指示を聞いて適切な行動に移す」～

ア 指導者のアプローチ方法を明確にする

口頭による一斉指示	聞く力
口頭による個別指示（名前を呼ばない）	聞く力
口頭による個別指示（名前を呼ぶ）	聞く力
板書による一斉指示	読む力
板書による個別指示	読む力
個別にメモを渡す・作業日誌を読む	読む力

「 + 」とか「 + 」なども考えられるので、その際は特記しておく。

イ 指導者の発する言葉、板書やメモに記述する言葉など、アの各要素については、試行段階の指導内容表【作業学習】→「コミュニケーション」48～58に基づき行う。

ウ 各教科領域のコミュニケーション、とりわけ「聞く・話す」に関する部分も参考にする。

～参 考～

【自立活動】

6 コミュニケーション→(5) 状況に応じたコミュニケーション

25 話の内容を記憶し、前後関係を比較したり類推したりすることができる。

27 相手や状況に応じた言葉遣いや行動を取ることができる。

【国語科】

「聞く・話す」→「話を聞く」「話を伝える」「話し方」

【日常生活の指導】

「集団生活」→「コミュニケーション」19～26

エ 指示を理解し適切な行動に移すことができたかを記録する。

その際、生徒や指導者の人数についても記録する。

- (2) L H R や特別活動 (学校行事等)
基本的に作業学習と同様に進める。

7 研究の経過

「指示を聞いて適切な行動を移す」といっても様々な状況が考えられる。当初は、あらゆる場面で実態を詳細に記録したいと考えていたが、すべてを網羅することは困難である。可能な限り記録を取り、指導内容表に基づき分析を進め、実態把握を深め、今後の指導に役立てることが本研究の目的である。

月日	教科・形態	様子・場面、考察・検証	アプローチ 6(1)ア ～	指導内容表 との関連
10/1	作業学習 学習集団 6名	皿の成形で型押しの際、まんべんなくスポンジ掛けをしていたので、「全部にスポンジかける必要はないんだよ」と指示した。すると表面の凹凸（指跡）や傷があってもスポンジ掛けをしなくなった。 「全部に～必要ない」は「全部には必要ないが、必要な部分もある」という含みがあるが、言葉通り皿全部と受け取っても不思議ではない。これは指導者の言葉が適切ではなかった。 「表面がきれいだったらかけなくてもいいって言ったんだぞ」と「表面」という単語を付け足し再度指示。 「凸凹と傷だけ消す」の方が適切かとも思ったが、指導者の意図通り凸凹や傷をピンポイントでスポンジ修正ができた。スポンジ修正の意義を理解していたかは別として、指示は正しく理解していたことになる。		「作業学習→コミュニケーション→巧緻性49」 指示は聞けるが意味を取り違えている 「国語科→聞く・話す→話を聞く→1指示や説明を正しく聞き取ることができる」 “正しく”ではない 「自立活動」 「日生」
10/6 火	作業学習 学習集団 6名	10/1の指導内容を成形開始前に本人に確認すると、要点は明確に覚えていた。 週を経ても指示を記憶していた。		記憶
10/6 火	給食配膳 学習集団 6名	作業の全体反省の際「<u>この後も積極的に動くように！例えば配膳とか</u>」という指導者の言葉を覚えていたのか、走って食堂に行きすごい勢いで配膳を行う。要領は悪いが一生懸命さは伝わる。下膳時牛乳を床にこぼし、慌てる。床拭き当番のクラスメイトN君が拭いてくれたが、彼へお礼または謝罪の言葉はなかった。すぐに担任が「A君！		【自立活動】 6コミュニケーション→(5)状況に応じたコミュニケーション 25話の内容を記憶し、前後関

		^{ひとこと} N君に一言言ったか？お前の代わりに拭いてくれたんだぞ」と話す。「はい、今度から気をつけま<u>す</u>」と答える。その後HR教室での歯磨き中、N君に、「A君謝ってきたか？」と聞くと「いいえ」との答えであった。再度A君に「N君にお礼言<u>った</u>かい？」と聞くと、「何のことですか？」といった反応だったが、下膳時の出来事であることを指導者が再度説明し、「N君、さっきはありがとう」とお礼が言えた。自分の罪を認識していないわけでもなく、お礼または謝罪をするつもりがないわけでもない。食堂で先生に指導された時点でA君の中でこの一件は解決したと思っていたようである。確かに指導者は「言ったか？」と疑問を投げかけただけで「N君にお礼または謝罪をなさい」とは言っていない。また「一言」の含み（一言＝お礼または謝罪の意）を理解できなかったとも考えられる。 この場合、指導者の言葉がA君にとっては適切ではなかったと言える。	単発的 単発的	係を比較したり類推したりすることができる。 その時の反応からばつが悪くて言い出せなかったのではないことは明白 言葉の含み
10/7 水	作業学習 学習集団 6名	成形の最後に刻印を押すのだが、産業科のほとんどの生徒が強く押しすぎ、乾燥するとそこから亀裂が入っていた。「強く押しすぎです。軽くでいいから。」と成形班全員に一斉に注意を喚起。A君を含め全員が「はい」と返事をした。 A君以外は、適切な加減で押印できた者、逆に押印が弱すぎた者など様々ではあったが一応指示を理解し実行していたのがわかる。しかし、A君だけは相変わらず穴が開かんばかりに強く押印していた。 「A君！だから強いって。穴開くぞ。」と強い口調で言葉を掛けると、次からは慎重に刻印を押すようになった。 「指示の意味を理解していない」「適切な押し加減が見た目で判断できない」「巧緻性が伴わない」ならば、2回目の注意でも改善はしないはずだが、即修正されその後のミスもなかったことから、1回目の全体指示を聞いていなかったことになる。	名前を呼び、注意を引いてから話した。	「作業学習→コミュニケーション→巧緻性49」
10/8 木	作業学習 学習集団 6名	成形でミスをするが、黙ってやり直していた。（余分な粘土をカットする工程で切りすぎた）ミスしたら報告と謝罪が大原則なので指導者が注意を与えた。同じミスを防ぐため原因を明らかにする必要があるので必ず報告するように指導した。		「作業学習→コミュニケーション→巧緻性51」 指導後即改善 記憶の保持

		その日の作業日誌には、「今日は作業では失敗したのを先生に報告する前に勝手なはんだんで作業をすすめてしまいました。(以下略)」との記述があった。 指導者の言った言葉を記憶し、要点を整理し正確に記述する力は以前から高かった。		
10/13 火	作業学習 学習集団 6名	粘土表面のわずかな指跡など些細なことでも、頻繁に報告し謝罪してくる。特に謝罪は必要ないレベルであったが、このあたりの判断は能力的に難しいかもしれない。先週の反省をかなり意識している表れともいえる。 後片付け・清掃は率先して行おうとする意欲が伺えた。だが、優先順位の判断は難しく、仕事の選択は総じて適切ではない。		
* 以下、12月16日まで続くがスペースの都合上割愛				

9 成果と課題

(1) 成果

今回の研究でいくつかの興味深い傾向がわかった。私など、つい「自閉症だから」という一くくりで済ませてしまいがちだが、自閉症と言っても個性は千差万別であり、得手不得手があるのは当然である。いかに狭い視野で生徒を捉えていたかを反省しなければならない。実態を詳細に記録、考察することでA君の実態が今まで以上に見えてきたのは、ひとつの成果である。

ア 自閉症に多く見られる特性とA君の実態で共通する部分

(ア) 感覚的な記憶より手続き的な記憶の仕方が得意である。

終了時刻は言えるが、量としての時間の感覚を持つことが困難であった。残り30分以上もあるのに「作業を終えて片付けに入ったほうがいいでしょうか」と聞いたり、5分前なのに「あと5分でもう1個作れるか」という問いかけに「余裕です」と答えたりしたことがあった。1個の成形を終えるのに自身が要する時間(15分～20分)の感覚があれば、容易に推測できるはずである。【指導内容表→作業学習→時刻時間43, 44, 46, 47】は難しく、45はできる。

「～時になったらやめる」と期限を明確にすると、確実に時間を守ることができた。ただし、期限の提示方法は注意が必要である。(以下「イ」以降参照)

(イ) 短期記憶より長期記憶が得意である

指示後、適切な行動に移せなかった場合の多くは、とっさの単発的な言葉掛けが多かった。2文節程度の簡単な指示でも焦って混乱する様子が見られた一方で、個別にじっくり指導した場合は、週をまたいでもしっかり言われたことを記憶していた。複数の情報が絡み合っている、要点をまとめ必要な情報を記憶していた。つまり、その場の単発的な言葉掛けより長期記憶に働き掛けるアプローチが有効であるということだ。

(ウ) 聞きながら学ぶより、動作・操作が伴った学習方法が得意である。

作業工程などは、新しい製法を覚えるのも比較的短時間で(ほとんどの場合指導後すぐに)一度覚えると実直に反復し、またそれを持続できた。窯業作業はその性質上、実演や実際に手先を動かしながらの指導が多いためと思われる。ただし、自閉症の生徒の中には、しばしば繰り返しの作業で自分なりの楽な方法に変化してしまう者も多いが、教わった手順や型などを崩さず真面目に実行できるところは、A君の優れている点である。

(エ) がんばりどころや休むべきところを取捨選択するのが難しい

「A 雑巾を絞って干す」「B 皿を成形する」という仕事に対してA B同じ労力と時間を要してしまう。他の人がAを行っていた場合、別の仕事を選ぶことはしない。

(オ) 一斉指示=集団の大きさに比例して指示が通りにくくなる

「産業科の人は～」 「2年生は～」 「(生単や体育)～先生のグループは～」などが特に苦手で、所属名では通らないことが多い。1人だけ間違えた行動をするケースが多かった。

これについては、実態を知った多くの指導者が一斉指導時にはA君だけに念を押す対応が日常化したため、検証するにはデータ不足の感が否めない。

(カ) 冗談と本気の区別が理解できない

【自立活動→人間関係の形成→他者の意図や感情の理解】

イ 自閉症に多く見られる特性とA君の実態であまり一致しない部分

内面的には該当するのかもしれないが、日常的にほとんど見られない。

(ア) 必ずしも聴覚より視覚的な情報処理が得意ではない。

2文節程度の指示や時刻など板書やプリントの情報を正しく読み取ることが難しい。
むしろ口頭指示の方が伝わりやすい。

(イ) 同時に複数の情報を処理することは難しくない。

(ウ) 注意散漫で、あらゆる妨害(音や刺激)によって気が散りやすい。

物事に集中できない。話についていけない。いつもボーっとしている。

(2) 課題

実態把握は深まってきたが、まだまだであると感じる。特に苦手意識のある人物と話しやすい人物とで対応に大きな差がある。A君に限ったことではないが、日頃、指導をしたり、コミュニケーションを取るためにはそれなりの「関係」が必要である。「関係」を作るには食事を一緒にする、遊ぶ、話す、学習に取り組むなど何らかの共同作業をすれば自然にできてくるのだが、なかなかそうはいかない。とにかく自閉症に限らず、生徒たちと関わるには人間関係が必要である。

正直に告白するならば、A君は担任（というより作業担当）を苦手としている。学習でのやりとりで支障を感じたことはないが、担任との会話では少なからずストレスを感じているはずである。一方で、さほど緊張を感じず会話ができる指導者や友達が他にいることは事実であるし、実際に話のやりとりを聞いているとA君の語彙の豊富さやユーモアにしばしば驚かされる。担任との会話では耳にしない表現が次々に飛び出してくる。今回の実態把握も、複数の指導者で客観的に記録を行う予定だったが、実際は担任1人で行ってきたため、主観が多分に含まれていることは間違いない。次年度に向けて、より深い実態把握を行うためにも複数の指導者による視点は必要不可欠であろう。

もう一つは、実態が見えてきただけに、どの部分を伸ばしていくかの見極めも現段階で明確になっていなければならない。仕事の優先順位であったり、時間の管理であったり、様々な壁が立ちしかるであろう。情報の見落としや聞き落としは日常的に起こるだろう。一般就労を希望するA君にとって、限られたサポートの中で安定した職業生活を送るために本当に必要なスキルとは何かを選び出して指導していく必要がある。

最後に基本的であるが、何かを身に付けさせようとするならば、指導者の側も正しい見本を示さなくてはならないということである。指導者の側がきちんとやると、真面目なA君はその通り真似をして習得しようと努力する。そして、日記に指導された内容を細かく書いてくる律儀なところがあり、指導者にとっては実に喜ばしいことである。

1 研究主題

「表現意欲を育むための指導について」～コミュニケーションの指導を通して～

2 対象生徒

2 学年 農業科 M 君

3 生徒の実態

主たる障がい	知的障がい	諸検査	田中ビネー知能検査：IQ 47 (H18.6.8：〇〇児童相談所)
事例題に関する実態	・ひらがなは、ほぼ正確に読むことができる。しかし、一文字ずつ読む程度。 ・ひらがなの書きは、字が抜けたり濁音を正しく書くことができない。(筆圧が弱い) ・漢字やカタカナは、ほとんど読み書きができない。(漢字は自分の名前と小1程度の簡単なものなら読み書きできる) ・作文は苦手意識が強く、書きたがらない。(中学校まで書いていなかったとのこと) ・話を集中して聞くことができない。(正しい姿勢を保持できない) ・保護者は、生活するにあたって本人が困らない程度の読み書きができるようになってほしいという願いがある。		

4 題材設定の理由

昨年は生活単元学習で合わせた指導の中で国語の課題に着目して指導を行った。今年度は国語の教科学習が始まり、読み書きを始め、話す力の学習を中心に組み組めることとなった。また、作業学習を通して連絡・報告・指示を聞くという部分に着目し、国語と作業学習を通して年間の指導を行い、経過を分析することとした。

5 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

・話す力、報告する力、聞く力を育てる。＜対象教科：国語・作業学習など＞

(2) 研究の方法

・国語・作業学習をメインに学校、寄宿舍生活全般を関連づけて進めていく。

(3) 3 力年の大まかな流れ

・国語と作業学習でのコミュニケーション能力の向上を図る。＜今年度＞
・卒業後に向けて最低限必要なコミュニケーション能力の獲得に努める。＜次年度＞

(4) 今年度の推進日程

・昨年度の経過を踏まえ、今年度の研究内容を決定した。＜教科の取り組み状況を見る＞4～5月
・毎時間ごとに目標を設定し、達成度をはかる。＜通年を通して＞6～3月
・中間発表会
・研究報告会

6 研究の取り組み

(1) 作業学習での取り組み

- ・授業の始めに本時の目標を発表する。＜話す力＞
- ・連絡・報告の徹底。＜話す力・報告する力＞
- ・指示を聞いて、行動できるように促す。＜聞く力＞

(2) 国語での取り組み

- ・週末の出来事を質問項目に沿って記述していく。最後につなぎ合わせて作文を書く。＜書く力＞
- ・作文した用紙を読み、みんなに伝える。＜話す力＞
- ・物語を読む。＜読む力＞

(3) 朝の会・帰りの会・清掃での取り組み

- ・次の日の時間割を黒板に記入する。＜書く力＞
- ・清掃で取り組んだ内容を感想を交えて報告する。＜話す力・報告する力＞

7 研究の経過（通年を通して） 課題

(1) 作業学習での取り組み

授業の始めに本時の目標を発表する。＜話す力＞

作業のある日の朝、黒板に作業内容と担当を書いておき、各自確認するようにしている。(手だて)

- ・作業の始めに目標を発表する際、作業内容と目標を言うことができるようになった。
- ・まず、「今日は〇〇担当なので、」と作業内容を言うことが多かった。
- ・目標は「できるだけ多くやる」「先生の話や指示をきちんと聞く」「全部終わらす」「時間いっぱい頑張る」と言うことが多い。

【今後の課題】

- ・作業内容を理解するだけでなく、自分自身で具体的な目標を設定することができるようになる。
(考えて話す力)
- ・決まったことを目標にしてしまうことが多いので、語彙を増やす。

連絡・報告の徹底。＜話す力・報告する力＞

報告する機会を多く設定する。(手だて)

- ・「〇〇個できました。確認お願いします。」と報告することができるようになってきている。
- ・指示を受けたことを他の人たちにも伝えることができるようになってきている。
- ・伝えなければいけないこと(トイレ、水飲みに行きたいときなど)も適宜言うことができるようになった。
- ・ふざけたり、適切ではない言葉遣いで報告することがある。

【今後の課題】

- ・正しい言葉遣いで連絡・報告をすることができるようにする。
- ・連絡・報告すべきタイミングと言葉を考えて発言できるようにする。

指示を聞いて、行動できるように促す。＜聞く力＞

作業のあいさつ時や作業中に、話を聞くよう声をかける。(手だて)

- ・目標に「先生の話や指示をよく聞く」と設定することがあり、意識している。
- ・経験のある作業では、指示を聞いてスムーズに行動することができる。

【今後の課題】

- ・指示を聞いてわからないことがあったら、わからないままにしておかず自分から聞くことができるようになる。
- ・気分のムラに関わらず、きちんと人の話を聞くことができるようになる。

(2) 国語での取り組み

週末の出来事を質問項目に沿って記述していく。最後につなぎ合わせて作文を書く。＜書く力＞

指導者が質問ごとに聞き取り、短文を作る。その文を時系列でつなぎ合わせる。(手立て)

- ・言ったことを指導者も書きとめ、それをあてにすることがあるが自分で書こうとするようになった。
- ・順番につなぐ場面では、言われたとおりにはできるが、自分でどこに何を書いたのかをわからないときがある。思い出しが不十分なことがある。
- ・箇条書きで書けるようになった。(文ではない)

【今後の課題】

- ・「いつ」「どこで」「だれが」「なにを」「どうした」と言う項目を理解する。
- ・あったことだけではなく、感想を書く。

作文した用紙を読み、みんなに伝える。＜話す力＞

読み終えて質問されたことがわからないときは、聞かれていることを一つずつ詳しく説明する。(手立て)

- ・読み終えて質問されたときに、黙ってしまうことが何度もあった。
- ・毎時間繰り返すことで、嫌がらずに取り組めるようになった。
- ・落ち着いて発表できるようになった。

【今後の課題】

- ・一文字ずつではなく、つなげて読めるようになる。
- ・恥ずかしがらずに大きな声で読めるようになる。

物語を読む。＜読む力＞

読む字を指で押さえさせて、今どこを読んでいるのかを意識させる。(手立て)

- ・最初指導者が読む字を指していたが、何回か繰り返すことで自分で押さえて読むようになった。
- ・一文字ずつだが、声に出して読むことができる。
- ・読めない部分は指導者に聞くことができる。

【今後の課題】

- ・自分でどの部分を読んでいるのかがわかるように、言われなくても文字を押さえながら読む。
- ・一文字ずつではなく、単語で読めるようになる。

(3) 朝の会・帰りの会・清掃での取り組み

次の日の時間割を黒板に記入する。＜書く力＞

週予定表を見るように促し、記入させる。書けなかったら正しい字を横に書く。正しい書き方も意識させる。(手立て)

- ・自分の係だと認識し、嫌がらずに取り組めるようになった。
- ・間違いを指摘されても、どこが違うのかを自分で探せるようになってきている。
- ・間違いが少なくなっている。
- ・書くスピードも速くなってきている。
- ・見なくても書こうとすることが増えた。

【今後の課題】

- ・指導者に言われなくても、自分から書くようになる。
- ・自分で間違いに気づき、正しく直せるようになる。

清掃で取り組んだ内容を感想を交えて報告する。〈話す力・報告する力〉

取り組んだ内容をすべて発表させる。(手立て)

- ・「～をしました」から「～をきれいに拭くことができました」というようになった。
- ・取り組んでいないことを言えないので、手を抜かずに取り組めるようになった。

【今後の課題】

- ・指導者に言われなくても友達と話をして役割分担を決める。
- ・清掃を丁寧に行うことによって、より具体的に報告する。

8 成果とまとめ

【成果】

- ・連絡・報告を自ら行えるようになってきた。
- ・パターン化されてきたことはスムーズに取り組める。
- ・わからないことを聞く場面が増えた。
- ・人任せにする部分が依然としてあるが、軽減した。
- ・指導者やクラスメイトと話す場面が増えた。
- ・黒板書きでは、最初は書くことを嫌がり、他の人に頼んだりしたが、慣れてくると言われなくても自分から係当番のように嫌がらずに書くようになった。
- ・文字に対する読み書きの抵抗も段々と薄れてきているように感じる。
- ・個別に伝えることで指示は理解できる。(全体指導では厳しい部分がある)

国語と作業学習を中心に1年間通して指導を行ったことで、いくつかの成果が得られた。本生徒のような事例では「聞く気が無いから」「集中力が無いから」などの態度面などが指摘されることが多い。もちろんそれらも一因と思われるが、今回のように「話す・報告する・聞く」という一面に着目して指導を行ったことで伝え方(手立て、指導法)の課題が明らかになった。また出てきた課題が具体的であるため、今後は卒業後にどんな力をつけさせたいのかをより明らかにし、指導内容を考え、効果的な指導につなげていく。

話を聞く場面では、全体に対しての指示には注意が向けられずに聞いていないことがある。近くの指導者がメインの指導者に注目させることで、注意が向けられ個別に伝えなくても指示などを聞くことができるようになった。興味があること(体を使いながらの体験的な学習)は、ほぼ聞くことができる。しかし、座学中心だと集中できないことが多かった。徐々に姿勢も悪くなることもある。帰りの会は「帰れる」という気持ちがあるため、姿勢良く話も聞いている。興味関心によって気持ちに差が出るので、指導者の支援が必要である。大きく「個別に伝えないとほとんど聞けていない」「2つ以上の指示は1度に覚えることが難しい」などの課題がわかった。

9 その他

- ・参考資料 週末の出来事用紙「土曜日」
2学期に書いた作文「2学期の思い出」

1 研究主題

「人とかかわり方の基礎を身につけるための支援のあり方」
～自分の意思を言葉で相手に伝えることができるようになるために～

2 対象生徒（研究主題に関する実態）

- A君（生活家庭科2年）
 - ・IQ50（田中ビネー、H19.9.18）
 - ・人とかかわりは、対大人・指導者が中心。友達とかかわりは少ない。
 - ・地域環境等（小、中学校が小規模校）から、同世代の人とかかわる経験が少なく、人とかかわり方の基礎が身につけていない。
 - ・幼少の頃から表出言語が少なく、地域の関係機関等での療育や就学後も継続して言葉の指導を受けていた。
 - ・学習時など困った時に自分から指導者に聞くことができない。
 - ・発音が少々、不明瞭。
 - ・S-M社会生活能力検査（H19.4.24 本校入学前）
意志交換が他の領域に比べて低い。

学年	社会生活 年 齢	身辺自立	移 動	作 業	意志交換	集団参加	自己統制
中3	9 - 5	11 - 6	8 - 4	10 - 2	<u>7 - 8</u>	9 - 4	10 - 11

3 設定理由

昨年度、本生徒を対象とした事例研究に取り組んだ（事例題：「表現意欲を育むための指導について」～「話すこと」「書くこと」の指導を通して～）。その結果、成果としては、言葉が増えて、大勢の前で話すことも経験できた。一方、今後の課題として、本生徒の将来の社会生活やQOLの向上を考えると、「言葉の表出から会話・やりとりへ」すなわち言葉を介して人とかかわる力を身につけることが必要と思われた。2年生になり現場実習や日常生活や学習場面において、自分の意思を言葉で相手に伝えることができない場面が多々見られるようになってきた。将来の社会参加・自立を考えた場合、本研究主題は、本人にとっての課題と言える。そこで、昨年度の研究の追試・発展型として本研究を進めていきたい。

4 研究の内容と方法

（1）アセスメント等による現在の実態、発達段階の把握

ア アセスメントの実施、本校入学前の数値との比較・分析

S-M社会生活能力検査 H21、10、13実施

学年	社会生活 年 齢	身辺自立	移 動	作 業	意志交換	集団参加	自己統制
中3 (入学前)	9 - 5	11 - 6	8 - 4	10 - 2	<u>7 - 8</u>	<u>9 - 4</u>	10 - 11
高2 (現在)	8 - 1	12 - 6	6 - 6	10 - 10	<u>7 - 2</u>	<u>5 - 5</u>	8 - 6

アセスメントの結果から考えられること

- ・意志交換と集団参加の数値が、入学前と比較して意外に伸びなかったのは、人とやりとりする力が身につけていないためだと思われる。

- イ 日常の行動観察から（特記事項、今年度になってから気になったこと H2 1、4～）
- < 4 . 5 > 間違えて友達と体がぶつかってしまうが、自分から友達に謝ることができなかった。
クラスの友達の歯磨きセットを間違えて倒してしまったが、自分から友達に謝ることができなかった。 5、20にも同様のケースあり。
 - < 6 . 17 > 作業の時間（紙すき）次の工程担当の友達への受け渡しの際に友達の顔を見たり、言葉かけがあまりできない。
 - < 9 . 18 > 朝、寄宿舎で不適切な行動があり、登校後に学級スタッフが本人に事情を聞くが「（言葉が）出ない、出ない」と言い、伝えることができなかった。
 - < 9 . 24 > 体育の水泳学習で、友達とペアになり学習を進めた。友達はA君に自分からかかわろうとするが、A君は、かかわろうとはせずに授業に入っている学級スタッフに助けを求めようとする様子が見られた。
 - < 8 . 31～9 . 10 後期現場実習中 >
実習期間中、自分から話すことがあまりできず、引率の指導者が本人の気持ちを聞くと、「会話するのがこわい（恐ろしい） 疲れる、怒られる」ということを話す。
 - < 10 . 8 > 作業の反省時、T1の指導者と向き合ってしまったが、話が終わっていないのにその場から離れようとする。
 - < 10 . 22 > クラスの友達と体がぶつかりそうになり、友達はA君に自分から謝るが、A君は謝ろうともしない。

日常の行動観察から見られた課題

1. 2年生になってから、自分の意思を相手に伝えることができず、「出ない、出ない・・・」と言うことが、色々な場面で見られるようになってきた。（1年生ではなかった）
2. コミュニケーション態度の基礎が身についてなく、その育成や基盤を身につけることが急務と言える。
例. ○人とかかわる時に、「相手の顔を見る」「相手の名前を言う」
○「お願いします」「はい、どうぞ」「ありがとう」などの身近な言葉が言える。

（2）研究の仮説

- ア 自分から報告や質問を行う場面を意図的に設定することにより、より自発的に行うことができるようになるのではないかと。（ソーシャルスキルの側面からのアプローチ）
- イ 1年次から取り組んでいる日記帳での対大人（学級スタッフ）とのかかわりを通して、人とかかわることの楽しさを味わうことができるのではないかと。（人とのかかわりを楽しむという側面からのアプローチ）
- ウ 声、言葉を発する機会を持つことにより、緊張しないでスムーズに発声・発語することができるのではないかと。（発声・発語の側面からのアプローチ）

（3）研究内容・方法（手だて）

- ア ソーシャルスキルの側面からのアプローチ
- ・学習場面で自発的に報告や質問をしたり、人とかかわる場面を意図的に設定する。
 - ・本人が困っている時に、自分から指導者に報告や質問することができるように、指導者がすぐに支援をせずに「促す」「待つ」などの対応をする。
 - 「どうしたら いいだろうか」（困り感を持つ）→質問しなければならない気持ち→質問する。→できた・言えた（達成感）伝わった、できるんだ（自信と喜び）→また、がんばるぞ（更なる意欲づけ）
- イ コミュニケーション態度の育成「コミュニケーションに向かうために」
- ・人とかかわる時に、「相手の顔を見る」「相手の名前を言う」ことを指導。
 - ・HRの時間に指導者や友達とロールプレイを行う。
- ウ 人とのかかわりを楽しむという側面からのアプローチ
- ・昨年度から継続して取り組んでいる日記帳書きを通して、学級スタッフが本人が書いてきたことに質問したりして、人とのかかわりの楽しさを味わわせる。

エ 発声・発語の側面からのアプローチ

(ア) 絵本の音読

抑揚をつけた読み方、場面や登場人物の心情の理解をねらいに取り組む。

(イ) 日記を読む

今年は書くことに加えて、書いたものを声に出して読む、相手に伝えることも重視した。

(ウ) ショート・スピーチ

毎週月曜日の国語の時間に取り組む。週末のできごとについて書いたものを友達や指導者の前で発表する。

(エ) 声の音量の調整

- ・ピンポン玉に息を吹きかけ飛ばす。息をかける量を調整して遠くへ飛ばしたり、近くへ転がしたりする。
- ・大きな声を体育館で出したり、近くで小さな声を出す。

(オ) しりとりゲーム

自分で考えて出した答えを声に出す練習。間違えるということがなく、楽しみながら取り組める。

オ 各領域・教科及び寄宿舎の余暇活動との連携

- ・「報告」「質問」「人とかかわり」を中心に、各領域・教科での学習場面及び寄宿舎の余暇活動においても各担当・寄宿舎の室担と連携を取りながら進める。

5 研究の経過

(1) ソーシャルスキルの側面からのアプローチ

ア 指導内容

- ・「報告」「質問」「友達とかかわり」について、意図的な学習場面を設定し自発的にできるようにする。

< 報告 >

- ・主に作業学習で自分が取り掛かっている作業が終了した時、掃除終了時、その他日常の生活場面で行う。

< 質問 >

- ・作業学習をはじめ、他の学習場面でも行う。
- ・本人が困っている時に自分から指導者に質問することができるよう、すぐに支援をせずに指導者が「促す」「待つ」などの対応をする。

< 友達とかかわり >

- ・友達とかかわったり、協力しながら学習する場面を設定する。
- ・作業終了後の掃除を友達とペアになり、話し合って分担を決めて行う。
- ・作業終了後の掃除点検を担当し、友達にそれぞれの担当の掃除箇所ができたかどうかを確認する。

資料1「掃除点検表」参照

イ 基本的な指導の手立て

(ア) 待つ。

(イ) 言葉でさりげなく促す。

「終わった後に何をするのかな？」(報告)

「困った時はどうするのかな？」(質問・困った時)

「何て言えばいいかな？」(友達とかかわり)

(ウ) 適切な方法でできた時は、賞賛する。「フィードバック」

(エ) できない時や適切な方法でできなかった時は、指導者が見本を示し、その後に行う。

「モデリング」「リハーサル」

(ウ)適切な方法とは

- ・「相手の顔を見る」
- ・「○○先生、○○君」と相手の名前を呼ぶ。
- ・「○○先生、○○が 終わりました。」のように単語や片言ではなく、文・会話として最後まで話す。

ウ 指導の実際

月 日	種 類	様子・場面(本人と指導者・友達とのかかわりの様子)、考察・検証	手立て
9/24	報告	< 作業学習 > ・作業終了後、反省の日報を指導者に提出する際、担当の指導者があえて本人から離れた場所に位置したが、自分から指導者の所に来て「○○先生、反省を見て下さい。」としっかりと言うことができた。	(ア) (自主的) (ウ)
10/8	報告	< 作業学習 > ・作業終了後、T1の指導者に「○○先生、○○が終わりました。」と自分から言うことができた。しかし、T1の話の途中でその場から離れようとしたり、話を聞く際にT1の顔をあまり見ていなかった。相手の顔を見て、最後まで話を聞くように指導。	(ア) (自主的) (エ) (モデリング)
10/14	報告	< 作業学習 > ・掃除終了の報告を自分からT1の指導者に言うことができた。本人も「最後まで言えた」と喜んでいて、 →「○○先生」と先に言うことができれば更に良い。	(ア) (自主的) (ウ)
11/9	報告	< 作業学習 > ・掃除終了後、指導者に「○○が終わりました。次に何をやればいいのか。」と報告することができた。	(ア) (自主的) (ウ)
9/30	質問	< 作業学習 > ・ぼち袋の作り方がわからず困っていた。本人からの質問を待ったが、なかったのでもちから確認して、わからない時は質問すること、質問の仕方、ぼち袋の作り方を教えた。 →もう少し待つ、またはさりげなく言葉で促すことにより本人に困り感が 出て、質問しなくてはならない状態になったり、自発的にできるのではないか。	(エ) (モデリング) (リハーサル)
10/7	質問	< 作業学習 > ・作業終了後の片付け時、指導者に「このかごを、どこにしまえば、いいですか」と聞くことができた。 →自分からできたので賞賛した。本人も喜びの表情	(ア) (自主的) (ウ)
11/5	質問	< 学級生単 > ・ちぎり絵を行う。下絵書きが終わり、次に紙を貼っていくが、どうして良いのか、指導者に聞くことができずぶつぶつと独り言を言う。本人にわからない時は指導者に聞くように促すと、自分から聞いてくる。	(イ)
12/2	質問	< 学級生単 > 11/5の続き ・作業に入ると、独り言で「原画 原画」と言う。指導者が「原画が欲しいの？」と聞くと、「はい」と言ったので、自分から指導者の所に来て言うように促すと、自分から聞いてくる。	(イ)
12/2	質問	< 学級生単 > 12/2の続き ・1週間後、授業開始前に意図的に原画を本人に渡さずに、自主的に指導者の所に取りに来ることができるかをみてみた。授業開始後すぐに自分から「原画を下さい。」と言って取りに来ることができた。 →自分からできたので賞賛した。	(ア) (自主的) (ウ)

12/21	質問	<HR> ・ちぎり絵を行ったが、時間内に完成できなかったので宿題にした。ちぎり絵の道具を本人に渡したが、また、「原画」のみ意図的に渡さず自主的に取りに来ることを待った。「原画がない」と言い、一人で原画を探す、途中であきらめて他の道具を鞆にしまってしまう。そこで、指導者が「A君、ちぎり絵の道具で、あと持って帰るものないの」とさりげなく、本人に問いかけると、帰りの会終了後にすぐに原画をもらいにくる。	(イ)
10/8	人とかかわり	<作業学習> ・作業終了後の掃除の時、友達とペアになり二人で話し合い、何をやるのか決めて取り組むようにした。しかし、友達が主導で何をやるのかを聞かれて答えていた。	(エ) (モデリング) (リハーサル)
1/22	人とかかわり	<生単> ・友達とペアになったの調べ学習を行った。最初の役割分担からA君主導で進めることと、どのように話して進めていくのかを調べ学習に入る前に具体的に伝えた。指導者の支援なしに自分から友達に話しかけて進めていた。	(ア)(自主的) (ウ)
1/27	人とかかわり	<作業学習> ・3学期に入ってから、掃除点検表を見ながら、「○○さん・君、○○はできましたか。」と相手の顔を見てだいつ、スムーズに言えるようになってきた。	(ア)(自主的)
2/5	人とかかわり	<生単> ・生単調理・会食の際、友達とペアになり自分から声をかけて、鍋作りを行うことができた。会食時も自分から「うどん残ってますが、誰か食べますか?」「僕、食べてもいいですか?」と言うことができた。	(ア)(自主的) (ウ)
2/23	人とかかわり	<作業> ・友達にもものを借りる時、指導者を介することなく自分から「Iさん、○○を借して下さい。」と言うことができた。	(ア)(自主的) (ウ)

(2) コミュニケーション態度の育成「コミュニケーションに向かうために」

○指導内容

- ・HRの時間などに指導者や友達と以下のようなロールプレイを行った。
 ア 人とかかわる時に、「相手の顔を見る」「相手の名前を言う」 あいさつなど
 イ 友達との物の受け渡しの時に、「○○君・さん、どうぞ」「ありがとう」と言う。
 ウ 間違っって人とぶつかってしまった時お互いに「ごめんなさい」と言う。
 エ 前に人がいて通れない時に「すみません、前をよけて下さい。」と言う。

○経過

- ・アについては、作業学習や日常学習場面でも実践することにより、少しずつスムーズにできるようになってきた。
- ・イについては、HRでプリントを生徒に配布する際、A君も含めて全員、二人でペアになり一人が渡す役、もう一人が受け取る役になり継続して行った。ア同様スムーズにできるようになってきた。
- ・ウ、エについては、その時の学習場面では、指導者が見本を示すなどしてできているが、他の学習や日常場面では、まだ難しいと思われる。

(3) 人とかかわりを楽しむという側面からのアプローチ

○指導内容

- ・昨年度から継続して取り組んでいる日記帳書きを通して、学級スタッフが本人が書いてきたことに質問したりして、人とかかわりの楽しさを味わわせる。

○経過

- ・毎朝、日記帳を提出する際に、「今日は○○を書きました。見て下さい。」と言わんばかりに、以前よりも楽しそうに提出するようになってきた。
- ・本人が、2年生になってから大変興味をもっているアニメ(TV「エレメントハンター」)のことを話題にしてかかわることも効果的だった。資料2「日記帳をとおしてのかかわり」参照

(4) 発声・発語の側面からのアプローチ

ア 絵本の音読

- ・抑揚をつけた読み方や場面や登場人物の心情の理解をねらいに取り組む。

(絵本「ももたろう」「おおきなかぶ」)

○経過

- ・抑揚をつけた読み方は難しかった。
- ・場面やその時の登場人物の気持ちを指導者と一緒に読み取ることができた。また、どのような感じで読むと良いかを考えて読むことができた。

絵本「ももたろう」の音読指導から

「ももたろう おきろてば」「おにがあばれたのを 知らんのか」

↓

指導者：「この時、おじいさんとおばあさんは、どんな気持ちでももたろうに言ったのだろうか」

A君：「大変な気持ち」

指導者：「それでは、おじいさんとおばあさんの気持ちになって、読んでみましょう。」

イ 日記を読む

- ・今年は書くことに加えて、書いたものを声に出して読む、相手に伝えることも重視した。

○経過

- ・助詞、濁点、拗音などを間違えていることが見られるので、指導者が訂正してから、声を出して読むことを行った。意欲的に取り組んでいた。

ウ ショート・スピーチ

- ・毎週月曜日の国語の時間に取り組む。週末のできごとについて書いたものを友達や指導者の前で発表する。

○経過

- ・友達や指導者の前で大きな声で読むことができた。

エ 声の音量の調整

- ・ピンポン玉に息を吹きかけ飛ばす。息をかける量を調整して遠くへ飛ばしたり、近くへ転がしたりする。大きな声を体育館で出したり、近くで小さな声を出す。

○経過

- ・ピンポン玉に調整して息をふきかけることはできていた。体育館では大きな声を出す練習を繰り返すことで長く声を出せるようになってきた。

オ しりとりゲーム

- ・自分で考えて出した答えを声に出す練習。間違えるということがなく、楽しみながら取り組める。

○経過

- ・帰りのHR前にクラスの友達を含めて行った。始めた頃はすぐに言葉が出なかったが、徐々にスムーズに出てくるようになった。

(5) 各領域・教科及び寄宿舎の余暇活動との連携

- ・「報告」「質問」「人とかかわり」などを中心に、各領域・教科での学習場面及び寄宿舎の余暇活動においても各教科担当者・寄宿舎の室担と連携を取りながら進める。
- ・次のような目標・手立てのもとに活動の様子の記録の依頼と交流を行った。

目標

1. 困った時やわからない時に自分から指導者に聞くことができるようにする。
2. 人とかかわり、コミュニケーションをとりながら学習したり、生活する力を身につけていく。

指導の手立て(コミュニケーションのとり方)

1. 相手の顔を見て、話すことができる。
2. 自分の意思を言葉で、最後まで相手に伝える。 単語の羅列にならない。
「○○先生、○○君・さん……が……です。」

○経過

ア 現場実習

- ・引率の指導者と連携をとり、実習中の目標に本人の課題となる部分を盛り込んでもらい、実習中の様子などを聞いた。

(ア) 前期現場実習

前期現場実習の個人目標：「わからないことがあったら、自分から聞く。」

○経過 指導記録から抜粋

- ・上記の目標に対して、まず実習先の担当者の方に質問など話かけることから手がけた。
- ・話す時は主に1フレーズ(単語)で途切れており、語尾までしっかりと話すことはできなかった。
- ・本人ともう一人の男子生徒の2名での実習となったが、2人の会話ややりとりは、ほとんど見られなかった。

(イ) 後期現場実習

- ・前期同様に実習中の目標に本人の課題となる部分を盛り込んでもらう他に、以下のように実習中の指導の手立てについて共通理解を図ったり、記録を担当者に依頼した。

後期現場実習の個人目標

1. わからない時、困った時に自分から、指導者に聞く。
2. 友達とかかわりながら活動することができる。

指導の手立て

1. 話をする時は、先生や友達の顔をしっかりと見て話す。
ex. 相手の顔を見て、「お願いします」「ありがとうございました」と言う。
2. 相手に話す時に、単語を羅列することなく、「○○が○○です。」のように、主語、述語があって、文や会話となるように話す。 ex 「○○先生、○○○がわかりません。教えてください。」

○経過 指導記録から抜粋

- ・「○○先生、○○ができました。」と言うことについては、改善され言うことができるようになった。
- ・自分が失敗した時に素直に「すみませんでした。」と言うように指導した。知らん顔をするのがあったり、指導者が本人の顔を見て、一息待つと「すみませんでした。」と言えた。(まだ自分から言うことはできていない。)
- ・次に何をしたらよいかが、わからない時は「何をすればいいですか。」と聞くように指導した。自分から動けなかったり、なかなかできなかった。
- ・2つ目の目標について、「まわりを見て、困っている人に声をかけてみよう」と指導した。最後まで改善されなかった。自分が困っている時には、まわりが助けてくれたが、「ありがとう」という言葉が本人の口から出てこなかった。

イ 生単

○経過 単元名「宿泊研修を成功させよう」 学習の様子から一部抜粋

- ・「何がやりたい?」や「どうやったらいいかな?」といった質問に対しては、首をかしげ、答えることができなかった。役割分担を決める際にも自らの意思表示はなく、常に余った役割に入ってしまった。
- ・指導者の促しがないと、友達に聞くことができない。友達とかかわりも少なかった。

- ・指導者に「しおりはどうしますか」「表紙を作ってきました。」とすることができた。

ウ 体育・部活動（スポーツ部）

○経過 指導記録から抜粋

- ・困った時は、「知っている」「面識のある」指導者に対しては助けを求めることはあるが、生徒に助けを求めることない。「どうしよう？」を2、3回繰り返す。
- ・体育・部活動ともに、グルーピング（2人組になるなど）活動では、自分から進んでグループを作ることができず、指導者からの促しで人数の足りない所に入る様子がある。

エ 委員会活動（体育委員会）

○経過 指導記録から抜粋

- ・自分から指導者や友達に話しかけてかわりを求めることがあった。しかし、特定の生徒や指導者であった。女子生徒や3年生に対してはあまりなかった。
- ・人とかかわりの内容としては、友達に対しては言葉でのコミュニケーションよりも親しみを込めたスキンシップ的なものが多かった。指導者に対しては、「○○（君が） （している）」といった二語分の不完全な形ではあるが、言葉によるコミュニケーションを図ろうとする様子が見られるようになってきている。

オ 寄宿舎での生活場面（室担との連携指導）

○経過 指導記録から抜粋

- ・自主的に報告、あいさつをする場面を増やすために後期室長に任命した。日々の室長の仕事としては、掃除活動が終わった時に職員に報告をすることと終了のあいさつがある。初めはなかなか報告ができなかったり、言葉が出ない様子が見られた。落ち着いて考えてから話すこと、ゆっくりでいいので相手に伝わるように一言をしっかりと話すように言葉かけを行ってきた。回数を重ねるにつれて少しずつ自信がつき、積極的に報告、あいさつを行う様子が見られてきている。
- ・寄宿舎の行事では、今まで余興に参加することがなかったが、昨年のミニびりか祭では、自分から職員に余興に参加したい旨を伝え、練習も自主的に行っていた。大勢の前で出し物を披露したことで自信がつき、それが他の場面でも反映されてきている。

6 成果と課題

（１）成果

コミュニケーションに関する指導は、大変奥が深く、当然のことながら、一朝一夕でその力が身につくものではない。継続した地道な指導が必要である。本研究についても同様のことが言える。一応、今年度の成果として、次のことがあげられる。特にウについては、今後に向けての手ごたえとなった。指導（研究）場面だけではなく、様々な活動や経験が本人の自信となったことと思う。

ア 報告など決められたことやある程度設定されたことについては、自分からできるようになってきた。

イ コミュニケーション態度については、昨年度及び年度初めと比べ成長が感じられた。

人とかかわる時に、「相手の顔を見る」「相手の名前を言う」などについては、様々な学習場面で実践することにより、だいぶ身につけてきた。

ウ 本研究の指導場面以外でも成果が見られた。

（ア）積極的に自分の意思を伝えることができた。

- ・学校祭舞台発表の配役を決める際に、自分がやりたい役に立候補した。
- ・寄宿舎の「ミニびりか祭」の出し物を自分から「やりたい」と寄宿舎職員に申し出て、当日もステージ発表を行うことができた。

（イ）自分が相手に伝えたいことを、語尾までしっかりと会話として伝えることができた。

- ・上記の「ミニびりか祭」の日、登校後、担任の所に来て「Ｙ先生、今日のミニびりか祭、最初から見に来て下さい。」とすることができた。
- ・同じく今年度の学校祭前に、隣の農業科の担任に「Ｋ先生、農業科の販売の おすすめは 何ですか。」と聞くことができた。

(2) 課題

成果でも記載したが、今後も継続した指導が必要となるが、今年度の実践をとおして、次のことが課題としてあげられる。

- ア 般化できるようにする。(報告、質問、人とのかわりなどが、「どんな時でも」「どんな場所でも」「どんな人にも」できるようにする。)
- ・般化できるようになるためには、
繰り返し、継続した指導
他の領域・教科や寄宿舎との連携した取り組み
 - ・指導内容、目標、手立てなどについて共通理解を図る。
 - ・連携と一貫した指導
- コミュニケーション態度の指導でロールプレイして学習したことを、他の学習や日常生活場面にフィードバックしていく。
日常生活場面でのかわり、様々な活動の体験を大切にする。
- イ 成功体験を積む。(自信と更なる意欲付け)「伝わったんだ」「伝えられた」「できるんだ」
- 5 研究の経過(1)ウ 指導の実際 10/14 <報告>参照
掃除終了の報告を自分からT1の指導者に言うことができた。本人も「最後まで言えた」と喜んでいて。
- ウ コミュニケーション・マインドを育てる。「伝えよう」「伝えたい」という気持ちを育てる。
- 6 成果と課題 (1)ウ参照
- 「ミニぴりか祭」の日、登校後、担任の所に来て「Y先生、今日のミニぴりか祭、最初から見に来て下さい。」と言うことができた。「伝えよう」「伝えたい」
 - 今年度の学校祭前に、隣の農業科の担任に「K先生、農業科の販売の おすすめは 何ですか。」と聞くことができた。「聞いてみよう」

参考文献

- ・「ことばのストレッチ体操 やりとり・会話編」 ことばのストレッチ研究会編 明治図書
- ・「実践ソーシャルスキルマニュアル」 上野 一彦/岡田 智 編著

7 資料

○資料1 「掃除点検表」

掃除点検表

教室がきれいになったか、必ず確認しましょう！

1	机やたなは、ふいてきれいになっているか？	☒ 子
2	ゆかにゴミが落ちていないか？	☒ 池
3	黒板はきれいか？	☒ 田
4	ゴミ箱は空になっているか？	☒ 澤
5	シンクはきれいか？	☒ 山
6	掃除用具入れはきれいか？	☒ 田
7	資材庫はきれいか？	☒ 木

○資料2 「日記帳をとおしてのかかわり」 日記帳から（原文のまま転記）

11月9日（月）

HRをしました。作業でラミネートはがし、牛乳パック切りをしました。れんしゅうをしました。つかれました。せんたくのりょうはすくなかった。エレメントハンターのエンディングテーマのスイヘイリーベ～魔法の呪文～をききました。テレビアニメーション「エレメントハンターオリジナルサウンドトラック」をききました。ばんごはんは、秋味ごはん、みそ汁、すき焼き風、酢みそあえ、デザートを食べました。おふろに入りました。おふろのおんどはあつかった。

今日もたくさん書けていますね。

Q1 練習は何をやりましたか。 → 「じゃわおどり」
 どんな練習がつかれましたか。 → 「まわす」

学校祭の練習は じゃわおどり をやりました。 まわす をして つかれました。

11月17（火）

いしょうをきてれんしゅうをしました。つかれました。作業ではんぱいのじゅんぴをしました。寄宿舍でせんたくをしました。せんたくのりょうはすくなかった。ばんごはんは、魚の南部焼き、おろし鍋風、チョコバナナクレープを食べました。エレメントハンターのエンディングテーマのスイヘイリーベ～魔法の呪文～をききました。DS用ソフト「エレメントハンター」をしました。

Q1 DS用ソフト「エレメントハンター」を何分くらいやりましたか。 （ ）分 （ ）時間

Q2 DS用ソフト「エレメントハンター」をやってみての感想は

おもしろいですか。楽しいですか。 → （楽しいです。）
 どんな所がたのしいですか。 → （QEXをたおすことが楽しいです。）

第3学年部会の実践

1 研究主題

「数学における働く生活に必要な力の効果的な育成を目指して」

2 設定理由

将来社会生活を送る上で、様々な力が求められるが、数をかぞえたり目盛りをよんだりすることは働く上で身に付けておきたい力の1つである。将来、作業所や職場で仕事をする際に、これらを要領よく行うことで、社会参加・自立に向けた意識がより高まるものであると考えられる。

生徒の中には数学を苦手と感じる者がいるものの、授業の進め方を工夫することで、数学的な力の向上が図れるのではないかと考えられる。

これらの成果を期待し、本主題を設定した。生徒が数学的な力をいかに効果的に獲得していくことができるか、授業実践を通して調べてみたい。

3 研究の目的

生徒の数学的な力を効率的に伸ばすにはどのような取り組みが必要なのか、作業場面でどのように活かし、働く力につなげていくことができるのか、本研究を通してその方策の一端を追究できればと考え、研究を行うものである。

また、本研究の授業実践を通して、効果的な教材教具や適切な働きかけなど、授業を担当する教員の資質や力量の向上を図ることや、学年集団の共通理解の上での協力体制づくりなど、集団としてのまとまりを図ることをねらっている。

4 研究の内容と方法

(1) 研究の内容(対象となる教科等も含めて)

各学科の作業学習を行う上で、どの作業でも数学的な力が求められる。例えば、産業科では、適量の粘土の重さを計量したり製品を数えて並べたり、釉薬の比重が適正値になるように濃度を調節したり、素焼きや本焼きでの窯の温度や時間を管理するなどの場面。農業科では、用土を配合する割合、使用する道具の必要数の準備、播種したポットをパットに並べて数えたり、温室やハウスの温度を管理するなどの場面。生活家庭科では、リサイクルの活動で、キッチンタイマーでの計測や液体洗剤を作る時の計量、製品を数えるなどの場面で数学的な力が求められる。

対象となる学習としては、実践の場面としての作業学習と、本テーマで取り上げた「効果的な育成」を図る上で数学(産業科、農業科) 課題学習(生活家庭科)を中心に、現場実習にも関連して総合的な学習の時間などでも取り上げながら行う。

(2) 研究の方法

本主題のキーワードは「効果的な育成」である。数学プレテストを使用してカテゴリー化し、課題となる苦手な分野を把握し、つまづいている原因を明らかにした上で、生徒に合わせてそれぞれに合った方法で取り組み、どのように変化があったのか同じ問題を使用して比較する。

また、「効果的な育成」の取り組みは、個々の生徒の実態に合わせて、数学や課題学習の授業の中で工夫したことを記録し、それらが作業学習での場面でどのように反映されたかを見ていく。

5 研究推進計画

(1) 3ヵ年の大まかな流れ

1年次(今年度)・・・現3学年対象

「数学における働く生活に必要な力の効果的な育成を目指して」授業研究

2年次・・・新1学年対象

「コミュニケーション能力の向上を目指した取り組み(仮)」事例研究

3年次・・・新2学年対象

「余暇活動の充実と働く意欲の向上(仮)」寄宿舎や家庭と連携した調査を中心とした研究

(2) 今年度の推進日程

6月・・・研究計画の立案(全体会)

| 授業実践

11月・・・中間発表会(全体会)

12月・・・研究授業を実施

| まとめ

2月・・・研究報告会(全体会)

6 研究の実際

(1) 実態の把握

生徒一人ひとりの数学における得意な分野、苦手な分野などを知ることを目的に、各学級で数学プレテストを実施する。プレテストは、問題の内容から7つのカテゴリに分類した。序数(1～3) 四則計算・文章題(4～6) 時間・時計(7～8) 単位読み替え(9) 目盛り(10～12) お金(13～14) 図形(15)。

1回目は5月に、2回目は12月に実施し、得られたデータの変化から一人ひとりの獲得した力の推移を見ていく。

(2) 作業場面における数学的な課題点の掌握

作業の様々な場面で必要となる数学的な要素を学科ごとに整理し、一覧表にまとめる。表には、数学的な要素を上記のカテゴリに関連して記述することで、数学の授業でどのように関連づけて学習を進めるか、その指導内容や方法、教材教具などについて焦点化を図る。

(3) 研究授業

作業で必要となる力と生徒の苦手な分野を相関的に数学の学習に取り入れる。生徒が学ぶ様子を授業研究として公開する。

3学科同時進行で行う。

- ・対象教科 「数学」(産農)「課題学習」(家)
- ・日 程 12月10日(木)2校時
- ・場 所 産業科3年教室、農業科3年教室、理科室
- ・指 導 案 学年部会(12/7)で検討、前日までに印刷配付する。
- ・反 省 会 (学年)12月15日(火)臨時で学年部会を行う。
(全体)12月18日(金)職員会議後に行う。

7 成果と課題

(1) 成果

1年間を通して、数学の学習をいかに生徒が分かりやすく行っていくかということを大切にしながら授業を行ってきた。成果としては大きく分けると次の6点が挙げられる

数学の学習から作業における変化がみられた。

重さを量ったり数を数えたり、また、容量の違いを区別できるようになるなど各学科の作業の中で変化(成長)が見られた。

学級集団で展開する上でグループ編成の課題がわかった。

学級内で学力の差がある中で授業を展開することで、メリットやデメリットを確認することができ、日常生活におけるつまづきを踏まえて授業ができた。

授業を進める上で、指導法など参考となる点が明らかになった。

パワーポイントを使用し視覚的なアプローチをすることによって生徒にイメージを持たせるために効果的であった。また、作業学習で使い慣れている計量計を使用したことでより実際に即した授業を展開できた。教材教具や指導法を検討する過程を通して、生徒が分かりやすいように工夫することで、柔軟に合理的に考える力をつけることができた。

作業に関連づけて数学の学習ができたこと。

各作業工程において数学的な要素を整理して指導したことにより、数学での学習と作業学習を通して効率的な数え方、並べ方ができるようになった生徒があり、関連づけて授業を展開することができた。

数学のプレテストを活用することで、実態や変化を知ることができた。

3学科共通で2度プレテストを行ったことで、生徒一人ひとりの苦手な分野を知ることができ、比較しながら変化を見ることができた。また、一部ではあったが着実に力を付けている生徒もいて、学習の成果がみられた。

3学科揃って同じテーマで授業研究ができた。

公開する授業の準備を進める上で各自の学級の課題や進め方を明らかにし、学年間で指導案の交流を行うことで、他学科の指導方法などが互いに参考となった。

(2) 課題

本研究を通して成果もあったが、反面では次のような課題も明らかになった。

学習内容の精選

作業学習をはじめ生活する上で必要になる力を身に付けるために、他の学習や活動とのつながりを多角的に幅広く行うのではなく、焦点化した内容を継続的に行うことの大切さを感じた。

グループ編成

生徒の理解力に差があり、一斉授業を行うには工夫や配慮が必要であり、現状としては明確な答えが出せない状態である。

担当者の打ち合わせが十分に行えなかった。

授業の進め方など、結果的には学級ごとに話し合っていたが、学級を越えて学年として担当者間で打ち合わせをする時間が十分に確保できなかった。

なかなか効果の表れない生徒がいた。

数学プレテストを元に生徒の実態把握や変化の対比を行ってきたが、5月から12月への変化を比べてみると、一部の生徒以外は大きな変化が見られないか、あるいは中には勘違いからか正解数が減る生徒も見られた。数学的な力を効率的かつ着実に付けていくことの難しさの表れであり、指導法については今後も課題である。

8 参考文献等

- ・『改訂 数学科が求める新しい授業力』 正田 實 著 明治図書 2008 年
- ・『特別支援学校 学習指導要領』 文部科学省 H 2 1 年
- ・文部科学省「教育用コンテンツ開発事業」算数・数学の思考過程をイメージ化する動画素材集
(<http://www.dainippon-tosho.co.jp/mext/nhk/index.html>)
- ・香川県算数教育研究会 (<http://www.kasanken.com/>)

9 資料

(1) 数学プレテスト集計結果対比表

ア 5 月実施分

イ 1 2 月実施分 (生活家庭科は 1 月実施)

(2) 各学科作業における数学的な要素表

(3) 研究授業学習指導案・評価 資料は除く

ア 3 年産業科

イ 3 年農業科

ウ 3 年生活家庭科

資料1ア

平成21年度 数学プレテスト集計結果・対比表 (5月実施)

(産業科)

正解率	上段：正解数、下段：正解率								(5月)
	A	B	C	D	E	F	G	H	問題数
序数	22	22	22	22	22	13	22	17	22
1～3	100	100	100	100	100	59	100	77	
四則計算・文章題	35	48	47	45	47	44	48	42	48
4～6	73	100	98	94	98	92	100	88	
時計・時間	4	5	5	5	5	5	5	4	5
7～8	80	100	100	100	100	100	100	80	
単位読み替え	1	1	4	4	4	2	4	2	4
9	25	25	100	100	100	50	100	50	
目盛り	2	4	5	6	6	3	5	4	6
10～12	33	67	83	100	100	50	83	67	
お金	8	8	8	8	8	7	8	8	8
13～14	100	100	100	100	100	88	100	100	
図形	5	5	6	6	6	5	6	7	7
15	71	71	86	86	86	71	86	100	
合計	77	93	97	96	98	79	98	84	100

(農業科)

正解率	上段：正解数、下段：正解率								(5月)
	A	B	C	D	E	F	G	H	問題数
序数	22	16	22	22	22	22	19	22	22
1～3	100	73	100	100	100	100	86	100	
四則計算・文章題	38	24	45	19	48	41	44	46	48
4～6	79	50	94	40	100	85	92	96	
時計・時間	4	4	5	4	5	4	5	4	5
7～8	80	80	100	80	100	80	100	80	
単位読み替え	2	0	4	0	4	1	3	2	4
9	50	0	100	0	100	25	75	50	
目盛り	5	0	3	3	5	1	5	4	6
10～12	83	0	50	50	83	17	83	67	
お金	8	8	8	8	8	8	8	7	8
13～14	100	100	100	100	100	100	100	88	
図形	0	0	4	1	6	0	5	0	7
15	0	0	57	14	86	0	71	0	
合計	79	52	91	57	98	77	89	85	100

(生活家庭科)

正解率	上段：正解数、下段：正解率								(5月)
	A	B	C	D	E	F	G	H	問題数
序数	16	14	16	16	17	14	11	19	22
1～3	73	64	73	73	77	64	50	86	
四則計算・文章題	17	9	1	1	12	27	16	20	48
4～6	35	19	2.1	2.1	25	56	33	42	
時計・時間	4	3	2	2	0	5	2	0	5
7～8	80	60	40	40	0	100	40	0	
単位読み替え	0	0	0	0	0	1	1	0	4
9	0	0	0	0	0	25	25	0	
目盛り	2	1	1	1	1	0	1	0	6
10～12	33	17	17	17	17	0	17	0	
お金	7	6	7	7	5	7	5	0	8
13～14	88	75	88	88	63	88	63	0	
図形	0	0	0	0	0	0	0	0	7
15	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	46	33	77	27	35	54	36	39	100

平成21年度 数学プレテスト集計結果・対比表 (12月実施)

(産業科)

正解率	上段：正解数、下段：正解率								(12月)
	A	B	C	D	E	F	G	H	問題数
序数	22	22	22	22	22	21	22	20	22
	100	100	100	100	100	95	100	91	
四則計算・文章題	31	45	48	45	48	46	48	42	48
	65	94	100	94	100	96	100	88	
時計・時間	3	4	5	4	5	5	5	5	5
	60	80	100	80	100	100	100	100	
単位読み替え	4	4	4	4	4	4	4	4	4
	100	100	100	100	100	100	100	100	
目盛り	2	4	6	5	6	3	5	1	6
	33	67	100	83	100	50	83	17	
お金	7	7	8	8	8	8	8	8	8
	88	88	100	100	100	100	100	100	
図形	3	7	5	5	6	4	5	3	7
	43	100	71	71	86	57	71	43	
合計	72	93	98	93	99	91	97	83	100

(農業科)

正解率	上段：正解数、下段：正解率								(12月)
	A	B	C	D	E	F	G	H	問題数
序数	22	0	15	20	22	0	19	22	22
	100	0	68	91	100	0	86	100	
四則計算・文章題	36	0	44	23	46	0	44	46	48
	75	0	92	48	96	0	92	96	
時計・時間	4	0	5	4	5	0	5	5	5
	80	0	100	80	100	0	100	100	
単位読み替え	2	0	4	1	4	0	4	3	4
	50	0	100	25	100	0	100	75	
目盛り	4	0	4	3	5	0	5	5	6
	67	0	67	50	83	0	83	83	
お金	7	0	8	7	8	0	8	8	8
	88	0	100	88	100	0	100	100	
図形	1	0	1	0	5	0	5	1	7
	14	0	14	0	71	0	71	14	
合計	76	0	81	58	95	0	90	90	100

(生活家庭科)

正解率	上段：正解数、下段：正解率								(1月)
	A	B	C	D	E	F	G	H	問題数
序数	15	16	0	8	14	17	11	21	22
	68	73	0	36	64	77	50	95	
四則計算・文章題	12	14	0	1	8	27	13	32	48
	25	29	0	2.1	17	56	27	67	
時計・時間	4	3	0	4	3	4	2	4	5
	80	60	0	80	60	80	40	80	
単位読み替え	0	0	0	0	0	1	1	3	4
	0	0	0	0	0	25	25	75	
目盛り	3	1	0	0	1	0	1	1	6
	50	17	0	0	17	0	17	17	
お金	8	7	0	3	6	7	7	7	8
	100	88	0	38	75	88	88	88	
図形	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	42	41	0	16	32	56	35	68	100

各学科作業における数学的な要素表

H 2 1 . 9 3 学年校内研究

	おもな作業場面	働く上で必要となる数学的な要素	備 考 (カテゴリー等)
産 業 科	道具の準備	石膏型の選択 たたら板 たたら板の組み合わせ	重さ 厚さ、長さ 足し算
	成形	粘土の計量 成形 作業時間	重さ、四則計算、概算 高さ、直径、厚さ、長さ、目盛り、 誤差、個数 (序数) 時刻・時間 (時、分、秒)
	釉薬がけ	濃度の調整	% (比重計) 目盛り
	焼き	素焼き、本焼き	温度、時間
	販売	会計	お金、四則計算
農 業 科	ポット上げ、鉢上げ	できた数を数える。	序数、かけ算
	作物の袋詰め	計量して袋に入れる。 いくつできたか、いくらになるか。	目盛り 序数、かけ算、お金
	販売	いくつ (いくら) 売れたか。いくつ残ったか	序数、かけ算、お金
	ポット・鉢洗い、消毒	洗い終わったポットや鉢の数を数える。	序数、かけ算
	作業全体	開始時刻、終了時刻を意識して行動する。	時計・時間
生活家庭科	エコ石けん作り	はかりで重さを量る。 ピーカーで水の量 (l, ml) を量る。 キッチンタイマーで時間を測り「ペットボトルをふる、かき混ぜる。」 総個数を数える。2つずつ袋詰めする。	目盛り 時計 序数
	紙すき	キッチンタイマーで「○分間」を決めて作業する。 決められた形にパルプを展開する。 パルプ計量、○回ローラーかけ。	時計・時間 図形 序数
	縫工	枚数、個数を数える 定規で直線をひく 同じ形のものをそろえて重ねる。	序数 図形
	販売	個数、金銭、電卓。	序数、お金
	作業全体	開始時刻、終了時刻 目標個数、出来高	時計・時間 序数

3 学年研究授業『数学』 学習指導案

< 3 学級共通 >

1 題材名 「量と測定」

2 題材設定の理由

(1) 生徒の実態

3 学年の生徒は、3 学級各 8 名、計 24 名が在籍している。

数学に関する力は、学級間で差が大きく、5 月に行ったプレテストを見ると、学級の平均点は、産業科が 90.3 点、農業科が 78.5 点、生活家庭科が 43.4 点であった。総得点が 80 点以上の生徒の数は、産業科 6 名、農業科 4 名、生活家庭科 0 名で、50 点未満の生徒の数は、産業科と農業科で 0 名、生活家庭科で 6 名だった。

本題材に関連する要素をカテゴリー化して、正答率を比較すると次のようになる。

「目盛り」については、産業科では正答率 100%の 2 名を含め、80%以上の生徒が 4 名、50%未満の生徒が 1 名。農業科では正答率 80%以上の生徒が 3 名、50%未満の生徒が 2 名。生活家庭科では正答率 80%以上の生徒が 0 名、0%の 2 名を含め、30%未満の生徒が 7 名であった。

「単位の読み替え」については、産業科では正答率 100%の 4 名を含め、50%以上の生徒が 6 名。農業科では正答率 100%の 2 名を含め、50%以上の生徒が 5 名。生活家庭科では正答率 0%の 6 名を含め、全員 30%未満であった。

基本的な計算力となる「四則計算・文章題」については、産業科では全員正答率 70%以上で、農業科では正答率 70%以上の生徒が 6 名、生活家庭科では正答率 50%以下の生徒が 7 名であった。

学習形態は、各学級の実態を考慮し、能力別のグループを編成せず学級ごとに展開している。学級内での力の差があって進度に配慮を要するが、作業学習などに関連付けて行うことが可能で、学級担任の意向が反映されやすいなどのメリットがある。

(2) 題材について

本校では、数学と国語が今年度より生活単元学習から独立させた教科学習に位置づけられ、現在、授業を実践する中で指導内容などを検討しながら進めているところである。

本題材「量と測定」は、「目盛りを読む学習」を含め、将来社会での自立生活を送る上で必要となる要素である。働く場面では、計量や計数、簡単な計算などは、周囲から求められ必要とされる力であり、日常の生活場面でも調理での計量やものの長さの測定など、身近で必要性の高い題材である。

産業科・農業科は、年間指導計画で 10 月～11 月に実施する予定ではあったが、その前の単元「計算する力」などで時間をかけて授業を進めたことで、実施時期がずれ込んでしまった。生活家庭科では、課題学習という押さえで産業科・農業科と多少計画が異なるが、生徒の実態上、定着するまでに時間がかかり繰り返しの学習が必要なため、再度復習も兼ねて実施することとした。

目盛りの学習では、作業学習の中で収穫物や生産品などを計量する活動と関連付けて、はかりの目盛りを正確に読む力などを伸ばすことを目指している。

また、産業科では四則計算の基礎力を応用できるように「単位の換算」と「合理的な数の数え方」について、パワーポイントを用いて繰り返し学習を行っている。農業科では計算力の維持向上を図るために、毎回授業の導入でプリントを使用したドリル学習を行っている。生活家庭科においては、前述した通り、繰り返しの学習で定着を図るため、週末に復習用のプリントを配布し次の時間に確認を行っている。

各学級とも生徒の関心などを考慮しながら、将来に向けて計算する力や正確に測定する力の育成を重視していきたいと考え、本題材を設定した。

3 学年数学 学習指導案

月 日 平成 2 1 年 1 2 月 1 0 日 (木)
 場 所 3 年産業科教室
 時 間 2 校時 (9 : 5 0 ~ 1 0 : 3 5)
 対 象 3 年産業科生徒 8 名
 指導者 東海林栄徳 (T1) 田中郁江 (T2)

3 指導計画 ~以降各学級~

	日 時	学習内容	目 標	使用教材
1	平成 21 年 11 月 26 日 (木) 2 校時	・単位の換算 / 数の合理的な計算 ・目盛りを読もう	・単位の換算を知る。 ・四則計算を用いて簡単な計算が理解できる。 ・目盛りを読むことができる。	・ P C ・プロジェクター ・スクリーン ・解答用紙 ・問題プリント
2	12 月 3 日 (木) 2 校時	・単位の換算 / 数の合理的な計算 ・目盛りを読もう	・簡単な単位の換算ができる。 ・四則計算を用いて簡単な計算ができる。 ・目盛りを読むことができる。	・ P C ・プロジェクター ・スクリーン ・解答用紙 ・問題プリント
3 本時	12 月 10 日 (木) 2 校時	・単位の換算 / 数の合理的な計算 ・目盛りを読もう	・簡単な単位の換算ができる。 ・四則計算を用いて簡単な計算ができる。 ・目盛りを正確に読むことができる。	・ P C ・プロジェクター ・スクリーン ・解答用紙 ・問題プリント

4 全体目標

- ・単位の換算ができる
- ・四則計算を活用できる
- ・根気よくあきらめずに解答できる

5 本時の学習

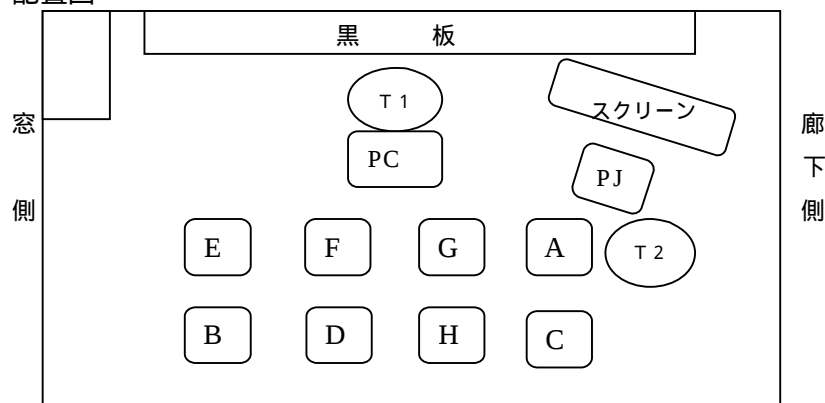
(1) 個別目標

名前	本時の目標	手だて
A	・間違いを恐れず積極的に授業に参加できる。	・自ら考えたり、答えを出せたときに褒めることで、自信がもてるように支援する。
B	・四則計算の中から必要な算法を選ぶことができる。	・解法につまずいた場合は、考える手助けとなる図や視覚的教材を提示する。
C	・小数点や単位の書き忘れなどがなく、見直しができる。	・自分の解法と解答を見直す習慣が定着するように支援する。
D	・四則計算を正確に応用することができる。	・自分の解き方を説明できるように、途中の計算式を書くよう指導する。
E	・得意意識からの不注意な間違いを減らすことができる。	・自分の答えとその算式を見直すよう働きかける。
F	・問題を落ち着いて読み取り、早合点せずに解答できる。	・問題の読み間違いをしないために、ゆっくり落ち着いて読解するよう言葉かけをする。
G	・分からない問題があった場合に、自分から教師を呼びとめ質問できる。	・解答に迷ったり分からない問題があった場合は、自分から質問するよう指導する。
H	・単位の換算や文章問題を、落ち着いて正確に答えることができる。	・自分の解法と解答を見直す習慣が定着するように支援する。

(2) 本時の展開

過程 時間	学習活動	生徒の活動	教師 (T 、 T) の活動	教材・教具
導入 (5 分)	あいさつ 前時の復習	○ 日直の号令であいさつする ○ これまでの学習を振り返る ・ 「単位の換算」「合理的な数の数え方」の繰り返し学習 ・ 「目盛りを読もう」のプリント学習 ○ 本時の学習内容を確認する	正しい姿勢と目線を意識するよう言葉かけ これまでの学習内容とともに、本時の学習のねらいを伝える ・ 作業学習や卒業後の社会でも関わるであろう数の学習であること	授業内容カード
展開 1 (20 分)	単位の換算 / 合理的な数の数え方	○ 時間、距離 (長さ)、重さの単位の換算ができる ○ 解答に悩んでいる場合は、ヒントに注目して考えることができる ○ 目的にあった効率の良い数の数え方ができる ・ 数えるときは数を列挙するのではなく、四則計算を活用できる ・ 正しい計算式をつくり、答えを出すことができる ・ 分からない場合は、自ら教師に質問できる ○ 隣の生徒と解答用紙を交換し、お互いの添削ができる	解答用紙を配り、以下を指示 ・ 解答作業は隣同士交換して行う ・ 早くできた生徒は用紙を裏返す プロジェクターのシャッター開閉 スクリーンにて出題開始 解答に悩んでいる生徒に、ヒントの画像を提示する 具体物を示し、実際の数値を視覚で理解させる 早くできた生徒には、より効率のよい解法を考えさせたり見直しを行わせる 生徒の実態に応じて個別指導をする	P C プロジェクター スクリーン ポインター ものさしや ペットボトル
展開 2 (15 分)	目盛りを 読もう	○ さまざまな目盛りのなかで、今回学習する目盛りについて連想する ○ 「長さ」と「重さ」の大きな単位から答えることができる ・ 長さ (km m cm mm) ・ 重さ (kg g) ○ 指示されたページを解答する ・ 解答する際の単位は指定しない 例 : 12.5cm、12cm5mm とともに正解 ○ 隣の生徒と解答用紙を交換し、お互いの添削ができる	各目盛りについて、単位が大きい順に発表させる プリント問題配布 状況観察し、悩んでいたたり発言の少ない生徒に助言 問題数は時間をみて判断 早くできた生徒は、ケアレスミスがないか各自見直すよう指示 隣同士交換し解答の指示 正答を黒板に提示 正解数を聞き、生徒同士の状況も一部共有化 (上位者のみ)	プリント問題
整理 (5 分)	まとめ あいさつ	○ 本時の数学は、作業学習や卒業後の生活にもつながりがあることを知る ○ 日直の号令であいさつする	数学が苦手な生徒もいるが、今後の生活で、大切な部分も多いことを知らせる 正しい姿勢と目線を意識するよう言葉かけ	

(3) 配置図



6 評価

(1) 授業の評価

観 点		評 価
授業の設計	学習指導案に適切な内容が盛り込まれていたか 目標・手だては明確になっていたか 導入・展開・整理の流し方や時間配分は適切であったか その他	今後の生活にも必要とされる学習内容ではあったと思うが、やや全体量が多かった。 これまでの生徒の実態に即した目標ではあったが、学習面ではなく態度面で課題がある生徒がいた。 全体を通しての時間配分は予定通りだったが、生徒が各自の課題を実感しやすい導入であればより良かった。 今回、スクリーンが見やすいように生徒の席を移動させたが、結局机と机の幅が狭い状態での授業となり、机間巡視の支障となった。
	生徒の学習に取り組む姿勢は自ら学ぶものだったか 全体・個別に対する働きかけは適切であったか T Tの在り方（役割の明確・位置等）は適切だったか 教材・教具は適切であったか	自らの課題に取り組む姿勢や集中力はあったが、教師からの意図的な発問の機会があればより良かった。 時間配分は予定通りだったが、全体を通して説明にかける時間が多く、生徒が活動する場面が分かりにくかった。 役割は明確にしていたが、展開に合わせ連携して動くことはできなかった。 パワーポイントを用いて、視覚から情報を吸収しやすく、興味を示しやすい教材であったと思う。

(2) 全体の目標

目標	評価
単位の換算ができる	○ 繰り返し学習してきた内容なので、ほぼ達成できた。
四則の計算を活用できる	加法から乗法への活用が難しいと感じている場面がみられた。
根気よく落ち着いて解答できる	○ 解けない問題は自ら質問するなど、積極的に取り組む姿勢がみられた。

(3) 個別目標の評価

名前	本時の目標	評価
A	・間違いを恐れず積極的に授業に参加できる。	○ 積極的に解答に取り組んでいたりと、悩んでいる他者に説明するなど、これまでは見られなかった場面があり、自信をもって授業に参加することができた。
B	・四則計算のなかから必要な算法を選ぶことができる。	○ これまでは途中の式を言葉で書いていたが、少しずつそれを四則の計算で書き表せるようになってきた。また、加法から乗法など、四則を活用するようになってきた。

C	・小数点や単位の書き忘れなどがないよう、見直しができる。	順調に解けた問題に対して、見直しをしないことが多く、不注意からの間違いがあった。教師の働きかけで気づくことはできた。
D	・四則計算を正確に応用することができる。	○ 数式で書き表せない場合は文章だが、しっかり途中の式や考え方を書き、四則計算を順序よく活用し計算することができた。
E	・得意意識からの不注意な間違いを減らすことができる。	(当日欠席のため評価なし)
F	・問題を落ち着いて読み取り、早合点せずに解答できる。	問題の読み間違いは少なくなったが、教師の働きかけなしでは計算の順番を間違えてしまうなど、筋道をたてて解答をすることができなかった。
G	・分からない問題があった場合に、自分から教師を呼びとめ質問できる。	(当日欠席のため評価なし)
H	・単位の換算や文章問題を、落ち着いて正確に答えることができる。	問題内容を勘違いしたまま解答を始めた、見直しをしないなどの課題がある。教師の働きかけで気づき、間違いに気づくことができた。

7 資料 省略

- ・ 年間指導計画（共通資料A-1）
- ・ プレテスト（5月実施）の集計表（共通資料B）
- ・ 「単位の換算」「数の数え方」の教材（パワーポイント、解答用紙）
- ・ 「目盛りを読もう」の教材（パワーポイント、問題用紙）

3 学年数学 学習指導案

月 日 平成 2 1 年 1 2 月 1 0 日 (木)
 場 所 3 年農業科教室
 時 間 2 校時 (9 : 5 0 ~ 1 0 : 3 5)
 対 象 3 年農業科生徒 8 名
 指導者 西牧孝徳 (T1) 入田貴広 (T2)

3 指導計画

	日 時	学習内容	目 標	使用教材
1	11 月 26 日 (木) 2 校時	・長さを測る (長さ、高さ、深さ、距離 など)	・目盛りを正確に読む。 ・単位の違いや読み替えを知 る。	計算プリント 学習プリント
2	12 月 3 日 (木) 2 校時	・重さを量る (重さ、分量など)	・目盛りを正確に読む。 ・単位の違いや読み替えを知 る。	計算プリント 学習プリント
3 本時	12 月 10 日 (木) 2 校時	・長さを測る ・重さを量る	・単位の違いを理解し、目盛り を正確に読む。	計算プリント 学習プリント

4 全体目標

- ・計算問題を正確に解く。
- ・目盛りを正確に読む。
- ・グループ学習を通して仲間と協力ができる。

5 本時の学習

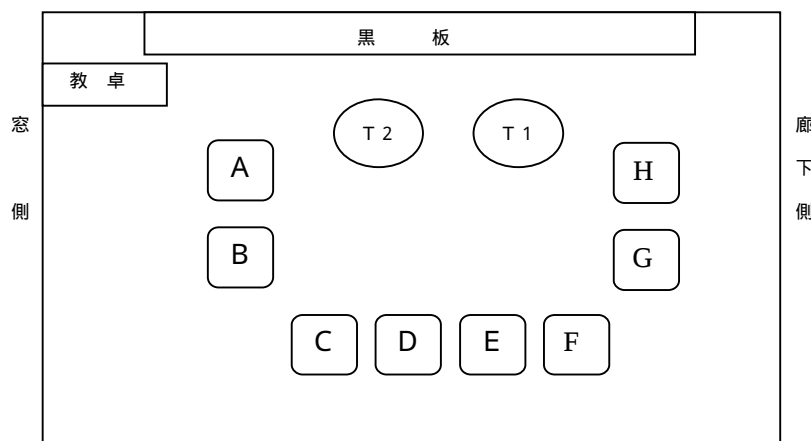
(1) 個別目標

名前	本時の目標	手だて
A	目盛り読みを協力して考える。	周りの意見を聞くように指示する。
B	目盛りを正確に読む。	読み間違えないように支援する。
C	目盛りを正確に読む。	集中して考えるように支援する。
D	目盛り読みを協力して考える。	グループ活動に参加するように支援する。
E	目盛りの読み方を理解する。	グループをまとめながら話を聞くように支援する。
F	グループで協力して考える。	グループ内の話を聞くように支援する。
G	目盛りの読み方を理解する。	自分から考えるように支援する。
H	目盛りを正確に読む。	集中して考えるように支援する。

(2) 本時の展開

過程 時間	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材・教具
導入 (10 分)	挨拶 ドリル問題 答え合わせ 前時までの復習	○ 日直にあわせて挨拶をする。 ○ 計算問題を解く ○ 順番に答えを発表する。 ○ これまで学んだことを復習する。	○ あわせるように指示する。 ○ プリントを配る。 ○ 答え合わせを行う。 ○ 前回までの学習を振り返る。	○ プリント1 (計算ドリル)
展開 (30 分)	本時の学習 ○ 長さの測定 ・ 個別活動 ・ 解答 ・ グループ活動 ・ 解説 ○ 重さの計量 ・ 個別活動 ・ 解答 ・ グループ活動 ・ 解説 発表 まとめ	○ 説明を聞く。 ○ 各自で考える。 ○ 答え合わせをする。 ○ グループで考える。 ○ 解説を聞く ○ 各自で考える。 ○ 答え合わせをする。 ○ グループで考える。 ○ 解説を聞く。 ○ 今日の学習で分かったことや難しかったことなどを発表する。	○ 黒板用定規を用いて長さの測り方を確認する。 ○ プリントを配る。 ○ 生徒を指名して答え合わせをする。 ○ グループでの活動を支援する。 ○ 必要に応じて解説をする。 ○ プリントを配る。 ○ 生徒を指名して答え合わせをする。 ○ グループでの活動を支援する。 ○ 必要に応じて解説をする。 ○ 今日の学習を振り返り、生徒を指名して	○ 黒板用定規 ○ プリント2 (長さ) ○ ものさし盤 ○ プリント3 (重さ) ○ はかり盤
整理 (5 分)	次回予告 挨拶	○ 次回はプレテストを行うことを知る。 ○ 日直にあわせて挨拶をする。	○ 次回は2学期最後の学習で、プレテストの2回目を実施することを伝える。 ○ あわせるように指示する。	

(3) 配置図



6 評価

(1) 授業の評価

観 点		評 価
授業の設計	学習指導案に適切な内容が盛り込まれていたか。 目標・手立ては明確になっていたか。 導入・展開・整理の流れや、時間配分は適切であったか。 その他	- 単元の題材を元に必要な学習内容を盛り込んで実施した。 - 生徒に合わせ、よりシンプルに目標を設定した。手立てでも明確になるように工夫して行った。 導入の計算ドリルで時間がかかってしまった。終了時刻を越えてしまった。 なし
授業の展開	生徒の学習に取り組む姿は自ら学ぶものになっていたか。 全体・個別に対する働きかけは適切であったか。 ＴＴのあり方（役割の明確、位置等）は適切であったか。 教材・教具は適切であったか。	- グループ学習を取り入れたことで、互いに教え合う場面が見られた。黒板に掲示した「ものさし」や「はかり」を使い、積極的に学び合っていた。 - 生徒一人ひとりの実態に合わせて支援できた。 - 適切にできた。事前に役割を確認し、それに沿って進めることができた。 ものさしは、数字を入れたものを使うとよかった。また、黒板に提示したものさしやはかりは、グループ毎に用意しておくことより分かりやすいものになったと思う。 重さのプリントは「g」と「kg」の２種類の回答欄を設けたために、両方に書くと思いこんだ生徒がいた。

(2) 全体目標の評価

目 標	評 価
計算問題を正確に解く。	ほぼ達成できた。
目盛りを正確に読む。	ものさしの目盛り読みはやや難しかった。
グループ学習を通して仲間と協力する。	生徒同士で互いに働きかける様子が見られた。

(3) 個別目標の評価

名前	本時の目標	手だて	評 価
A	目盛り読みを協力して考える。	周りの意見を聞くように指示する。	教師の指示がなくても協力して目盛りを読むことができた。
B	目盛りを正確に読む。	読み間違えないように支援する。	読み間違えることなく、とても落ち着いて正確に目盛りを読むことができた。
C	目盛りを正確に読む。	集中して考えるように支援する。	十の位、一の位での読み違いが幾つか見られた。
D	目盛り読みを協力して考える。	グループ活動に参加するように支援する。	グループ活動を通し、教えてもらいながら正解して喜ぶ場面が見られた。
E	目盛りの読み方を理解する。	グループをまとめながら話を聞くように支援する。	あまり得意でないことには消極的だが、グループ活動を通して努力する場面が見られた。
F	グループで協力して考える。	グループ内の話を聞くように支援する。	H君が欠席していたこともあって、一人で考える場面が多かった。グループ内での働きかけにも消極的だった。
G	目盛りの読み方を理解する。	自分から考えるように支援する。	自信がないところがあり、時々教師に質問するところがあったものの、ほとんど正解していた。
H	目盛りを正確に読む。	集中して考えるように支援する。	(欠席)

7 資料 省略

- 年間指導計画（共通資料A）
- プレテスト（5月実施）の集計表（共通資料B）
- ドリル計算プリント（資料1）
- 長さ計測用プリント（資料2）
- 重さ計量用プリント（資料3）

3 学年課題学習（数学的要素） 学習指導案

月 日 平成 21 年 12 月 10 日（木）
 場 所 理科室
 時 間 2 校時（9：50～10：35）
 対 象 3 年生活家庭科生徒 7 名
 指導者 若山大輔（T1）

3 指導計画

	日 時	学習内容	目 標	使用教材
1	11 月 26 日（木） 2 校時	・量の単位（液体の量、重さ） ・身近なものと単位	・単位の読み方を覚える ・単位が身近なものに使われていることを知る	記入用紙 ペットボトル（大・小） 牛乳パック
2	12 月 3 日（木） 2 校時	・容器の大きさと単位 （液体の量）	・容器ごとに、容量（ml, l）を区別し、量の大小を理解する。 ・容量の単位を覚える	ペットボトル（大・小） 牛乳パック（大・小） アルミ缶
3 本時	12 月 10 日（木） 2 校時	・重さを量る ・単位と対応させる	・デジタルばかりの使い方を覚え、正しく読むことができる。 ・容器ごとに重さ（g, kg）を区別し、重さの大小を理解する。	デジタルばかり 洗剤の容器 体重計 学習用紙 粉石けん
4	12 月 17 日（木） 2 校時 （まとめ）	・単位の確認 ・容器の大きさ、大小の確認 ・デジタルばかりの使い方	・それぞれの確認をして、できた所をしっかりと覚える。	まとめプリン ト

4 全体目標

- ・単位の読み方を覚える。
- ・身近な容器の量を知り、大小を理解する。
- ・グループ学習を通して仲間と協力ができる。

5 本時の学習

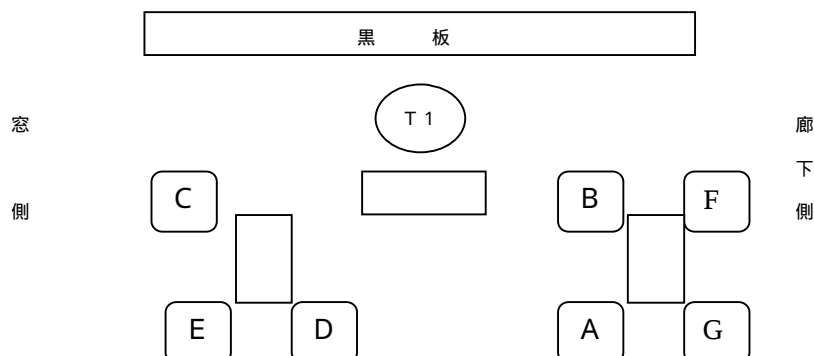
（1）個別目標

名前	本時の目標	手だて
A	重さの大小(kg, g)を理解する。	洗剤や石けんをデジタルばかりで量り、数字を確認する。
B	重さの単位を覚えて、区別する。	実際に体重計や洗剤を量ることで違いを知る。
C	重さの大小(kg, g)を理解する。	洗剤や石けんをデジタルばかりで量り、数字を確認する。
D	重さの単位を覚えて、区別する。	実際に体重計や洗剤を量ることで違いを知る。
E	重さの単位を覚えて、区別する。	実際に体重計や洗剤を量ることで違いを知る。
F	重さの単位を覚えて、区別する。	実際に体重計や洗剤を量ることで違いを知る。
G	重さの大小(kg, g)を理解する。	実際に体重計や洗剤を量ることで違いを知る。

(2) 本時の展開

過程 時間	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材・教具
導入 (10 分)	挨拶 前時までの 復習	○ 日直にあわせて挨拶をする。 ○ 指導者の話を聞く ○ 容量の単位を発表する ○ 具体物を使って、量の大きい順番に並べる（今回は1セットのみ）	○ あわせるように指示する。 ○ 前回の学習の説明をする ○ 容量の単位を質問する。 ○ 具体物を机の前にランダムにならべて、生徒に正しくならべてもらう。 ○ 正解を教える	・ ペットボトル ・ 牛乳パック ・ アルミ缶 ・ 黒板
展開 (30 分)	本時の学習 ○ 重さの計量 ・	○ デジタルばかりを2人一組で用意する。 ○ 指導者の説明を聞く ○ 筆箱を量って、重さを用紙に記入する（2人1組）。 ○ 単位をつけて読む。 ○ 体重計に乗る。 ○ 単位をつけて読む。 ○ できた人は、重さごとにラベルのかかれた洗剤の箱を量ってみる。 ○ 洗剤の箱を大きい順番に並べる。 ○ 正解を聞く ○ 用紙に記入する。 早く終わった生徒は、洗剤の箱に決められた分量の洗剤を入れて量ってみる。	○ デジタルばかりの用意をよびかける。 ○ 重さの単位について説明する。 ○ はかり方の確認。 ○ 重さを確認する。 ○ 体重計に乗ってもらう（2, 3人） ○ 体重を確認する。 ○ 早くできた人に対して、重さごとにラベルのかかれた洗剤の箱を渡す。 ○ 洗剤の箱を重い順番に並べるように指示する。 ○ 正解を伝える もし、まだ余裕のある生徒がいたら、自分でそれぞれの量の洗剤を入れて量ってもらう。	・ 黒板 ・ デジタルばかり ・ 記入用紙 ・ 筆箱 ・ 体重計 ・ 洗剤の箱
整理 (5 分)	次回予告 挨拶	○ 指導者の話を聞く。 ○ 日直にあわせて挨拶をする。	○ 口頭で今回の学習内容を確認する。 ○ 次回は量の学習のまとめを行うことを伝える。	

(3) 配置図



6 評価

(1) 授業の評価

観 点		評 価
授業の設計	学習指導案に適切な内容が盛り込まれていたか。 目標・手立ては明確になっていたか。 導入・展開・整理の流れや、時間配分は適切であったか。 その他	- 単元の題材を元に必要な学習内容を盛り込んで実施した。 - 生徒の実態に応じて具体的な目標を設定した。具体物を使って、実際に量ることで重さ、単位の違いを実感してもらうように配慮した。 前回のまとめに15分かかり、その後の活動の時間がおしてしまった。ゆえに最後の「洗剤の箱の重さの区別」がじっくり行えなかった。なし。
授業の展開	生徒の学習に取り組む姿は自ら学ぶものになっていたか。 全体・個別に対する働きかけは適切であったか。 教材・教具は適切であったか。	生徒の実態に応じてグルーピングをし、協力し合って学習をすすめることができた。具体物を実際に操作することで学習意欲が高まった。 生徒によっては、学習内容が理解されたか十分に確認されないまま、次の展開に行ってしまった。 ペットボトルの使用は生徒がイメージしやすかったが、種類が多かったので生徒に応じて数を減らしてもよかった。 デジタルばかりは、どの生徒も読むことができた(3桁までは)。体重計との区別もできているが、単位との結びつきが難しい生徒もいた。 記入用紙は、洗剤の重さを順番に並べるところと付箋の単位表示が違い、gに統一した方が良かった。

(2) 全体目標の評価

目 標	評 価
単位の読み方を覚える。	容量(ml, l, cc)については、記憶があいまいな生徒がいたので再度確認が必要。重さ(g, kg)についてはほぼ覚えることができた。筆箱の重さは自分たちで量って読むことができた。
身近な容器の量を知り、大小を理解する。	ペットボトルはものによっては大小が難しいものもあった。同じ単位では大きさは理解できていた。
グループ学習を通して仲間と協力ができる。	生徒の仲の良さや理解度に応じて2人ずつグルーピングしたので、話し合いながら円滑に学習をすすめることができた。

(3) 個別目標の評価

名前	本時の目標	評価
A	重さの大小(kg, g)を理解する。	体重と筆箱の重さの違いは理解していたが、単位の区別は少々自信がない様子だった。
B	重さの単位を覚えて、区別する。	単位の読み方を「グラム」としていたので、訂正された。その後は「グラム」と書くことができた。単位の区別は自信なし。
C	重さの大小(kg, g)を理解する。	欠席
D	重さの単位を覚えて、区別する。	友達の間違いを指摘して、正しく「グラム」と書くことができた。 体重の重さも「キログラム」と答えていた。
E	重さの単位を覚えて、区別する。	単位を区別する意味の理解が難しく、最初正解していたものがプリント記入になると反対につけているものもあった。
F	重さの単位を覚えて、区別する。	単位の読み方は体重とデジタルはかりに対応して正しく答えることができた。
G	重さの大小(kg, g)を理解する。	うっかりミスで反対に書いていたものもあったが、体重と筆箱の重さの違いを理解して正しく用紙に記入していた。洗剤の重さも重い順番にすばやく並べ替えることができた。

7 資料 省略

- 年間指導計画(共通資料A2)
- プレテスト(5月実施)の集計表(共通資料B)
- 5月学習時のプリント(資料1(参考))
- 夏休みの宿題プリント(資料2(参考))
- 本時の学習記録用紙(資料3)

第 章

プロジェクト研究 「体力づくり」

1 経緯

障がいが多様化により様々な生徒が入学してくるようになった今、一人ひとりの運動能力の違いを考慮した効率的な体力づくりを考えていく必要がある。本校体力づくりの成果として持久力は高まっているもののバランスの取れた成長発達を考える時、他の体力要素も育成する必要があると考える。このことから昨年度、試行期間を設け『習熟度別グループ』を編成し取り組んだ。その結果、課題として

『試行期間が短かったため、検証可能なデータが取れなかった』

『体育専科の指導者がいないグループがあった』

『見直しの意義が指導者、生徒にしていない部分があった』

ことが挙げられた。

そこで今年度は、昨年の課題を踏まえ試行期間をより長く設定し再度、研究を進めることとした。

2 試行の目的

- ・個に応じたより細やかな取り組みを行うこと
(習熟度別グループによる取り組み)
- ・持久力だけでなく体力要素の育成を行うこと
(マラソン以外の運動の取り組み)

3 実施期間

前期：5月11日(火)～6月15日(水)

後期：9月14日(月)～11月2日(月)

4 活動場所

前期	月	火	水	木	金	備考
L	グラウンド(F)	グラウンド	グラウンド	記録日	グラウンド	
	瞬発力、調整力	持久力	持久力	持久力	持久力	
M	今中マラソン	今中マラソン	今中マラソン	記録日	グラウンド	
	持久力	持久力	持久力	持久力	筋力、調整力	
H	今中マラソン	グラウンド	今中マラソン	記録日	今中マラソン	
	持久力	瞬発力	持久力	持久力	持久力	

後期	月	火	水	木	金	雨天
L	グラウンド	グラウンド	グラウンド	記録日	グラウンド	格技場
	持久力	様々な動き	持久力	持久力	様々な動き	
M	グラウンド	今中マラソン	今中マラソン	記録日	グラウンド	体育館
	筋力、調整力	持久力	持久力	持久力	筋力、調整力	
H	今中マラソン	グラウンド	今中マラソン	記録日	体育館	体育館
	持久力	瞬発力、筋力	持久力	持久力	筋力	

5 グループ編成及び指導者

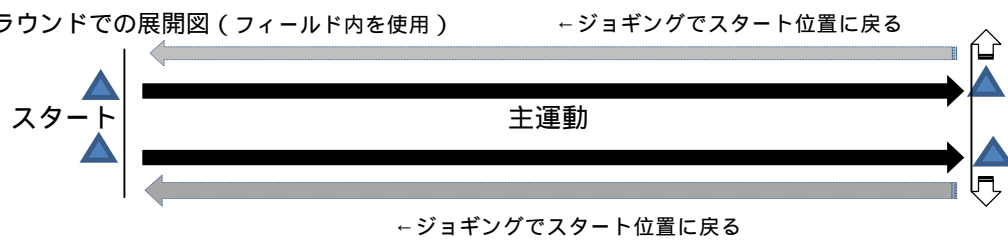
	学年	産業科	農業科	家庭科
L	1年	1		5
	2年		2	4
	3年			3
	指導者	青野、藤倉、大口、（今野）、吉田、天満、木村、 <u>山田</u> 、立田、武田		
M	1年	7	6	2
	2年	5	2	4
	3年	5	5	5
	指導者	<u>福寿</u> 、村井、阿部い、丸山、安田、熊谷、水野、廣澤、山本、安田美、東海林、三条、西牧、阿部昌		
H	1年	1	3	1
	2年	1	4	
	3年	3	3	
	指導者	高佐、矢倉、小林、 <u>金子</u> 、渡邊梨、田中、入田		

6 各グループの実践（後期）

Hグループ

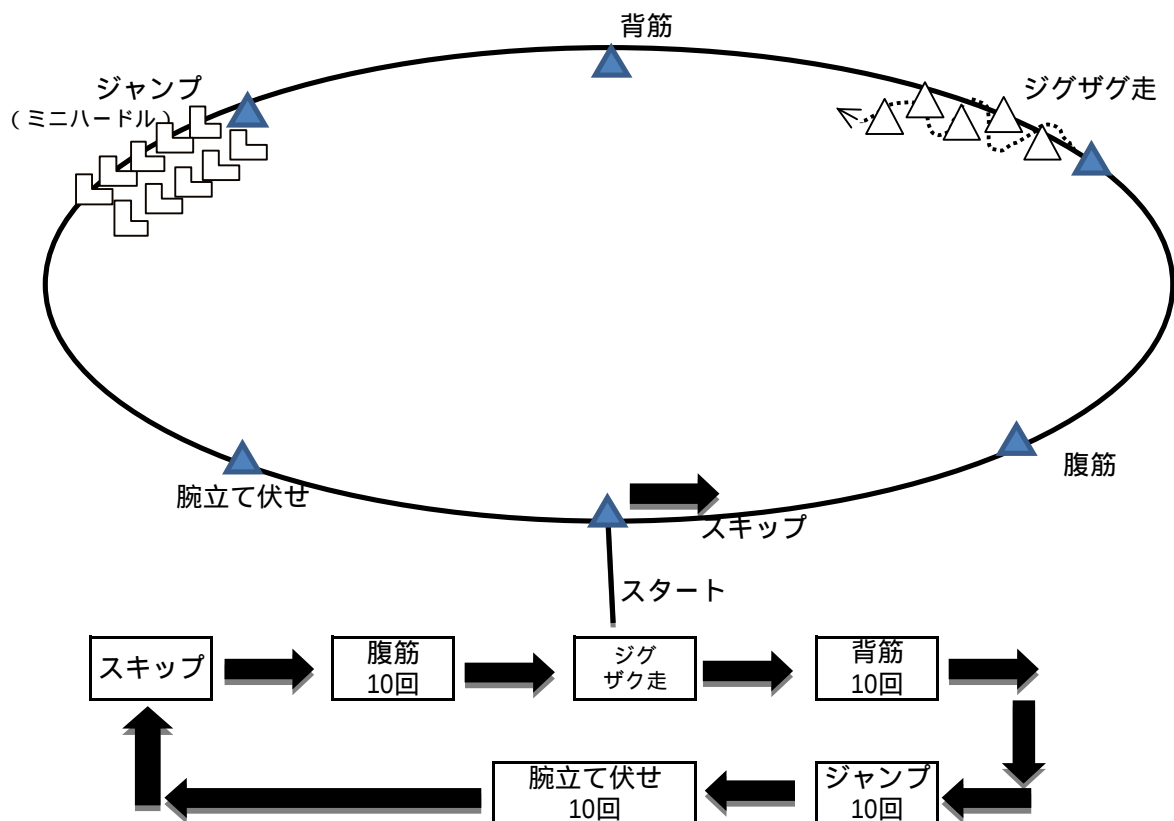
曜日	月	火	水	木	金
運動種目	持久走	瞬発力	持久走	持久走	瞬発力
	今中コース (1周 = 800m)	グラウンド2周 基本ドリル ・スキップ ・けんけん ・踏みつけ ・もも上げ ・バウンディング 変形ダッシュ シャトルラン	今中コース 1,2のみ活動	今中コース 記録日	体育館

グラウンドでの展開図（フィールド内を使用）



Mグループ

MG サーキットトレーニング展開図（グラウンド）

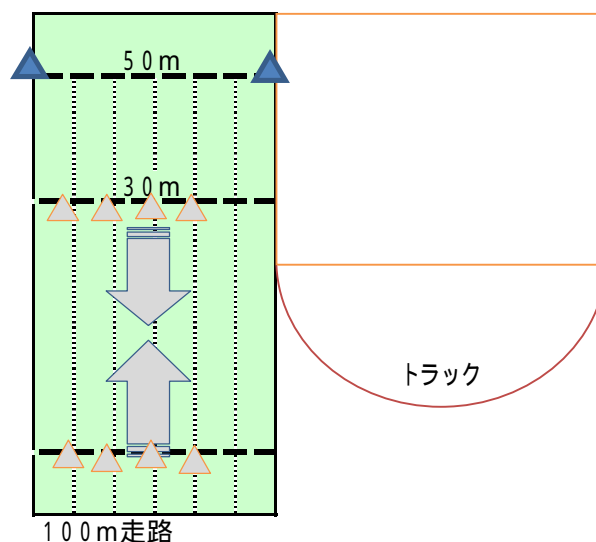


Lグループ

目安時刻	学習内容	指導内容等	備考
9:05	玄関前に集合（通常通りの隊形） ラジオ体操	対応は各学級ごとに行う	時間厳守 音響機器
9:12	グラウンドへ移動 Lグループで集合し点呼を受ける （返事ははっきりと）	点呼（山田）	
9:15	15分間走スタート（月、水） 5分ごとに笛を鳴らす	10分間走スタート（火、金） ↓	三角コーン（大） 2本
9:20	『ピカチュウをゲット』 色々な動き（20m走路） ・大股歩き（2本） ・スキップ、けんけん（2本） ・後歩き、走り（1本）		三角コーン（小） 6本
9:30	笛の合図でゴール ・変形ダッシュ（3～4本）		マラソンカード
9:32	グラウンド内で整理体操	体操担当（山田）	
9:35	解散	股関節のストレッチ	

～運動とねらい～

- ・大股歩き・・・股関節の可動域を広げる。
- ・スキップとけんけん・・・体軸と姿勢の矯正
- ・後ろ歩き・走り・・・バランスを取る動き（調整力）
- ・変形ダッシュ・・・アンバランスからの速い動き（瞬発力、調整力）



7 各グループ反省

前期

目的

『持久力の向上及び色々な動きの習得（生きていくための基礎体力）』（Lグループ）

『学校生活のリズムづくり（運動から生活のリズムを構築）』（Lグループ）

全グループ○

実施期間（GW後から体育祭特別日課開始までの期間実施）

Hグループ	○	・短期間で同じ内容を集中して取り組めるような日程を組んでもよい。
Mグループ	○	・短かったが仕方ない。
Lグループ	○	・仕方ない。

場 所（グラウンドや体育館も使用した）

Hグループ		・他のグループの絡みもあるが、週2回グラウンドメニューを実施してもよい。
Mグループ	○	
Lグループ	○	・グラウンドは良かった。生徒の把握ができてよい。

生徒グループ分け（学年で決定）

Hグループ	○	・特にないが、実施状況や目的への理解ができていないとHグループは難しい。
Mグループ	○	・Mグループから他のグループに変えたほうが良い生徒がいる。他のグループのチーフと相談して後期は入れ替えをしたら良い。
Lグループ	○	・良い。

運動内容

Hグループ		・雨の日の対応は、HMは体育館でエアロビで可能だが、Lは冬のように格技場で実施するなど実態や場所の確保も考えていければよい。サーキットを実施しても良いかもしれない。瞬発力は良かったが、上半身の強化も必要ではないか。
Mグループ	○	・背筋運動が一人でできない生徒がいる。やりやすいものに工夫するか、足を押さえる指導者を多く配置したら良い。
Lグループ	○	・生徒がどこで何をすれば良いかが分からず困っていた。夏はずっとマラソンで良い。

授業の進め方

Hグループ	○	・内容がステップアップしていった、同一内容ではなく良かった。生徒ができそうでできないところもメニューにあり良かった。メインは基本的に一人で指示を出すのが良い。
Mグループ	○	・サーキットが金曜日だけであったが、雨で流れたので火、金曜日など2回行いたい。
Lグループ	○	・グラウンドは良かった。生徒の把握ができてよい。

その他（グループ別体力づくり全体について）

Hグループ		・指導者は増やせるか？金曜日の今中コースがHグループだけで行う場合、行事が重なって欠ける学年があると監察に立えない場所がある。Lグループは義務の併設校を参考にできないか？
Mグループ		・マラソンの時、歩く人にビブスなどを着せると分かりやすいのではないか。
Lグループ		・細かい運動は運動量としては少なく、物足りなく感じた。もったいない。走り終わった後に少しだけスキップするなど反復して行ったほうが良い。

後期
各グループの目的

Hグループ		グループ分けをする必要があるが、「習熟度別」というだけでは分かりにくい。どんな力どの程度まで付けさせるためにどんなメニューを考えていくのかははっきり提示してもらった方が生徒分けやすいと思う。メニューは分けた結果、グループごとの実態に合わせて多少手直しすると良い。
Mグループ	○	
Lグループ	○	

実施期間（夏休み後から学校祭特別日課開始までの期間実施）

Hグループ	○	・もう少しじっくりやっても良い気がする。 ・実習との兼ね合いもあるのでちょうど良い ・行事などを考えるとやむを得ない
Mグループ	○	・期間は短かったが、サーキットトレーニングを週2回行えて良かった。
Lグループ	○	・年間を通して行事などが多くこの時期しかないのではないか。

場 所（グラウンドや体育館も使用した）

Hグループ		・現段階ではこのような場所ではないが、廊下や階段の活用も考えたい。
Mグループ	○	・外だと長い距離を走るし、指導者もついているのでごまかすこともあまりなく、良い運動になっていた。
Lグループ	○	・分かりやすい。

生徒グループ分け（学年で決定した）

Hグループ	○	・最終的には学年部会で決定しておらず学級で決定した。
-------	---	----------------------------

○	・ MグループからHグループに移動でき良かった。
Mグループ	○ ・ 特になし。
Lグループ	○ ・ 同じ習熟度の生徒で取り組みやすい。

運動内容

Hグループ	○ ・ 生徒が運動効果をどう理解できるかが難しいと思う。 ・ 下半身についてはかなり鍛えることができた。上半身の強化が課題。 ・ 筋トレは普段できないのでよい。今の生徒に筋トレは必要。
Mグループ	○ サークットトレーニング <記録> ・ 名前を生徒に言わせたのは良かった。また、指導者からの確認の声かけをしたので周回数が把握できた。 ・ 記録の伸びはそれ程でもないが、各種目がスムーズにできるようになった。 ・ 記録用紙を作ったが、記録の提示の仕方が課題である。 <腹筋> ・ 初めブルーシートが小さかったが、大きくしたところみんなでできた。ただ、やり方を指示する必要があった。 <ジグザグ走> ・ 2列用意し、生徒は空いている方で行い、特に問題はなかった。 <背筋> ・ 用意したシートからあふれて待っている生徒はいなかった。また、足を支える必要もなかった。 <ジャンプ> ・ ミニバーを倒す生徒は後半になって少なくなった。両足ジャンプができない生徒もきちんとできるようになった。 ・ 用具の片づけを進んでやってくれた。 <腕立て伏せ> ・ 腕の曲げ方や姿勢が悪かったり、腹をべったり地面についてしまう生徒がいて個別指導が必要な生徒がいた。→冬季のサーキットの様子を見て重点的に指導はできる。 ・ 指導者は2～3人必要である。 <スキップ> ・ できなかった生徒もできるようになった。 <一緒にやった指導者> ・ 7～8周やったらかなりきつかったので、生徒はがんばっていたと思う。
Lグループ	○ ・ カードを楽しみにしている生徒もいる。少し幼い感もある。(2) ・ グラウンドでの周回走の方が運動量が多くてよい。

授業の進め方

Hグループ	○ ・ 火曜のいろいろな動きのとき、計画通りのメニューが行われ慣れてきた頃から少しずつ難しくしていく流れが取られており大変良かった。
Mグループ	○ ・ 役割分担して協力してできた。
Lグループ	○ ・ T1とSTとの役割分担ができた。

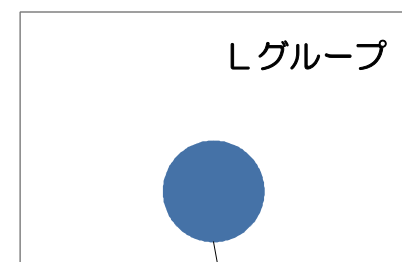
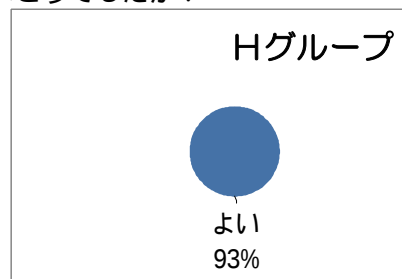
その他(グループ別体力づくり全体について)

Hグループ	○ ・ じっくりと実施し、より多くのデータをたくさん取る必要がある。 ・ 2年間の「試行」というのはどうだったのでしょうか？
Mグループ	○ ・ 楽しんで意欲的にやっていた。また、用具の片付けも進んでやっていた。
Lグループ	○ ・ 能力差が大きいのので、T1の指導を中心に生徒の実態を押さえつつ、学級の指導者にある程度任せてもよい。 ・ マラソンのみ比べると運動量は減少するが、いろいろな体力要素を高めるためには御理解いただきたい。 ・ 「ピカチュウゲットだぜ」の企画自体は良いと判断できる。名称は個々の生徒に応じる必要がある。 ・ 「15分間持久走」「10分間持久走+いろいろな動き」を隔日で行う。 ・ グループ内での打ち合わせを設け、目的や方法などの共通理解を図る。

8 各グループにおける生徒へのアンケート結果

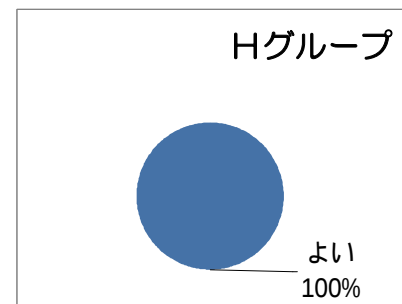
今年度はマラソン以外の運動も行いました。マラソンのみに比べどうでしたか？

	よい	回答	回答率	よくない	回答	回答率
		14	93%		1	7%
Hグループ 回答数 15	理由 ・ダッシュより心拍数が上がった ・体力がついた ・単調なマラソンにはあきたので ・体全体に筋肉がついた ・マラソンばかりだと上半身に筋肉がつかない ・今中コースを走るより楽だった			理由 ・マラソンのタイムが落ちた		
	よい	回答	回答率	よくない	回答	回答率
		26	76%		8	24%
Mグループ 回答数 34	理由 ・マラソンだけよりよい ・ただ走るより良かった ・何周できるか楽しみ ・20分台を超えないようにしました ・サーキットよりマラソンの方がきつくなかったです ・疲れたけれど楽しかった ・あまり疲れることもなかった			理由 ・走るのが好きだから ・辛かったからです ・記録が上がったり下がったりしてしまいました。 ・走る方がいい		
	よい	回答	回答率	よくない	回答	回答率
		9	60%		5	33%
Lグループ 回答数 15	理由 ・走りやすかった ・学校に近いと安心だから			理由 ・雑草につまづいた ・今中コースがよい ・きつくて疲れるから (2)		



各グループの運動種目はどうでしたか

	よい	回答	回答率	よくない	回答	回答率
		15	100%		0	0%
Hグループ 回答数 15 ・筋トレ ・ダッシュ	理由 ・自分のためになるから ・辛い練習を乗り越えた ・やりやすかった ・筋肉がついた ・体の調子を整えるのによかった ・今一番鍛えたいところがやれてよかった			理由		
	よい	回答	回答率	よくない	回答	回答率
		25	74%		9	26%
Mグループ 回答数	理由 ・腹筋、背筋などが増えてよかったです ・スピードが速くなった ・いろいろなしかけがあっ			理由 ・自分のペースでいけなかった ・足が痛かったけどがんばりました		

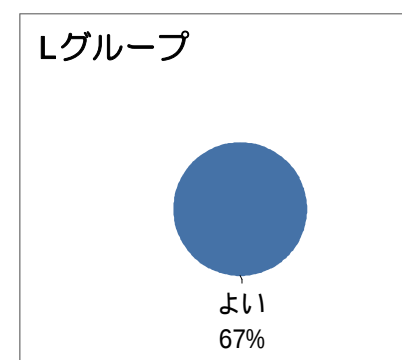
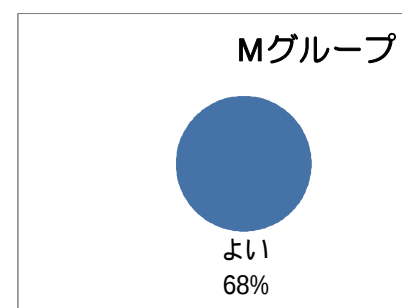


34 ・サーキット運動	て楽しかった ・楽しいから。自分より下がいるからよい ・走るだけでないのがよい ・いろいろなメニューができ、いい運動になった	・雨で地面がぬれていました ・いろいろな運動で腰を痛めました												
Lグループ 回答数 15 ・ピカチュウゲットだぜ	<table> <tr> <th>よい</th><th>回答</th><th>回答率</th></tr> <tr> <td></td><td>11</td><td>73%</td></tr> </table> ・どのくらい走ったかわかりやすい ・いっぱいハンコをもらえうれしかった(3)	よい	回答	回答率		11	73%	<table> <tr> <th>よくない</th><th>回答</th><th>回答率</th></tr> <tr> <td></td><td>4</td><td>27%</td></tr> </table> ・はずかしい。子どもっぽい(3) ・うれしくない	よくない	回答	回答率		4	27%
よい	回答	回答率												
	11	73%												
よくない	回答	回答率												
	4	27%												



今までの全校一斉で行う体力づくりに比べてどうでしたか？
(気持ちや意欲)

Hグループ 回答数 15	<table> <tr> <th>よい</th><th>回答</th><th>回答率</th></tr> <tr> <td></td><td>13</td><td>87%</td></tr> </table> 理由 ・少人数で走りやすい ・少人数でスムーズ ・一人ひとりのタイムが分かるから ・同じくらいのレベルの人とやれてよかった ・サーキットがよかった ・腹筋やボール投げをやってみた(2)	よい	回答	回答率		13	87%	<table> <tr> <th>よくない</th><th>回答</th><th>回答率</th></tr> <tr> <td></td><td>2</td><td>13%</td></tr> </table> 理由 ・全校生徒でやりたい	よくない	回答	回答率		2	13%
よい	回答	回答率												
	13	87%												
よくない	回答	回答率												
	2	13%												
Mグループ 回答数 34	<table> <tr> <th>よい</th><th>回答</th><th>回答率</th></tr> <tr> <td></td><td>23</td><td>68%</td></tr> </table> ・サーキットは背筋、ジャンプがよかった ・集中できる ・今までの自分の実力が確かめられる ・全校でやるよりグループの方がよい ・混んでいて走りにくいですが楽しかった ・皆でスクワットをやっていいと思いました	よい	回答	回答率		23	68%	<table> <tr> <th>よくない</th><th>回答</th><th>回答率</th></tr> <tr> <td></td><td>10</td><td>29%</td></tr> </table> ・先生の声が聞こえないから ・全員で走った方がよかった ・自分より下の人がいないとやる気が出ない ・逆にサーキットや周回走の方が体が熱くなる ・自分がどのグループかわからないことがある	よくない	回答	回答率		10	29%
よい	回答	回答率												
	23	68%												
よくない	回答	回答率												
	10	29%												
Lグループ 回答数 15	<table> <tr> <th>よい</th><th>回答</th><th>回答率</th></tr> <tr> <td></td><td>10</td><td>67%</td></tr> </table> ・サーキットをやってよかった ・人数が少なく走りやすい。安心(2) ・グループの方が楽しい(2)	よい	回答	回答率		10	67%	<table> <tr> <th>よくない</th><th>回答</th><th>回答率</th></tr> <tr> <td></td><td>4</td><td>27%</td></tr> </table> ・辛い ・少しよくなかった	よくない	回答	回答率		4	27%
よい	回答	回答率												
	10	67%												
よくない	回答	回答率												
	4	27%												



今後、体力づくりでどんな力を付けたいですか。
また、どんな運動をしたいですか？

Hグループ	・筋トレとダッシュをしたいです(2) ・腹筋(2) ・ストレッチ ・腕の筋力と足の筋力を付けたい ・足腰の筋力を付けたい	・足よりも腕腰を鍛えたい ・瞬発力を付けたい。 ダッシュ系統の運動 ・持久力を付けたい ・心拍数を上げたい ・働けるような力を付けたい
Mグループ	・エアロビだけ。よさこいをやりたい。 ・サーキット運動、エアロ	・ボールを投げたい ・腕の力を付けたい ・だまって立っている運動

	ビ、周回走。(3) ・エアロビでピリーをやりたい ・持久力を付けたい(3) ・足のスピードを速くしたい	をしたい ・サッカー ・腹筋と腕立てをしたい ・ウォーキング ・ダンス ・縄跳び
Ｌグループ		・みんなで走りたい(5)

9 成果と課題

成果について

ア Hグループ

- ・前期の反省から後期は週2回、瞬発力の育成や筋力向上のためのトレーニングを取り入れることができた。生徒にとって筋トレは普段行う機会が少ないので有効であった。
- ・毎回同じ内容ではなくスモールステップで強度を高めていくよう内容を工夫をした。その結果として、生徒も意欲的に取り組んでいた。(指導者の反省結果から)
- ・持久力だけでなく、瞬発力や全身の筋力の向上につながる運動を生徒に提供できた。

イ Mグループ

- ・毎日持久走をするよりも週2回グラウンドを使ってサーキット運動をした方が、生徒は楽しみながら意欲的に取り組むことができた。(指導者の反省結果から)
- ・記録の伸びは少しかつたが、サーキット運動がスムーズにできるようになり、持久力のみならず筋力や瞬発力、調整力など他の要素も伸ばすことができたと感じる。
- ・一斉に取り組むよりも持久走は混雑しなくなった。また、サーキット運動はグラウンドで行うので全体を把握しやすくなった。

ウ Lグループ

- ・生徒数も絞られ担当生徒の把握がしやすく効率的であった。
- ・指導者間の連携を取るため改めて時間を設ける必要があるが、スムーズな運営ができた。
- ・毎時間グラウンドで運動を行うため生徒に分かりやすかった。また、15分間走も1周250mトラックの方が800mの今中コースに比べ見通しが持ちやすかった。(生徒アンケート結果から)
- ・生徒も同習熟度集団という意識のもと意欲的に取り組めた。
- ・周回数が理解しやすいよう個人記録表を用いたことは意欲付けにつながった。また成果が視覚的に分かりやすかった。(生徒アンケート結果から)
- ・持久力の大きな変化(向上)は見られないが、姿勢への意識や調整力の向上につながったと考えられる。ケンケンがスムーズにできるようになった生徒も見られた。

以上 各グループの反省

エ まとめ

生徒に対するアンケート結果から3グループに共通して言えることは、持久力のみ育成よりは意欲的に取り組めたということである。ただ、今回の取り組みに対しての効果は、変容を示す継続的なデータ採取を行っていないため客観的なデータ(結果)から判断はできない。しかしながら、体力づくりで身に付けさせたい力を考えた場合、生徒個々によって異なるが、総じて持久力を柱とし瞬発力、調整力、柔軟性を偏りなく高めることだと考える。知的障がいを持つ生徒の運動能力は、健常児に比べ低いと言われている。その理由は絶対的な運動経験不足と動機付け不足だとも言われている。今回の取り組みで、サーキット運動や筋トレ、個人カードの工夫という取り組みを行うことで生徒の意欲、動機付けが高まったことは確かである。結果として意欲的な取り組みが運動能力、体力の向上につながることは可能性は高い。今後は、さらなる工夫改善を行い、生徒の意欲や主体性が高まる取り組みを行っていく必要がある。

習熟度別グループでの取り組みは、改善点はいくつかあるが、グループ内指導者の反省と生徒アンケートからも有効だったと言える。生徒間には競争の原理が芽生えそれが意欲の向上につながった。指導者側も実態の把握や評価も行いやすく、各グループにおいてきめ細やかな指導ができたのではないだろうか。

課題について

ア Hグループ

- ・生徒が運動効果を理解できていない傾向があるので、生徒に対し各運動効果を分かりやすく説明する方法を今度模索する必要がある。
- ・慣れてきた頃に終わってしまったため、できればさらに長期間取り組めるよう希望する。
- ・グループ分けの基準が指導者側に理解しにくい面があった。

イ Mグループ

- ・雨天時の対応を考える必要がある。例えば冬期間のサーキット運動をするのか、他のグループと一緒に周回走をするのか検討が必要である。
- ・試行期間には、全員の記録を一覧にした用紙を毎回担任に配布していたが、生徒への提示の仕方をどのようにするのか検討が必要がある。

ウ Lグループ

- ・生徒の中には全校一斉で走りたいという意見や、指導者の中にも持久力の育成のみでよいのではないかという意見があり、運動内容の検討や再考が必要である。
- ・指導者間の連携をさらに深め、運動効果や内容、進め方などを担当スタッフで作り上げる必要がある。また、MTを誰でも担当できるようにしていく必要もある。

エ まとめ

指導者間の話し合いにより各グループで挙げられた課題をまず改善する必要がある。今後は、体力づくり部会が中心となり、本校体力づくりの目的（ 1 ）を踏まえた各グループのめあて、運動内容、進め方を再検討し、全ての指導者の共通理解のもと取り組む必要がある。

今後は、スポーツテストや体力測定を体力づくりのなかで定期的に行い、行動体力の変化を検証したい。

1（本校体力づくりの目的）

日常的な内容の運動を継続して行うことで、現在及び将来の社会生活、家庭生活及び職業生活に必要な基礎体力の向上と自ら進んで体を鍛え、明るく健康に生きようとする態度・習慣を形成することを目的とする。

10 参考文献

愛知県教育センター 研究報告書 第149号

北海道教育委員会平成18年度児童生徒の体力・運動能力調査報告書

11 参考資料

文部科学省 平成20年度体力・運動能力調査結果について（抜粋）から

ア 体力・運動能力の年次推移

長期的にみると、握力についてはほとんど変化はみられないが、走・跳・投能力にかかる種目は、体力水準が高かった昭和60年代頃と比較すると、依然低い水準になっている。

イ 運動・スポーツの実施頻度と体力

運動の実施頻度が高いほど体力水準が高い関係は8、9歳頃から明確になり、その傾向は79歳に至るまで認められる。

medical now №51 スポーツと健康 体力のとらえ方，<http://www.med.shimadzu.co.jp>

ア 体力の定義について

体力のとらえ方は大別すると、(1)走・跳・投に代表される身体的行動力、あるいは行動の基礎となる身体的能力を意味する（行動体力）、(2)外からのストレスに対して身体を防衛したり、環境に適応したりする能力（防衛体力）、(3)身体と背心は不可分であり、身体活動は精神要因によっても規制されるので体力には精神的要因も含めた方がよいとする考え方の3つに要約される。

(1)動きづくり (2)力づくり (3)心づくり

イ 行動体力の五つの要素について

・筋力

筋肉の収縮によって生まれる力。体力の基本とも言われている。

・持久力

長い時間エネルギーを維持できる力。心肺機能がものをいう全身持久力と部分的な酷使に筋肉が耐える筋持久力。

・調整力

バランスやボールへの反応など上手い下手。

・瞬発力

筋力を短時間に発揮させる能力。筋力だけでなくスピードも必要。

・柔軟性

身体の柔らかさ。

第 章

調査研究

「現場実習を通じた課題の
確認と考察」

第4章 調査研究「現場実習を通した課題の確認と考察」

1 研究の目的

進路指導部では、これまで本校3学年の現場実習評価表を基に、生徒の成果や課題などをつかむことと、現場実習先が本校の学校教育に期待していることは何かなどを把握することを通して、より良い現場実習並びに進路指導の在り方について研究してきた。

今年度の研究も、本校の第5次研究テーマ「社会参加・自立をめざした働く力の育成」を受け、3学年の現場実習評価表を基にした調査研究を通して、本校の現場実習について考えていきたいと考える。そして、それと共に今年度の3学年現場実習を進めるに当たっては、生徒の進路希望先の確定まで時間がかかるなどの課題もみられた。

そのため、今年度の3学年現場実習の一連の進め方についても、あわせて振り返るという反省も含めて、本校の現場実習並びに進路指導の進め方に対して、より職員の共通理解を深める一助になればと考え、本研究を進めてみたいと考えている。

2 研究の内容と方法

本研究を進めるにあたっては、3学年現場実習という学習を、いくつかの項目に分けて、その中で今年度の取り組み状況についてまとめてみることにしたい。

具体的な項目については、以下のようにわけてみたいと考えているが、研究の方法としては、現場実習評価表についての調査研究と3学年現場実習を進めてきた中での経過についてもあわせて記述するという形で、今後の現場実習の在り方について考えていきたい。

＜本研究を進める上での項目立てについて＞

- (1) 3学年現場実習先（進路先）決定までの流れ
- (2) 3学年現場実習先の傾向
- (3) 3学年現場実習評価表について ＜ 調査研究 ＞
- (4) 現場実習全体を通して

3 研究結果と考察

(1) 3学年現場実習先（進路先）決定までの流れ

本校の進路決定までの流れとしては、2年生の後期現場実習終了後、具体的には、10月くらいから第2次進路希望調査（最終）を保護者に配布し、生徒本人と保護者で話し合って卒業後の進路希望を決めてもらうというスタイルをとっている。

今年度の3年生の進路希望調査について表1にまとめてみた。

○表1 3年生の進路希望先について（2年次の第2次進路希望調査より）

	男	女	計
就職（一般就労）	4名	2名	6名
福祉的就労	7名	5名	12名
未定	5名	1名	6名
計	16名	8名	24名

表1の結果、未定者が6名いた。それ以外でも進路希望と生徒の実態が合っていないのではないと思われるものもあり、この進路希望調査を基にさらに、生徒本人、保護者と学級スタッフなどで話し合いを重ねた。また必要に応じて進路担当者が生徒や保護者との個別懇談に加わったり、保護者の福祉施設見学に同行するなどして情報提供に努めた。

このような過程を経て、2年生の3学期までに具体的な進路先（3年現場実習依頼先）を決定する予定であった。しかし今年度のケースでは、進路先を決めきれずに春休みに3件ほど家庭訪問を行って、進路希望の確認を行ったり、3年次の4月に入ってから生徒本人と福祉施設の見学を行い、進路先を決定するなど、例年よりも進路希望先の決定が遅れてしまった。

結局、このような遅れの中で、4月下旬に函館市にある福祉施設に3年生現場実習の依頼をしたところ、既に他の養護学校が実習生の日程を決めていたために、やむを得ず夏休みに実習の日程を組まざるを得ない状況になってしまった。

夏休み中の実習は、生徒や保護者にとって負担となるため、できれば避けたいところである。今年度の3年生の進路先開拓を行ってみて感じたことだが、他の養護学校の現場実習開拓は確実に早まっており、本校もある程度その動きに対応しなくてはならないと考え、進路先決定に関しては、担任を中心とした学級スタッフによる生徒個々への進路に関する個別懇談を密にする必要がある。そういう意味では、今年度に関していえば、学年部会等での、生徒の情報交換並びに指導方法の確認について、もう少し時間をかけるべきだったと言える。（進路指導だけに限らずに。）学級スタッフ、担任間、進路担当と担任間などの話し合いを密にして、生徒を見守る目を増やしていくことが、生徒指導や進路指導に大切ではないかと考える。

進路希望先の決定については、デリケートな問題であり、あくまでも生徒本人・保護者の意思を尊重すべきである。しかし、保護者も積極的に情報収集に努める保護者もいれば、諸事情等でなかなか情報収集できない保護者もいるのが実際である。進路先決定までは、時間もかかる作業であるが、学校側の適切な支援が必要なケースも多い。

（２）3 学年現場実習先の傾向

進路指導部では、4月と5月の2ヶ月間を中心として現場実習先開拓を行った。表2は今年度の3年生の現場実習先である。

○表2 3 年生現場実習先について

	就労移行	継続B型	通所授産	通所更生	地域活動支援	計
自 宅	5 名	4 名	4 名		3 名	1 6 名
G H ・ C H		1 名	6 名			7 名
通勤寮				1 名		1 名
計	5 名	5 名	1 0 名	1 名	3 名	2 4 名

平成18年4月に障害者自立支援法（以下・自立支援法）が施行された。それに伴って従来の福祉施設も新体系に移行しつつある。自立支援法が施行された際には、5年間で新体系に移行することになっているが、表2をみるとこの段階では、日中活動の場としては、新体系の福祉施設等（就労移行支援事業所・就労継続B型事業所・地域活動支援センター＜市町村独自事業＞）での実習生徒が13名（約54.2％）であり、旧体系の福祉施設（通所授産施設・通所更生施設）での実習生が11名（約45.8％）という割合になっている。

地域的には、函館市・渡島支庁・檜山支庁が主な実習先となるが、遠くは胆振支庁で3名、空知支庁で2名の生徒が実習を行った。（基本的には、出身市町村を基に開拓をした。）

また、今年度は、一般就労（企業）先での現場実習が行われなかったことも大きな特徴として取り上げられる。

前項の表1では、進路希望に関して就職希望者6名、未定6名、また福祉的就労希望と記入しながらも就職にチャレンジするかどうか迷う生徒もいて、2年次では、就職希望の生徒もある程度の割合でいた。しかし、生徒との個別懇談等で具体的に就職にチャレンジする心構えについて確認していった結果、福祉的就労に進路変更する生徒も多かった。そのうちの1名は、

実際に就職への適性を判断するために2年生の3学期に体験的に職場実習を行った。実習終了後、「自分から職場の方とコミュニケーションをとることに自信が持てない。」との話をして、福祉的就労に進路変更したケースもあった。

結果的に3年生で職場実習に取り組む生徒はいなくなった。ただ、いろいろな可能性も考慮して、例年行っている3年生の職業相談については、5月中旬に行い、生徒4名が参加した。函館公共職業安定所の就職促進指導官2名と面談し、求職登録を行った。

(3) 3学年現場実習評価表について

3年生現場実習評価表は、実習先に記入していただいた評価表を基に、生徒の日常の学習状況の取り組みが、実際どのように社会生活で生かされているのかを把握したいと考え、本項目では3学年現場実習評価表の結果を基に、本校の進路指導のあり方について考察してみたい。

今回、3年生24名全員の実習先から評価表をいただいた。そのうち1名は、作業班によって2カ所分の評価表をいただいた。また、再実習者が2名いたため、その2名はそれぞれ2カ所の実習先から評価表をいただいている。今回は、実習先の貴重な意見として、それら3枚の評価表も加えて27カ所分の評価表から、3年生の評価の特徴を考えてみたい。

○表3 3年現場実習評価表<施設利用・GH等実習生徒用> (27カ所分)

< 以下の5段階で実習先に評価を依頼した。ー作業面・生活面ともにー >

...良い。そのとおりである。一人でできる。自主的にできる。

○...普通である。指示や声がけなどがあればできる。

...努力を要する。部分的な援助を要するが、何とかできる。

×...非常に劣る。ほとんどできない。しようしない。援助を要する。

?...今回の実習期間だけでは、判断できない。評価場面がなかった。

<作業面に関して>

		評 価 項 目	評 価
作業能力および態度	1	意欲的に仕事に取り組んでいた	15名、○12名
	2	仕事のえり好みをしなかった	15名 ○10名 2名
	3	根気強く、集中して仕事をしていた	14名 ○13名
	4	ていねいに仕事できた	12名 ○14名 1名
	5	手早く、仕事できた	8名 ○15名 4名
	6	仕事に対する理解はよかった	15名 ○10名 2名
	7	必要なことは自分から聞くことができた	6名 ○16名 4名 ? 1名
	8	注意や指示を素直に聞いていた	16名 ○10名 1名
	9	安全に気をつけて仕事をした	14名 ○13名
	10	仕事の準備や後始末をきちんとできた	9名 ○17名 1名
生活態度	1	あいさつや返事ができた	15名 ○ 8名 4名
	2	はきはきと受け答えができた	12名 ○ 8名 7名
	3	気分がむらがなく安定していた	14名 ○13名
	4	時間を守って行動できた	16名 ○10名
	5	身なりがきちんとしていた	18名 ○ 9名

<生活面に関して>

		評 価 項 目		評 価	
身 辺 処 理 ・ 日 常 行 動	1	起床・就寝	決められた時間に起床・就寝できた。	6名、○2名	2名 ? 1名
	2	食 事	偏食をせず食べることができた。	11名	○5名
	3		行儀良く食べることができた。	14名	○3名 1名
	4	健 康	身体の不調を訴えることができた。	3名	○2名 1名 ? 9名
	5	清 潔	洗顔・歯磨、手洗い、排泄、入浴等きちんとしてきた。	5名	○5名 2名
	6		身の回りの清潔に気がつけた。	7名	○9名 1名
	7	洗 濯	汚れ物を手や洗濯機で洗うことができた。	2名、○5名	
	8		汚れ物をためず、計画的に洗濯ができた。	6名、○3名	
	9	掃 除	部屋や分担区域の掃除をきちんとしてきた。	6名	○6名 1名
	10	整 理	使った物は元の場所にしまうことができた。	8名	○8名 1名
	11		持ち物の管理や整理整頓ができた。	11名	○7名
	12	身だしなみ	衣服の着脱ができた。	17名	○2名
	13		衣服や頭髮の乱れに気をつけることができた。	12名、○7名	
	14		天候・気温にあった衣服の調節ができた。	15名、○5名	1名
	15	時 間	まわりの動きを見て、それに合わせて行動できた。	11名、○7名	4名
	16		時計を見ながら、それに合わせて行動できた。	8名、○7名	3名 ? 3名
	17	金 銭	買い物等でお金を使うことができた。	4名、○6名	
	18		計画的にお金を使い管理もできた。	4名、○2名	3名 ? 1名
意 思 交 換	1	あいさつ	朝夕のあいさつやお礼等のあいさつができた。	12名	○9名 2名
	2	返 事	はきはきとした返事・受け答えができた。	11名	○8名 4名
	3	言 語	必要なことや困ったことは自分から聞いた。	11名	○6名 5名 ? 1名
	4		場や相手に応じた言葉づかいができた。	15名	○5名 2名 ? 1名
集 団 へ の 参 加	1	集 団	集団の決まりを守って生活できた。	14名、○6名	2名
	2		集団への参加がスムーズにできた。	9名、○9名	4名
	3		集団の中でトラブルはなかった。	16名、○5名	1名
	4		集団の中で情緒的に安定して行動できた。	17名、○5名	

生活面については、すべての実習先で評価をしていただいたわけではなく、評価できる項目のみ評価をしていただく形にした。

表3の現場実習評価表について、結果の考察をしていくことになるが、いくつかの区分ごとに見ていきたいと思う。具体的には、「作業面に関して」を「作業能力及び態度」と「生活態度」の2区分に分けて考えていく。

そして、「生活面に関して」を「身辺処理・日常行動」、「意思確認」、「集団への参加」の3区分に分けて考えていきたい。

ア 「作業面に関して」の結果と考察

作業面の評価に関しては、27か所の実習先に全ての項目を記入していただいた。

ここでは、「作業能力および態度」の10項目についての評価結果を考察をする。また、「生活態度」の5項目の評価結果を考察する。

(ア)「作業能力および態度」の結果と考察

[結果]

「作業能力および態度」の10項目のうち、まず、評価が高い項目について着目していく。

具体的には、「良い。()」の数を基にみていくことにする。

< 評価の高い項目 > (27名中)

- ・「注意や指示を素直に聞いていた。」 ... 16名 (約59.3%)
- ・「意欲的に仕事に取り組んでいた。」 ... 15名 (約55.6%)
- ・「仕事のえり好みをしなかった。」 ... 15名 (約55.6%)
- ・「仕事に対する理解はよかった。」 ... 15名 (約55.6%)

以上の4項目の評価が高かった。

次に、同じく10項目のうち、低い評価項目について着目していく。具体的には、「努力を要する。()」の数を基にみていくことにする。

< 評価の低い項目 > (27名中)

- ・「手早く、仕事ができた。」 ... 4名 (約14.8%)
- ・「必要なことは自分から聞くことができた。」 ... 4名 (約14.8%)

以上2項目の評価が低かった。

[考察]

良い評価を受けた4項目のうち、「注意や指示を素直に聞いていた。」「意欲的に仕事に取り組んでいた。」「仕事のえり好みをしなかった。」の3項目については、平成18年度と平成19年度3年生の現場実習評価表でも、評価の高い項目の上位3項目に入っていた。

< 昨年度の本校研究紀要「創」第11号より >

この3項目は、事前学習等で現場実習の心構えを指導することや普段の作業学習での生徒の取り組む姿勢を指導することなどを通して、これらの項目の力を高めることができると思われる。

「仕事に対する理解はよかった。」も良い評価を受けた。今回は、全員が福祉的就労での実習となった。実習先の職員側で生徒の実態に適した作業を用意してくれた側面もあるかもしれないが、生徒たちのがんばりは評価できる。「仕事への指示理解」については、学校で指導する場合は、「わかりやすい簡潔な指示の理解」が基礎となると思われるが、徐々に指示の言葉がけを減らして、生徒本人に仕事への取り組みを考えさせたり、また、より複雑な指示を与えるなど、指導上工夫する余地はいろいろあるのではないかとと思われる。

評価の低い項目としては、「手早く仕事ができた。」と「必要なことは自分から聞くことができた。」の2つが上げられる。この2つの項目については、過去3年間(平成18

年度～20年度)とも評価の低い項目の下位3項目に該当している。

「手早く仕事ができた。」という項目で、「努力を要する。()」となった4名については、「ていねいに仕事ができた。」では、「努力を要する。()」の評価を受けてはいない。そのため、ていねいさを重視した仕事の取り組みをしたと考えられ、今後課題は改善されていく可能性がある。

「必要なことは自分から聞くことができた。」の項目では、養護学校の現場と福祉施設の現場では、職員数に違いも側面としてはあるのかもしれない。学校では、ある程度手厚い指導体制があり、生徒の様子を見て、声かけ等で支援できるが、それとともに生徒が受け身になっている面もあるのではないかと考えられる。やはり、3年間を通して、少しずつ生徒が自ら考えて行動できるようになるための支援を、今後も考えていかななくてはならない。(例えば、生徒が作業中困っている時に、あえて声かけをしないで、見守るのも一つの方法かもしれない。)

(イ)「生活態度」の結果と考察

[結果]

「生活態度」の5項目のうち、まず、評価が高い項目について着目していく。

具体的には、「良い。()」の数を基にみていくことにする。

<評価の高い項目> (27名中)

- ・「身なりがきちんとしていた。」 ... 18名 (約66.7%)
- ・「時間を守って行動できた。」 ... 16名 (約59.3%)

以上の2項目の評価が高かった。

次に、同じく5項目のうち、低い評価項目について着目していく。具体的には、「努力を要する。()」の数を基にみていくことにする。

<評価の低い項目> (27名中)

- ・「はきはきと受け答えができた。」 ... 7名 (約25.9%)
- ・「あいさつや返事ができた。」 ... 4名 (約14.8%)

以上2項目の評価が低かった。

[考察]

「生活態度」の項目は、仕事をしていく上で身につけておくことが望ましい能力といえる。その中で、評価の高い項目の中に「身なりがきちんとしていた。」という項目がある。今年度の3年生は、半数以上が食品に関わる現場実習に参加したことを考えれば、衛生面もあわせて評価できる。(今年度に関しては、新型インフルエンザ対策のための学校や寄宿舎での衛生管理対策が効果を発揮した面もあるかも...。)

「時間を守って行動できた。」についても、2～3週間という短い実習期間ではあるが、緊張感を持って取り組んでいたと良い評価ができる。

「努力を要する。()」の評価が多かった「はきはき受け答えができた。」が7名と全体の4分の1近くに上がった。特記事項では、「休み時間は友達と元気に談笑しているが、仕事の時の声は極端に小さい。」という評価もあった。

「はきはき」というのは、個人的な生徒の印象というものもあると思われるが、巡回時で話を伺ったかぎりでは、深刻な状況とまでは確認していない。ある程度時間をかけることで、環境に慣れて緊張がとれることは考えられる。

「あいさつや返事ができた。」は、「努力を要する。()」の生徒が4名いた。4名とも全くできないという状況ではないが、やはり返事は、仕事の進行を確認するためにも必要なことであり、普段からしっかり返事やあいさつができることが望ま

しい。学校でも「日常生活の指導」を中心として作業学習その他で指導していくことが大切と考える。

イ 「生活面に関して」の結果と考察

生活面の評価に関しては、自宅からの通所の生徒などでは、未記入または一部のみの記入という評価表も多かったため、そのため合計が27名になっていない。ここでは評価を受けた数のみで結果の考察をしていく。

ここでは、「身辺処理・日常行動」の18項目、「意思確認」の4項目、「集団への参加」の4項目の3区分に分けて、それぞれの評価結果を考察する。

(ア)「身辺処理・日常行動」の結果と考察

[結果]

「身辺処理・日常行動」の18項目のうち、評価の高い項目について上げてみる。

具体的には、「良い。()」の数を基にみていくことにする。

- ・「衣服の着脱ができた。」 ... 17名
- ・「天候・気温にあった衣服の調整ができた。」 ... 15名
- ・「行儀良く食べることができた。」 ... 14名

以上3項目の評価が高かった。

次に、同じく18項目のうち、評価の低い項目に着目していく。具体的には、「努力を要する。()」の数を基にみていくことにする。

- ・「まわりの動きを見て、それに合わせて行動できた。」 ... 4名
- ・「時計を見ながら、それに合わせて行動できた。」 ... 3名
- ・「計画的にお金を使い管理もできた。」 ... 3名

以上3項目の評価が低かった。

[考察]

「衣服の着脱ができた。」と「天候・気温にあった衣服の調整ができた。」の「身だしなみ」の2項目が良かった。GH等の地域生活を送る際は、ある程度自分一人で、衣服の着脱での温度調整が必要となる。学校生活でも、「日常生活の指導」などを中心として生徒に適切な服装を整えるよう声がけしていくことも場合によっては必要なのかもしれない。

「行儀良く食べることができた。」は、GH等の利用者はもちろんのことだが、自宅から施設通所するケースでも昼食を他の利用者の方と食べることになるため、食事のマナーで良い評価を受けたことは良かったといえる。

「努力を要する。()」の項目では、「まわりの動きを見て、それに合わせて行動できた。」が4名、「時計を見ながら、それに合わせて行動できた。」が3名と時間にかかわる2つの項目の評価が低かった。このうちの2名の生徒は、両方の項目が「努力を要する。」との評価であった。巡回時での評価では、やや受け身的な姿勢との評価であった。そのため、ある程度経験を積むことで見通しを持って主体的に行動することができるようになると思われる。

「計画的にお金を使い管理もできた。」の項目については、今年度も含めて3年連続で評価が低い項目となった。実際、学校生活でお金を使う場面は多いとは言えないが、学習の工夫で、将来の社会生活と金銭との関わりを伝える工夫が必要であると思われる。

(イ)「意思交換」の結果と考察

[結果]

「意思交換」の4項目のうち、評価が高い項目に着目していく。具体的には、「良い()」の数を基にみていくことにする。

・「場や相手に応じた言葉づかいができた。」 ... 15名

以上の項目の評価が高かった。

次に、同じく4項目のうち、評価の低い項目に着目していく。具体的には、「努力を要する。()」の数を基にみていくことにする。

・「必要なことや困ったことは自分から聞いた。」 ... 5名

・「はきはきとした返事・受け答えができた。」 ... 4名

以上2項目の評価が低かった。

[考察]

「場や相手に応じた言葉づかいができた。」の項目で「良い。」の評価が高かった理由としては、普段の学校生活の様子を観察しても、3年生は学校職員と友達との言葉の使い分けをしている生徒が多く、実習先においても言葉の使い分けを実践できたケースが多かったのではと予想される。

評価の低い項目では、「必要なことや困ったことは自分から聞いた。」で「努力を要する。」の評価を受けた生徒が5名いた。そのうちの4名はGH等自宅外で実習した生徒である。2週間という実習期間では、施設職員とのコミュニケーションが十分図れないこともあったと思われるが、卒業後は、生活面の助言を受けることになるため、必要な事があれば遠慮無く職員に伝えるべきであることを事前学習等で指導しておく必要がある。

「はきはきとした返事・受け答えができた。」の項目では、「努力を要する。」との評価を受けた生徒が4名いた。環境に慣れるに従い、ある程度課題が解消されるケースが多いと考えられる。ただ、その中の1名については、同居するGHの利用者の方に対して、慣れてくるとあいさつをしなくなるなど、あいさつや返事が乱れてきたとの指摘を受けた。ケースによっては、個別指導をしっかりとしていく必要がある。

(ウ)「集団への参加」の結果と考察

[結果]

「集団への参加」の4項目のうち、評価が高い項目に着目していく。具体的には、「良い()」の数を基にみていくことにする。

・「集団の中で情緒的に安定して行動できた。」 ... 17名

・「集団の中でトラブルはなかった。」 ... 16名

以上2項目の評価が高かった。

次に、同じく4項目のうち、評価の低い項目について着目していく。具体的には、「努力を要する。()」の数を基にみていくことにする。

・「集団への参加がスムーズにできた。」 ... 4名

以上の項目の評価が低かった。

[考察]

「集団の中で情緒的に安定して行動できた。」「集団の中でトラブルはなかった。」の2項目で良い評価が多かった。実際、現場実習の巡回等では、「集団活動では、パニックなど大きな不適応行動もなく、現場実習に参加できた。」との評価を受けており、生徒もけじめを持って取り組めたと評価できる。

逆に評価の低い項目としては、「集団への参加がスムーズにできた。」で「努力を要する。（ ）」生徒が4名となった。特記事項に着目すると「自分から集団に話しかけない。」「集団への意識が希薄。」などの評価があった。集団活動については、環境に慣れるに従いある程度解消され则认为しているが、余裕があれば、社会参加の部分も事前学習に組み込むことも良いのかもしれない。

ウ 現場実習評価表の記述欄について

実習先に依頼する評価表については、表3の項目に対しての記号での評価以外に、記述式の評価がある。ここでは全部を掲載することはできないが、記述欄の中に「学校教育・家庭教育で身につけておいた方がよい点について」との項目がある。その欄の中で、今回は一部抜粋して記載したい。

- ・「作業に対して明るく、真面目に取り組む姿勢が見られ、たいへん感心しております。先生方の指導をぜひ、見習いたいと思います。ありがとうございました。」 <通所授産>
- ・「何事にも協調性が必要と思われます。」 <地域活動支援センター>
- ・「訴え・報告・相談などの必要な内容について、相手に伝えようとする本人の気持ちを丁寧に受け止めることの繰り返しが必要かと感じました。日記や交換ノートなど文書でのやりとりから気持ちをくみ取れない難しさを感じました。あいさつ、笑顔、物事の前向きなとらえ方など直接場面が効果的に作用することが多いと思います。」 <継続B型>
- ・「清潔感はどうような場面でも大事な価値です。自分が平気かどうかとは別に、周囲はどう感じるかということに思い至るようになってくれたらと思います。」 <継続B型>
- ・障がい当事者が自立した地域生活を実現するために最も重要なことは、人と人との関係性の認識ではないかと考える。教科教育や就労支援の充実は当然として、こうした生活に係る支援の在り方が本人の今後にとって大切な教育内容になるのではないかとと思われる。この度の実習を通して感じたことであるが、作業や一般的な生活知識は十分に身につけているものの、人と人との関係性の構築の面で課題となる点が散見されたので、その辺の支援の充実を図ることができればと願っている。 <継続B型>
- ・あいさつや言葉づかい等の礼儀作法を身につけて、社会に出るという意味合いをしっかりと理解できるようになれば良いと思います。又、食べ物や調理に関して関心を持っていれば良いと思います。 <通所授産>
- ・早い段階で、働く場の見学や実習に取り組む事で、社会へ出て行くという自覚ができるのではないのでしょうか。1日だけでも自信につながると思います。 <就労移行>
- ・日常的な生活行動（起床・洗面・食事・入浴・排泄）が、ある程度自立できるよう実習前に習得できていればと思います。また、就労に関しての意識が高まるように、たくさんの情報や知識などを伝えていただければと思います。 <通所更生>
- ・わからない事は聞くという事を教えてほしい。声をかけられるまで動けないというのは、就労に向けていくには難しいと思われるので、周りが先に動き、教えるのではなく、まずは本人から動けるようにしてほしい。 <就労移行>
- ・立ちっぱなしの作業がほとんどなので、体力をつけてほしい。午後からは疲れが見えた。 <就労移行>
- ・就労に対する意識付け。軽度の利用者さんも含め健康管理（体調管理）が課題となる方が多いです。学校生活から離れると運動の機会が減ることになり、自発的に体力づくりを心がけることは困難です。目的のある体力づくりを身につけていただきたいと思います。 <通所授産>
- ・社会的なマナー・ルールの習得。就労（働くことに対して）の意識付け、障害認知。 <通所授産>

(4) 現場実習全体を通して

3年生現場実習は、主に6月下旬から10月中旬にかけて、数名ずつが実習に取り組んだ。しかし、結果的に再実習者が2名出た。そのうち、女子生徒1名は、旧体系の通勤寮（定員男女20名）が新年度に新体系のGH（定員男子10名）に移行することに伴い、卒業後の利用が難しくなり、再度進路希望の話し合いを行い、自宅から地元の地域活動支援センターで実習を行い、内定を得た。

もう1名の生徒は、「本人の実習希望があいまいであり、卒業後の受け入れはできない。」「（学校側では）本人が希望する卒業後の生活スタイルを受け止めて、現場実習につなげることができるならば、より効果的な現場実習になるのではないか。」「本人の一般就労がしたいという希望に対して、ただだめというだけではなく、何がどう難しいのか、そこから考えることが、今後につながるのではないか。」との話があった。＜要約すると、学校の進路指導が適切だったのかどうかを指摘された。＞

この生徒は、その後11月下旬から別な福祉施設で実習を行い、内定を得た。しかし、本人の意思の尊重を含めて、より良い進路を考えていくことの難しさを感じた。やはりお互いが納得するまで時間をかけて話し合いをすることは必要なだろうと思う。

このことから、福祉的就労での現場実習も、適切な進路指導を行わないと簡単には、進路決定には結びつかないと言える。（一般就労への現場実習も当然厳しい。）

最終的に、今年度の3年生（11期生）の進路先は、表4のように確定した。

○表4 3年生進路先について (2010年2月19日・現在)

	就労移行	継続B型	自立訓練	通所授産	地域活動支援	進学	計
自宅	3名	7名		1名	4名	1名	16名
GH・CH		6名	2名				8名
計	3名	13名	2名	1名	4名	1名	24名

表2との比較で見ると、就労移行支援事業所の5名のうち、1名は、同じ事業所内の就労継続B型事業所の利用を希望した。またもう1名については、函館市にある道立高等技術専門学院（販売実務科）に進学希望である。（販売実務科の受検には、職業相談等で、求職登録が必要である。）

就労継続B型事業所が、5名から13名へと大幅に増えていることについては、現場実習先は、（旧体系の）通所授産施設で実習をしたが、卒業後の利用については、同じ法人内の（新年度開設の）就労継続B型事業所を利用することが決定したことなどによるものである。

同じく新体系の自立訓練事業所の2名についても、（旧体系の）通所授産施設で実習をしたが、卒業後の利用については、同じ法人内の自立訓練事業所を利用することが決定したことによるものである。

4 まとめ

本研究を通して、生徒一人一人の意思を大事にした進路指導の難しさを感じた。生徒の中には、現場実習終了後に、「本当に、この進路で良いのか？」との悩みを持つ生徒も数名いた。そういう生徒には、学級担任をはじめとした学級スタッフや進路担当者との個別面談を行い、生徒の進路希望の確認を行ってきた。

進路に悩みを持つことは、ある意味当然のことではある。そのようなケースでは、生徒の話を聞き、どのような進路が望ましいかを一緒に考えていく姿勢が大切だと思われる。指導には時間もかかるだろうが、本校が高等養護学校という教育機関であるため、生徒の進路の明確化が本人

の学校生活の目標につながる側面もあるのではないか。

そしてその指導は学級担任や進路担当者だけに任せるのではなく、学級スタッフ間、担任間、進路と担任間、学年部会などの話し合いを密にしていけることが、生徒指導や進路指導に大切ではないかと考える。そういうことでいえば、指導者スタッフ間の情報共有を密にするために個別の教育支援計画を基にした話し合いの回数を増やすことも方策の一つとしては考えられるかもしれない。

現場実習評価表の項目の考察については、一部意見も記述するなど若干踏み込んだ表現をしたが、今後の生徒への進路指導の参考になればと考え記述した。今年度の3年生に関しては、今回課題として取り上げた「努力を要する。()」の項目もあったが、「非情に劣る。(×)」の評価は一つもなく、どの項目(作業面15項目、生活面26項目、計41項目)をみても「努力を要する。()」より「良い。()」の評価が多く、全体的に頑張っていたと評価できる。

今後の本校の課題として、道内の養護学校高等部の卒業後の進路決定までの流れが早まっていることへの対応が必要になってきている。また、本校の第5次研究テーマ「社会参加・自立をめざした働く力の育成」にもかかわる部分であるが、近年は、国連の障害者の権利条約で提唱されているノーマライゼーションやインクルージョンの流れもあり、「障がいを持つ人が地域生活を送るために必要な力の育成」という部分をどう本校として伸ばしていくのかということも課題となる。

そういう流れの中、本校では、今年度の現場実習反省を受けて、今後の現場実習のあり方をどのように組み立てていくのかを検討してきた。各学年で話し合った意見を基に、教育課程検討委員会で検討した案を、職員会議で全体の意見を取り入れて次年度の現場実習の組み立てを考えた。大きく変わる部分としては、2学年の現場実習の回数を2回から1回にした部分が、大きな変更点ではあるが、今後、実際取り組んでいく中で、より良い現場実習や進路指導のあり方を検証していく必要がある。それに伴って進路指導の研究も、それにあわせた形のスタイルで取り組む必要があると考えている。

<参考文献>

- 「図解障害者自立支援法早わかりガイド」 著者：山内一永 氏 (日本実業出版社)
- 平成20年度 本校研究紀要「創」TUKURU 第11号

第 章

寄宿舎の研究

1 はじめに

北海道教育委員会の「個別の教育支援モデル」の構想を受け、本校寄宿舍では4年前より個別の指導計画、フェイスシートの作成などを教務と連携して行ってきた。特別支援教育の推進が進む中、生徒の卒業後を見据えた今まで以上の支援計画の設定、保護者などの関係機関との連携が求められている状況である。

寄宿舍においては必要に応じて随時、作成方法などについて検討し、見直すなどの措置を取ってきたが、今年度は教育支援計画モデルの理念を再確認し、より良い支援計画の設定、関係機関との連携を図ることに重点を置くこととした。

一年間をかけて管理職、教務部などの関係部署と協議して不具合の改善、よりよい書式への改訂や支援手帳のあり方などの検討を行うことを年度当初に打ち立てた。

2 今年度の取り組みについて

今年度は以下の点を柱に研究を進めることとする。

(1) 関係書類の再検討について

関係書類の再検討について個別の支援計画を作成するに当たっての評価基準、その他の書類について職員へのアンケート、教務・研修部との話し合いなどを通して意見を集め、不具合などを部内での検討、管理職、関係機関との協議により、より良い書式を作成していく。

上記の研究を進めていく中で出てくる課題や成果を検討、再確認し、研究を進めることとした。

3 実際の取り組みについて

年度当初に寄宿舍内において書式の改訂、支援手帳の受け渡しの改訂を今年度実施することを管理職と協議し、周知した。

寄宿舍内では舎室経営計画、個別の指導計画、フェイスシートの具体的な改訂作業を二学期から三学期にかけて管理職、部内で検討し、行った。

舎室経営計画は従来の書式（＊別紙 参照）では個別の指導計画と重なる部分（IQ、障害及び疾病）が多くあったため、新書式案ではそれを削除することとした。また、書式内でも区分けがあいまいな部分があったため、それを統一した。（舎室目標と舎室経営方針、舎室目標反省と経営方針反省）＊別紙 参照

個別の指導計画では、従来の書式にあった支援段階のチェック欄を文書開示の際の分かりやすさを考え、教務と合わせ、削除することとした。＊別紙 参照

これらの提案を管理職、教務部と寄宿舍研修部が協議して原案を作成し、寄宿舍内でも意見を吸い上げることができるよう一定期間回覧し集約した。意見をもとに若干の修正を加えた。

4 研究のまとめと今後の課題

今年度は書式の改訂に重点をおき、研究を進めてきたが今後も書類を作成、使用していく中で不具合があれば随時協議して改訂していきたい。書式が改訂されたことによる不具合が起こることは十分予想されるため、今後、年度の終わりに意見の取りまとめを行い、今後に生かしていきたいと考える。

書式の不具合については以前から話が出ていたため、もう少し早く改訂作業を行うことができていたら良かったと考える。

今回行った書式内容のスマート化は単なる記入方法の簡素化ではなく、あくまでも保護者や関係機関に対しての指導内容や方針等の情報の分かりやすさ、明確さを考えて行った。

特別支援教育の推進にともなって今後多岐にわたる障害を持った生徒の指導方法についての専門性を高めていくと同時に、保護者、外部の関係機関に対しての窓口の一部となる指導計画等の書類についての検討は、今後も必須事項となると考える。

<引用・参考文献>

- ・個別の教育支援モデル（北海道教育委員会）

<http://www.dokyoι.pref.hokkaido.lg.jp/hk/tkk/kobetsunokyōiikusienkeikaku>

- ・「個別の教育支援計画」と障害ケア：特別支援教育と障害児者の支援

（清水貞夫・相澤雅文著 / かもがわ出版）

- ・障害者の個別支援計画の考え方・書き方：社会福祉サービス論の構築と施設職員の専門性の確立に向けて

（松端克文著 / 日総研出版）

- ・特別支援教育の理念と実践：早期から望ましい行動を育むために

（コレッド・ドリフテ著・納富恵子監訳 / ナカニシヤ出版）

H 2 1 年 度 舎 室 経 営 計 画

別紙

男子○室 舎室担当名 ○ ○ ○ ○

舎室の実態						
舎室目標				舎室経営方針		
舎室の構成	生徒名 学科・学年	IQ	障害併せ持つ障害 及び疾病	指 導 方 針	反 省	
	□□□□ 科 ○年		てんかん 自閉的傾向 喘息 など			
舎室目標反省				経営方針反省		

H 2 2 年 度 舎 室 経 営 計 画

男子○室 舎室担当者名

舎 室 構 成	生徒氏名	学年・学科	生徒氏名	学年・学科
舎 室 の 実 態	○○○○（３年生） ○○○○（２年生） ○○○○（２年生） ○○○○（１年生）の４名で構成されている舎室である。			
舎 室 経 営 目 標	（１） （２） （３）			
舎 室 経 営 目 標 反 省				

平成 21 年度 個別の指導計画

○子○室 生徒名 ○ ○ ○ ○ 学年・学科 ○年・○○科 I Q - ○ ○ ○ 舎室担当名 ○ ○ ○ ○

区分	項目		支援段階				理解		実態
			単独	言葉	介助	不明	方法	意味	
A 身 辺 自 立	共	起床	✓						
	共	洗面	✓						
	共	歯磨き	✓						
	共	入浴	✓						
	共	排泄	✓						
	共	生理の手順（女子）	／	／	／	／	／	／	
	共	更衣	✓						
	共	食事		✓					
	共	整理整とん		✓					
	共	洗濯	✓						
	共	清掃	✓						
B 社 会 性	共	公共機関の利用							
	共	交通機関の利用							
	共	買物							
	共	小遣い帳の記入							
	共	集団活動							
	共	日課の理解							
	共	決まり							
	共	公衆電話の利用						／	
C 健 康 安 全	共	交通ルールを理解							
	共	災害時における理解							
	共	病気の予防							
	共	不調の訴え							
	共	衛生に関すること							
	個	定時服薬	／	／	／	／	／	／	
D 対 人 関 係	共	交友、異性関係							
	共	言語の受容、表出							
	共	言葉遣い							
	共	礼儀作法							
	共	あいさつ・返事							

< 備考 >

余暇 ...
性格・行動 ...

○ ○ ○ ...

- 観点（区分・項目）については、手引きにある実態評価基準による。
- 「共」は全生徒共通チェックの指導内容である。その他必要に応じて「個」で個別チェックの指導内容を加えることができる。
- その他の欄には、「余暇時間の過ごし方」について必ず記入する。また、観点の区分・項目に当てはまらないものも記入する。

区分	前期指導目標	指導経過	後期指導目標	評価
A 身 辺 自 立				
B 社 会 性				
C 健 康 安 全				
D 対 人 関 係				
【備考（前期）】			【備考（後期）・引継ぎ事項】	

個別の指導計画

男子○室 生徒名 ○○○○ 学年・学科 ○年○○科 I Q - ○○ 舎室担当名 ○○○○

区分	項 目	実 態	前期指導目標 / 指導の手立て
身 辺 自 立	起床 洗面 歯磨き 入浴 排泄 生理の手順（女子） 食事 整理整頓 洗濯 清掃		
社 会 性	公共機関の利用 交通機関の利用 買物 小遣い帳の記入 集団活動 日課の理解 決まり 公衆電話の利用		
健 康 安 全	交通ルールを理解 災害時における理解 病気の予防 不調の訴え 衛生に関すること 定時服薬		
対 人 関 係	交友、異性関係 言語の受容、表出 言葉遣い あいさつ、礼儀		
備 考			

区分	前 期 評 価	後期指導目標 / 指導の手立て	年 間 評 価
身 辺 自 立			
社 会 性			
健 康 安 全			
対 人 関 係			
備 考			

第 章

研究の成果と課題

1 今年度の取り組み

昨年度までの第4次研究「授業作りに生かす、教師の専門性の向上を追求する実践的研究」においては、様々な実態の生徒一人一人の力を伸ばすための効果的な教材教具のあり方や指導方法についての研究が多く進められた。特に昨年度は、次年度から教育課程が一部変更されることを受けて、その準備として“合わせた指導における国語・数学的な内容の指導”に関する研究が多く行われた。合わせた指導における個々に応じたアプローチは、生徒の成長という視点を持って見る限り、一定の効果・成果があったと言える。しかし、より効果的な指導を展開するにあたっての指導内容の整理や評価の観点の明確化など、指導者側の課題も残った。

そして今年度、「社会参加・自立をめざした働く力の育成」を研究主題とし、3力年の計画で第5次研究をスタートさせた。特に、今年度は国語と数学の授業が新設され、それに伴い生活単元学習の授業時数が減るといった教育課程の一部変更がなされたことを受けて、教科指導における実践的研究も進められた。これにより、合わせた指導と教科指導が相互に関連し、より効果的な指導をもって生徒の働く力を伸ばしていくための研究が、昨年度よりもさらに具体的に、かつ本格的に始まったといえる。

これに合わせて、研究組織についても一部改めた。課題研究では、これまでの形態別グループで研究を進める方法に対して様々な意見があったことから、今年度から学年別グループへと改め、各学年で行うこととした。一方、昨年度の研究から課題が残っていた体力づくり部会のプロジェクト研究は今年度も継続し、昨年度の教育課程検討委員会プロジェクトチームが中心となって改訂にあたった指導内容表（平成21年度試案としてまとめあげた）については、研究推進委員会が中心となってさらなる検討を重ねた。また、長期にわたって進路指導部が進めている調査研究と、寄宿舎が行っている研究についても継続して行うこととした。

2 成果と課題

（1）課題研究

1 学年部会では、合わせた指導（そのうち生活単元学習と作業学習）と教科指導（そのうち国語と数学）における指導内容の関連を洗い出した。対象生徒が1学年であること、国語と数学の授業実践が初年度であることを受けて、年度当初から連携を意識して指導にあたった過程を独自の記録シートにまとめる取り組みを行った。その結果、教科指導では基礎を、合わせた指導ではその応用をという流れがあり、これを効果的に結びつけて互いの指導を改めていく必要性を具体的に示すことができた。一方、その連携のあり方については計画的に行う必要があることも浮き上がった。

2 学年部会では、昨年度までの事例研究の流れを踏襲し、各学級で生徒のコミュニケーション能力を高めるための実践研究を行った。一人の生徒を対象として抽出し、合わせた指導、教科指導、その他の指導場面において、書く、読む、聞く、話すといった力を伸ばすための指導の工夫がまとめられている。日常的に指導を繰り返すことによってそうした力の向上が見られたと同時に、将来を見据えて今後重点的につけていきたい力は何なのか、どんな場面においても身につけた力を発揮できる（般化する）ためにはどのような指導が必要なのか、といった課題も浮き彫りとなった。

3 学年部会は、数学的な力を働く力としてつなげていくための指導のあり方について研究を進めた。数学と作業学習の指導をとおして、より効率的・効果的に力をつけさせるための指導の工夫を重ね、各学級の数学の授業において研究授業を行った。作業学習の教材を数学で用いるなどの工夫をし、数学で学んだことを作業学習で応用することができた生徒もいた一方、できなかった

た生徒もいた。理解力に差がある集団を指導することの困難さが目に見えた形となったが、この度の実践を踏まえて、個々の力を伸ばすための一層洗練された指導の研究が課題といえる。

(2) プロジェクト研究

体力づくり部会では、昨年度までのグループ別体力づくりの効果の検証、さらに様々な運動とおとしたバランスのよい体力向上を目指す指導についての実践研究を行った。これは昨年度も取り組んだ研究ではあるが、授業における実践回数が少なく検証に必要なデータが不足していたため、今年度も継続して行ったものである。生徒一人一人の障害や運動能力の多様化に伴い、これまで行ってきた一斉にマラソンというような全校生徒一斉・同一内容の指導ではなく、習熟度別グループを編成して指導にあたり、その効果を検証した。さらに、各グループにおいて持久力のみならず瞬発力、筋力、調整力といった様々な力を伸ばしていくための工夫を重ねた。その結果、グループ指導かつマラソン以外の運動も取り入れた指導の方が、生徒も意欲的に取り組み、体力の向上という観点からも望ましいという結論に達した。しかし、生徒の身につけたい力を明確にした上での指導内容の精選や指導の進め方については、今後も生徒の実態に応じて工夫を重ねていく必要がある。

研究推進委員会では、昨年度完成した指導内容表(平成21年度試案)の内容の検討を行った。各教科・形態部会においてそれぞれが関係する部分について、文言の加筆・修正・追加・削除などを行い、それを集約し「平成22年度版」として新たにまとめ上げることができた。授業に携わる全職員が検討に関わったことでより充実した指導内容表を作り上げることができたが、その具体的な活用はこれからである。より実用的なものとするためには、必要に応じて適宜部分的な修正を加えていくことも考えられる。

(3) 調査研究・寄宿舎の研究

進路指導部の調査研究では、現場実習評価表の項目の考察を中心に、現場実習や進路指導のあり方についての研究を行った。3学年生徒が現場実習先でいただいた評価を集計し、日常の学習や進路指導の効果がどの程度現れているのかを検証した。どの項目でも「非常に劣る」の評価となった生徒はおらず、全体的に努力していた結果がうかがえた。しかし、卒業が迫るにつれて自分の進路に自信が持てなくなった生徒もいたことから、評価項目に沿った指導のほかにも本人の進路意識を高め、方向性を明確にするための指導が必要である。本人の悩みや話を聞き、本人が納得できるような進路指導を指導者が一丸となって進めていくことは今後も大きな課題である。

寄宿舎の研究は、舎室経営計画と個別の指導計画、フェイスシートの書式について研究を行った。記入する職員をはじめ、保護者や関係機関に対してもわかりやすい書式を目指し、今後も研究を重ねていくことが望まれる。

3 次年度へ向けて

今年度は、教育課程の一部変更がなされた年であり、第5次研究の初年度でもあった。特に課題研究ではこうした状況に加えて、研究組織が改められたことや、3年間の見通しを立てて研究を行うことについて、多少の混乱もあった。しかし、各研究グループが趣向を凝らし、国語・数学という新たな取り組みに対して踏み込んだ研究を進めることができた。

今後、さらに多様な困難・課題を抱える生徒が入学してくることが予想される。また、依然として厳しい経済状況や雇用情勢は続いている。こうした現状や将来予測も踏まえて、より一層生徒の働く力を伸ばすための指導を展開していくために、指導者にとって今後の指導に生かすことができ、生徒に還元できる研究を進めていかなければならない。

あとがき

本年度の研究紀要がまとまり、ここに第 12 号として発刊できることは本校教職員全員の賜であると感じるところです。校内研究の推進役としての研究部には感謝しているところです。

「社会参加・自立を目指した働く力の育成」を研究主題に教育課程の編成と授業に充実を目指して第 5 次研究として 3 年間の 1 年目として 3 つの研究を柱に進めてきました。

課題研究：各学年による（国語、数学、生活単元学習、作業について）事例研究、授業研究、教材研究を 3 年間の見通しを持って計画。

プロジェクト研究： 生徒ここの運動能力に応じたきめ細かな取り組みを探る体力作りの見直し
指導内容表の検討

調査研究：進路指導部が「現場実習を通した課題の確認と考察」

生徒たちは、卒業後社会の一員として自立を目指し社会参加するために必要な「働く力」「生活する力」を、在学中から身につけるために必要な要素を、指導内容表を元に整理し授業の中で展開できるか仮説をたて研究を進めてきました。

最後になりますが、研究成果に関してはまだまだ不十分であり、引き続き研修が必要な点が多々あります。研究成果を今後とも本校の教育活動に役立てていくとともに、教員一人一人が研修に励む所存です。本校の教育推進のためにも、皆様にご一読賜り、ご意見、ご指導をいただければ幸いです。

平成 22 年 3 月

北海道今金高等養護学校教頭

佐々木 雅士

共 同 研 究 者

学校長 播磨 正一
教 頭 佐々木雅士
事務長 孰賀 守

< 教務部 >

1 学年 高佐 裕一、福寿 吉人、青野由香利、房川 洋平、矢倉 一
阿部いく子、丸山 充代、早坂 麗子、大口 香織、村井 拓斗
小林 吾一、藤倉 雄一、佐藤 広子、中島 朋之
2 学年産業科 安田 聡史、今野 優子、太田智恵子、熊谷 嘉朗、鈴木 美彩
2 学年農業科 金子 亘喜、渡邊 梨香、吉田 直樹、廣澤 和治
2 学年生活家庭科 山本 裕、天満 理恵、木村 幸子、安田美也子
水野 直子、渡辺小百合
3 学年 山田 賢一、田中 郁江、東海林栄徳、入田 貴弘、三条真知子
西牧 孝徳、若山 大輔、立田 江利、阿部 昌弘、武田 資
及川 文雄、小室 育恵、橘 晴美

< 舎務部 >

柳川 龍一、工藤 隆司、上山 真人、中野 寛、山田 直人
川村 洋二、伊藤 郁乃、和田 雅史、松谷さおり、清野 恵美
菅原 敏、山本 絵理、泉波 卓也、齋藤 直美、山内 和美
三澤麻衣子

< 行政 >

遠藤 史憲、山崎 直樹、川口 冬馬、森屋 香、紀伊奈津美
川崎 澄子、中村 和子、高野美智代、庫元 栄子

平成 2 1 年度 研究紀要

創

TSUKURU 第 1 2 号

発行者 北海道今金高等養護学校長

播磨 正一

発行日 平成 2 2 年 3 月 3 1

〒 0 4 9 - 4 3 0 4 北海道瀬棚郡今金町字今金 4 5 4 番地 1

T E L (0 1 3 7) 8 2 - 3 1 2 1

F A X (0 1 3 7) 8 2 - 3 0 9 2